

明海日本語

14

2009. 2

論文

- 意見述べにおける日本人の論理展開についての一考察……荻原 稚佳子 (1)
- WWWを対象にしたコンピュータ・ディスコース研究の試み……田辺 和子 (13)
- 新敬語「ス」の使用場面の拡大と機能の変化……………倉持 益子 (25)
- 書きことばにおける形容詞の使用状況
— 学習者と母語話者の比較 —……………木下 謙朗 (37)
- 韓国人日本語学習者の特殊拍の認知について
— 日本語母語話者との比較 —……………任 星 (49)
- 日本語母語話者と韓国人日本語学習者の感情表現
— プラス評価, マイナス評価に注目して —……………堀内 貴子 (59)
- 言語景観研究の現状について……………江 源 (67)
- 「キリスト・キリシタン」の意味と表記の変遷
— 国語辞書と青空文庫を中心に —……………李 明心 (77)
- 俳句歳時記にみる外来語……………山野 栄子 (85)

研究ノート

- ディベートにみられる終助詞「ね」「よ」「よね」の使用
— 日本語母語話者を対象に —……………鄭 智恵 (91)
- 日本語以外の言語を母語とする子どもと日本語教育
— 日本語指導における母語使用の必要性 —……………蘇 曉翠 (93)
- 中国人日本語学習者による促音の知覚判断方略について……孫 荃麟 (95)
- 商標の称呼のモーラ数が増加したときの類否判断に与える影響
— 語尾に「ス」「ズ」が付加して1モーラ増加した場合 — ……須賀 総夫 (97)
- 日本の多言語景観：デパートと歓迎ポスター……………井上 史雄 (99)
- Google ストリートビューを使っての言語使用調査
— 新宿区歌舞伎町の言語景観 —……………本間 勇介 (101)
- 『Google Scholar』の利点……………松田 直人 (103)
- 平成 20 (2008) 年度 卒業研究要旨……………荻原 稚佳子 (105)
- 編集後記……………井上 史雄 (121)
-

明海大学日本語学会

執筆者紹介（掲載順）

荻原稚佳子	明海大学外国語学部日本語学科	専任講師
田辺 和子	明海大学大学院応用言語学研究科博士後期課程	大学院生
倉持 益子	明海大学大学院応用言語学研究科博士後期課程	大学院生
木下 謙朗	明海大学大学院応用言語学研究科博士後期課程	大学院生
任 星	明海大学大学院応用言語学研究科博士後期課程	大学院生
堀内 貴子	明海大学大学院応用言語学研究科博士後期課程	大学院生
江 源	明海大学大学院応用言語学研究科博士後期課程	大学院生
李 明心	明海大学大学院応用言語学研究科博士後期課程	大学院生
山野 栄子	明海大学大学院応用言語学研究科博士前期課程	大学院生
鄭 智恵	明海大学大学院応用言語学研究科博士後期課程	大学院生
蘇 曉翠	明海大学外国語学部日本語学科	4年生
孫 荃麟	明海大学外国語学部日本語学科	4年生
須賀 総夫	明海大学大学院応用言語学研究科博士後期課程	大学院生
井上 史雄	明海大学外国語学部日本語学科	教授
本間 勇介	明海大学大学院応用言語学研究科博士前期課程	大学院生
松田 直人	明海大学大学院応用言語学研究科博士前期課程	大学院生

明海日本語

14

2009. 2

明海大学日本語学会

〈論 文〉

意見述べにおける日本人の論理展開についての一考察

萩原 稚佳子

キーワード：意見述べ、論理展開、冒頭型、末尾型、会話分析

1. はじめに

異文化間コミュニケーションで起きる誤解や理解の欠如の原因として、論理展開の違いが挙げられている。Scollon & Scollon (1995)によると、日本人をはじめとするアジア人が行うコミュニケーションでの論理展開は、帰納的 (topic-delayed) であるのに対して、西洋人は演繹的 (topic-first) であるという。そのため、演繹的な論理構成をする文化を背景とする人々にとっては、日本人のコミュニケーションは、何がポイントであるかが分からず、論理的でないと批判される。また、Kubota (1992) では、日本人学生は帰納的な文章構成をとっているにもかかわらず、読んで内容を理解する際には、帰納的な論理構成よりも、演繹的な論理構成のほうがわかりやすいとしている。

しかし、コミュニケーションにおける論理展開についての研究は、文章についての研究がほとんどであり、日本人の会話における論理展開については、Scollon & Scollon (1995) にアジア人の特徴としての記述がある程度である。そこで、文章における論理展開についての研究を概観した上で、日本人の会話において、意見を述べる場合に論理展開がどの程度帰納的、または、演繹的なのかを分析し、どのような属性が論理思考に影響を与えているのかを探ってみたい。

2. 論理展開についての先行研究

2.1 Kaplan の論理展開モデル

論理展開については、コミュニケーション論の対照修辞学 (Contrastive Rhetoric) の一研究分野であるが、それほど長い研究が成されてきたものではない。その発端となったのが、Kaplan (1966) の世界各言語の論理構造のパターン (図1) である。このモデルは、英語中心主義的なことや、あまりに単純化されたモデルであることで批判も多く浴びたが、語順や思考の順序は、各言語に特有で特徴的なものであるという考え方を広めた。

ただ、Kaplan (1966) の論理構造パターンの中に、「オリエンタル」の論理構造パターンがある

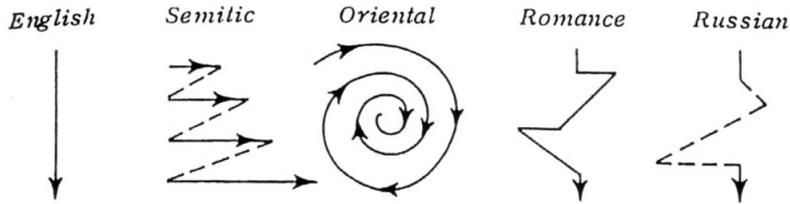


図1 世界各言語の論理展開のパターン

が、そのパターンに含まれているのは韓国語と中国語であり、日本語は含まれていない。その上、韓国と中国は、儒教思想に導かれた東洋的な思想を持つという点や文化面では共通のグループと言えるが、言語面では、韓国語が中国語の影響を受けているとはいえ、中国語はシナ・チベット語族、韓国語はアルタイ語系で系統も異なり、また、語順も異なる。これらの理由から、「オリエンタル」パターンが論理思考のある象徴的なものを表しているとしても、日本人コミュニケーションにそのまま当てはまるものかどうかには疑問が残る。

2.2 Hinds による日本語に関する論理展開研究

次に、日本語に関する談話の論理展開についての研究として、一連の Hinds による研究がある。Hinds (1983) では、朝日新聞の「天声人語」の論理展開を分析し、「起承転結」の文章構成をしており、日本語ではこの構成が良いと考えられていると指摘している。また、「起承転結」の「転」に当たる部分は、他の部分と関連はあるが直接的な関係がないため、Hinds (1984) では、英語母語話者は、日本語話者より、「統一性」や「焦点」、「一貫性」の点で論理性が低いと評価した。

しかし、上記2つの論文については、分析に使われたのが「天声人語」であり、その結果を日本語の論理展開であると一般化した点に問題が残る。「天声人語」は、日本人に長く親しまれた新聞コラムだが、多少の意見が書かれることはあっても、文章の分類としては、基本的に随筆の分類に入る。また、確かに学校教育で「起承転結」の構成で作文指導が行われるが、作文の文章分類は随筆や感想文であり、意見や考えを論理的に述べる文章とは、別のものとして考えるべきだと考える。

2.3 日本語コミュニケーションの特徴を考慮した研究

Hinds の研究は、その後違った視点での論理展開研究へと移っている。Hinds (1987) では、やはり「天声人語」を使って、書き手と読み手の責任の重さという観点から「起承転結」型の論理展開を分析しており、西洋と比較して、日本語の文章では、より受け手（読み手）に文章の一貫性を読みとる責任があると結論づけている。

Hinds (1990) は、日本語・中国語・タイ語・韓国語について、帰納法に近い論理展開が見られると指摘し、「準帰納法」(quasi-inductive)と呼んでいる。この4カ国語では、「演繹法」でも「帰納法」でもない論理展開をしており、論旨が文章の中に埋め込まれた形で表現され、文章を書く目的は冒頭ではなく遅れて出てくる。また、話題は明言されず、暗に示されるとしている。さら

に、Hinds (1987) の結論に関連して、日本語は読み手に責任がある言語なので、書き手は全てを明らかに述べず、読み手自身の結論を出すという課題を与え、書き手は読み手が熟考できるような刺激を与える責任を負っているのだと結んでいる。

また、本名 (1989) では、5つの文からなる談話の並び替えをさせることによって、論理展開の比較をしている。それによると、アメリカ人の場合は、最も好まれる構造がはっきりしており、問題提起から発展、結論へと直線的な文章構造だが、日本人は、文章構造についての一定の規範が確立しておらず、すぐ核心へ迫るのではなく、まず周辺を探るという遠回しな言い方の傾向があると述べている。これは、日本人の「察し」の文化を反映したコミュニケーションであると指摘している。

また、メイナード (2004) では、Yomiuri On-Line の「人生案内 Q & A」に現れた人生相談への返答意見文の構成を分析している。ここでは、40本の質問中39本に返答意見が見られ、返答が出てくる段落位置は71.07%、つまり、段落数を約7割進んだところで意見が出ており、意見述べの談話構成が尾括型であることを示している。そして、意見文談話のはじめにためらいなどの前置きが多く現れ、相手との相互関係を考慮した上で、意見を述べていると結論付けている。

これらの研究では、日本語コミュニケーションにおける受け手の役割の重要性の観点から、英語文化圏でのコミュニケーションとの基本的な考え方の違いを示しており、こうした視点は他言語との比較をする上で重要な認識であると評価できる。

2.4 使用言語や状況を考慮した研究

論理展開を、言語の違いだけで比較するのではなく、使用言語や状況の違いにも焦点を当てた研究として、Kobayashi (1984) がある。Kobayashi は、研究対象者を4つに分け、叙述や論理的な解説を含む作文を課し、その構成を一般論 (general statement) と具体的な事項 (specific) の提示順によって分析した。対象者グループは、①英語を母語とするアメリカの大学生、②アメリカの advanced レベルの ESL で勉強する日本人学生、③日本で英語を専攻している日本人大学生、④日本で英語以外を専攻している日本人大学生、である。①②③の学生には英語で、④の学生には日本語で作文を書かせた。その結果、①の学生は、一般論を先に述べる general-to-specific パターンであるのに対し、④の学生は一般論を最後に述べる specific-to-general パターンであった。そして、②③は、それらの間に位置するが、②はより①に近く、③はより④に近いパターンを示したという。

つまり、論理展開はそれぞれの言語特有のものとは断言できず、書き手の母語、コミュニケーションを行う時に使用する言語、使用する場・状況によっても違いがでてくることを示している。

また、Scollon & Scollon (1995) は、西洋人でも常に演繹的な論理展開を使っているわけではなく、その状況やコミュニケーションでの役割・人間関係により、お互いの尊重や敬意を表したり、力関係が働くときは帰納的な論理展開を行って、使い分けしていることを示している。これらの研究からも、Kaplan (1966) の論理展開パターンが、母語の言語形態に特徴的であった点に限界があり、あくまでも一つの指標に過ぎないと言える。

日本人の文章構成についての研究を概観したが、論理展開を分析するにあたり、対象とする文章・会話の機能や目的・各言語のコミュニケーション特性・状況や人間関係等のコミュニケーション要素を考慮する必要があると考えられる。

3. 研究方法

次に、会話での意見表明の談話における論理展開がどのような構成で行われ、どんな属性（性別・年齢・職業などの違い）により、使用する論理展開が変化するのかを、日本語コーパスを使って分析する。

会話分析には、ACTFL-OPI⁽¹⁾形式による日本人同士のインタビューを文字化した日本語コーパス⁽²⁾を利用する。これは、1対1のインタビュー形式で、簡単な挨拶から始まり、趣味や日常生活、仕事、社会問題まで様々な話題を自然な会話の中で取り上げている。このコーパスを選んだのは、相互性があり、対人コミュニケーションが行われる様々な場面に対応したものであり、非常に自然なインタビューの会話であること。また、それぞれの会話の自然な流れの中で、社会的な問題について意見を求められており、日常の日本人のコミュニケーションにおける意見の展開が見られると判断したからである。

インタビュー対象者は、表1の通り、日本人母語話者48名（男20名・女28名）で、学生や主婦、社会人などである。インタビュアーは、女性の大学教師2名が担当している。

分析に使用したのは、各インタビューで意見を求められている部分で、話題は「オリンピックにおけるドーピングについて」「外国人と比較した日本人の働きぶりについて」「給食の是非について」「早期英語教育制度の導入について」などである。これらの抜き出した部分がいくつかの文で成り立っているかを調べる。取り出す部分は、話者のまとまった意見が出ている部分としたことから、途中でインタビュアーが割り込んで語彙の確認などをした場合は、2つ以上のターンにまたがって表れることもあった。ここでは、文を「ある文型・文法事項を含んだ完結したまとまり」と定義し、話し言葉である特性を考慮し、ポーズがあり文末が省略されていると思われる場合は、それを補うことで主観的に判断した。「そうですね」などの表現が意見部分の冒頭に多く見られたが、メイナード(2004)でも指摘されていたように、インタビュアーの意見求めを受入れて考えていることを示すフィラーと判断し、意見の論理展開には影響がないと判断し、意見部分の数には入れなかった。

表1 インタビュー対象者の概要

対象者	男性	女性	合計
社会人	10	10	20
学生	10	11	21
主婦	0	7	7
合計	20	28	48

次に、取り上げた会話部分の中で話者の中心となる意見を「中心文」と呼ぶことにし、何番目の文の中に中心文が表れるかを特定した。そして、中心文が、意見を述べているまとまりの中で、冒頭にあるもの（冒頭型）と末尾にあるもの（末尾型）の割合を比較した。また同時に、メイナード（1997）の新聞コラムのコメント文の分布調査方法にならい、中心文が談話全体の中の何%の場所に出てくるかを調べた。つまり、意見を述べている部分が5文で構成されていた場合、4文目に中心文があれば、全体の80%の位置で中心となる意見を述べていると判断できるわけである。

例として、テニスで英才教育が行われ、勝つことが重視されてきていることについて述べている会話の場合をしてみる。（以下、14などの番号はインタビュー対象者の番号を示し、R：インタビュアー、かっこ内は相づちを表す。文ごとに①～⑩の番号を振る。×××は聞き取り不明部分、／はポーズ、…は言いよどみを表す。下線の文が中心文と判断したもの）

14：①それも－あの一難しいですね。（R：うん）②結局あのわたくしも、あの学生の時、あのそれこそ体育会という、所で、やっておりましたので、あのもうそれこそ勝つことが目標で（R：うん）やっていて、その時の一、仲間一、もずっと引き続きテニス一、を一所懸命やってる、仲間もいるんですね。③でその人達一がやるテニスってというのはやっぱり、あの一今の、あのおばさんになっても、（R：うんうん）あの一、勝つことが目標で、（R：うーん）あの一、ですから、そこには、あの一、やっぱり、大変な世界があるという。（R：うーん）④でもまあ、あの楽しんで、私みたいに楽しんでやってる人もいるし、それはあの一、その一人その人の、あの一、気持ち一、で、あのいいと思います。

①でまず感想を述べ、②で学生の時や、当時の友人などの背景を述べ、③で現実の事情を説明した後、④で自分の考えを表明しているので、④を中心文と判断し末尾型とした。

葉害がなかなかなくなるらないことについて意見を求められた場合、

30：はい、はい。①でも、厚生省、／まあ、ゆ、っては何ですけれどもやはり、お役人てこんなものなのかなど。（R：あ、はい）はい。②自分の、兄が、厚生省に、以前、おりましたので、その時の話なん、て、かん一ぜんに、役人になってしまって始めは大学の教授だっ（R：そう）そこから、向こうに入、って、こんな人間一は変わるもの（R：あ、×××）かなと思うほど、変わりましたからね。

質問を受けた直後の「はい、はい」は意見を求められたことの受入を表すフィラーと考え、意見部分としての文に入れえない。①の文で、「こんなものだ」と言う意見を述べた後、②で自分の兄の具体例を挙げて、その意見を支える理由としている。中心文は、①で、冒頭型と判断した。

こうして得られたデータから、論理展開の傾向と各属性（性別・職業・年齢グループ・海外在住経験）による影響がどのように表れるかを分析する。

4. 結果

分析の結果、意見を述べている部分は2～11文で構成され、平均4.67文であった。中心文は、平均56%進んだところに現れた。また、話題の違いによる有意な結果の違いは見られなかった。

4.1 冒頭型と末尾型

調査の結果、48名中冒頭に中心文を述べたのは19名で、全体の39.6%、末尾に中心文を述べたのは23名で、全体の47.9%を占め、その他が6名で12.5%であった(図2)。この結果から見ると、約半数の人が末尾に中心文を出す末尾型である。 χ^2 検定の5%レベルで、冒頭型と末尾型の差は有意な差であると認められ、明らかに二つの論理展開を取るグループに分かれた。また、冒頭型・末尾型以外の場合でも、6名中4名が終わりから2文目に中心文を述べており、全体的に、後半に中心文を述べる傾向が強いとわかった。

4.2 属性別結果

対象者の属性別結果を見てみると(図3～7)、次のようなことがわかった。

4.2.1 性別結果

談話の論理展開に影響を与える属性として、まず、性の違いを考えた。男女別の結果を見る(図3)と、男性20人中冒頭型は8人、末尾型は10人、それ以外が2名で、半数が末尾型であった。全体平均では意見談話の56%の位置で中心意見が述べられている。また、女性28人中冒頭型は11人、末尾型は13人のほぼ同数で、それ以外が4名いた。平均でも、男性とほぼ同じく56%の位置で中心文が表れていることになる。この結果から、性別による差はほとんどなく、どちらもやや末尾型が多かった。 χ^2 検定の5%レベルでは、男女で有意な差は認められなかった。

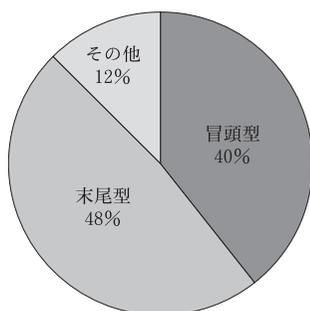


図2 冒頭型と末尾型

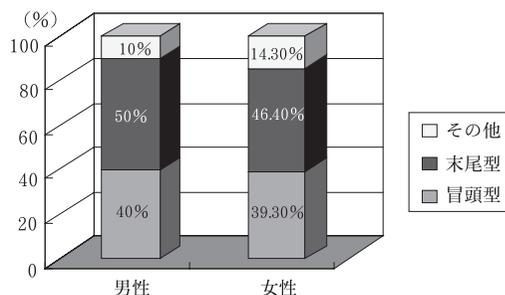


図3 男女別結果

4.2.2 職業別結果

対象者を、学生、仕事を持っている社会人、主婦の3つのグループに分けて集計した結果、学生21人中冒頭型が5人、末尾型が12人で、57.1%の人が末尾型であった。社会人は、20人中10人が冒頭型、8人が末尾型、その他が2名で、差が小さかった。また、主婦は、7人中4人が冒頭型、3人が末尾型で、冒頭型の方が一人多かった(図4)。

中心文の出現位置については、平均すると、学生が71%、社会人が45%、主婦が43%進んだ所で意見を述べており、学生の末尾型の多さが目立った。

男女別に見てみると、女性社会人と女子学生の冒頭型と末尾型の割合がほとんど同じでやや末尾型が多いが、主婦は冒頭型がやや多い。一方、男性社会人は冒頭型が70%であるのに対して、男子学生は逆に末尾型が70%で、全く違った結果が見られ、 χ^2 検定で5%有意であった(図5)。

4.2.3 学生グループ vs 社会人グループ

今回の調査では、インタビュー対象者の年齢がコーパス上で発表されていないため、年齢に代わる一つの要因として、学生と大学卒業時の年齢以上というグループ分けをすることによって、大まかな年齢的な違いのグループとした。社会人が、大学を卒業している、または、30代以上と

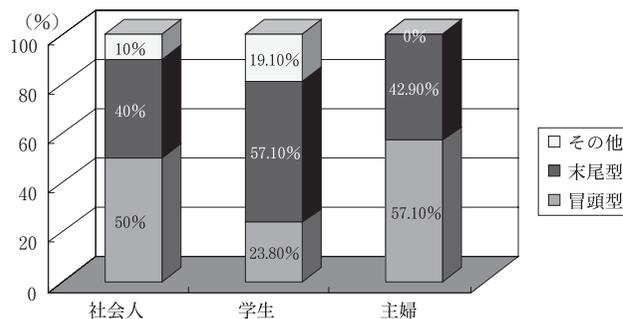


図4 職業別結果

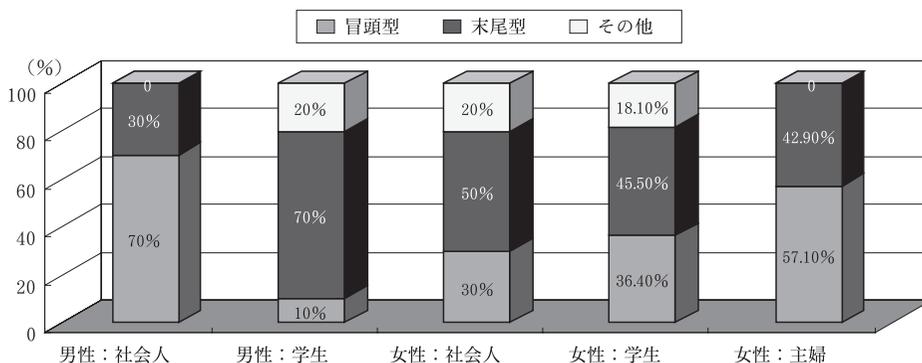


図5 男女・職業別結果

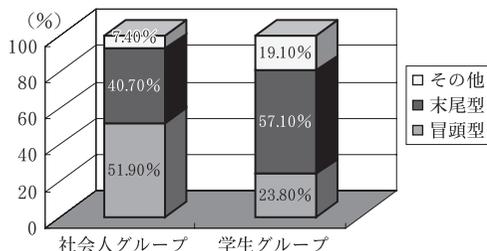


図6 学生グループ・社会人グループの結果

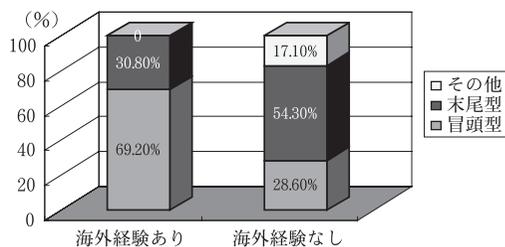


図7 海外経験者・未経験者の結果

いうことは、インタビュー内容から分かったが、学生の中には大学院生も2人含まれており、20代である確証はないことをお断りしておく。学生グループ21名は、前述したとおり、冒頭型5人、末尾型12人、その他4人であった。それに対し、社会人グループは、27人中、冒頭型14人、末尾型11人、その他2人で、やや冒頭型が多かった。中心文の位置は、学生平均は71%、社会人平均は45%の位置であった(図6)。

4.2.4 海外在住経験

最後に、対象者の論理思考に影響があると思われる属性として、海外在住経験の有無により対象者をグループ分けした。日本語講師など日常的に外国人と接している人や、英語専攻の学生や留学生が身の回りに多くいる環境の学生もいたが、こうした状況からだけでは、どれだけ他文化との接触を持ったかは判断できない。その上、日本で暮らしている限り、日本文化の中にいることは否定できないので、論理思考の基本は日本にあると判断した。それに対して、他文化の中で生活した経験を持っていれば、当然その文化に従ったコミュニケーションに触れていると判断し、在住経験者に限った。インタビュー内容から、明らかに海外で暮らした経験がある人が、13名おり、残りの35名との比較を行った。

海外在住経験者13名中9名が冒頭型、末尾型は4人だった。経験のない人は、35名中10名が冒頭型、19名が末尾型、その他が6名であった。つまり、経験者は69.2%が冒頭型で、経験のない人は54.3%が末尾型という対照的な結果が出た(図7)。その他の4名も後ろから2番目の文が中心文だったことを考慮すると、経験のないグループでの末尾型傾向の割合はさらに増える。中心文の提出位置は、経験のあるグループが31%、経験のないグループが82%の位置で出現しており、 χ^2 検定で5%有意であり、属性別結果の中で最も大きな相違が認められた。

5. 考 察

以上の結果から、三つの知見が得られた。まず、会話における論理展開は、文章における論理展開ほど明らかに帰納的であると断言できないことがわかった。そして、個人差があり、明らかに

演繹型の論理展開をしている人も39.6%いることから、どちらかに一般化することはできないと言える。

文章における論理展開との結果に相違があった理由として、文章と会話の違いが考えられる。書き言葉は、書く前、書いている間、書いた後と、何度も内容や構成を練り直す時間がある。そのため、書きながら結論を考えるといる人もいられる。しかし、会話では、相手に聞かれれば、すぐ返答しなければならないし、一談話中に何度も意見を変えることもできない。その上、一瞬で消えてしまう音声であるため、より分かりやすさが求められることから、質問に対して直接的な答えをまずぶつけてから理由を述べるという冒頭型の論理展開が多くなったのではないだろうか。

次に、ある論理展開の型を決定づけていると考えられる属性別に結果を分析したところ、海外在住経験が最も大きな要因であることが分かった。海外在住経験者は、アメリカ・ドイツ・英国で留学または仕事の関係で、少なくとも3年～10年以上在住しており、当然その文化圏で使われている言語を使って、論理的に意見を表明したり、相手を説得するというコミュニケーション活動を行ってきたことは確かである。各言語のコミュニケーション特性を考慮すると、アメリカ・ドイツは、ホール(1979)が言うところの典型的低コンテクスト文化であり、英国も高コンテクストと低コンテクストの混在した文化である。Tirkkonen-Condit & Lieflander-Koistinen (1989)においても、ドイツ語と英語では冒頭部分に論説の要旨が出てくる演繹法的な構成が好まれるとしている。そこでコミュニケーションを成功させるには、相手に分かりやすい直線的論理展開で詳しく説明する必要がある。状況によって、よく使用される論理展開の型が変わってくるというKobayashi (1984)の結果のように、各言語文化圏で有効な論理展開を海外在住中に身につけたと推察でき、その論理展開の型が意見を述べるときの自分の思考スタイルとして定着し、日本で日本語を使用する場合にも使っていると判断できる。この点では、先天的属性よりも、後天的属性が強く働いていると解釈することができる。

第3に、性別ではやや男性に、職業の違いでは学生に末尾型が多く、それに対して、男性社会人と主婦に冒頭型が多かった。特に、男性学生と男性社会人では、中心文の位置が82%と30%という大きな違いがあり、 χ^2 検定で5%有意であった。これは、社会に出て職場などで意見を述べる場合には、相手に理解されやすいような話し方の要求度が高いため、より理解しやすい論理展開である冒頭型で意見を述べることが多い可能性が考えられる。

ただ、社会人といっても、女性の場合は、社会人と学生の間有意な差が見られず、どちらも全体平均に近い数値であることから、社会で意見を述べる機会の頻度の差など、結論を出すにはより詳しい調査が必要である。

一方、学生の末尾型の多さについては、Scollon & Scollon (1995)が、様々な状況・対人関係により、使われるストラテジーが異なると述べており、インタビュアーと対象者の関係を考慮する必要がある。まず、インタビュアーと対象者が初対面であることから、お互いの距離を保ち尊重しあう敬意のストラテジー(Deference politeness system)が働いたため、性別では同性でない男性により強く、年齢的にはインタビュアーより年少の学生グループに影響を与え、結論を遅く持ち

出す末尾型の論理展開が多く使用されたと考えられる。

特に、インタビュアーが大学教師であったことに注目して学生との関係を考えると、敬意のストラテジーより力関係によるストラテジー（Hierarchical politeness system）が働いたとも考えられる。そして、上下関係にあまり関係のない環境にあって、インタビュアーと年齢的にも近く同性である主婦には、より親しさを求める連帯ストラテジー（Solidarity politeness system）が強く影響を与え、社会人が職場で要求される状況とは異なる理由から、直接的な構成で演繹的な論理展開がやや多く使用されたという可能性も考えられる。

これらの点については、インタビュアーの性別を変えて調査することで、今後確認していく必要がある。

今回の分析では、48の限られた会話の分析結果であるため、一般論として結論づけることはできないが、会話における日本人の論理展開は必ずしも帰納的とは言えず、様々な影響を受けて属性別の傾向が得られることが分かった。また、海外在住経験が論理展開に影響を与える大きな属性であったことから考えると、意見を述べる会話教育によっても、論理展開の点で様々な文化をもつ人々との意見交換、意見の理解がもっと円滑にできるようにすることができると言えよう。

今後は、分析対象を増やし、対象者の属性を考慮することによって、日本人の多様な実態をより詳しく把握することができれば、異文化間コミュニケーションで起こる問題を解決したり、事前に避けたりするための知恵を得ることができ、また、そのためのストラテジーを、様々な属性によって分けられた対象者別に構築していくことができると考えている。

〈注〉

- (1) ACTFL-OPI：全米外国語教育協会的方式によるインタビュー形式の口頭能力試験。
- (2) 日本語コーパス：上村隆一編（1998）「文部省科学研究費補助金重点領域研究：日本語会話データベースの構築と談話分析」『じんもんこん DATABASE』，神奈川：重点領域「人文科学とコンピュータ」総括班 総合研究大学院大学 Vol. 1。

参考文献

- Kaplan, R. B. (1966) "Cultural Thought Patterns in Intercultural Education," *Language Learning* 16, pp. 1-20
- Kobayashi, Hiroe (1984) "Rhetorical Patterns in English and Japanese," *TESOL Quarterly* 18, No. 4, pp. 737-738
- Kubota, Ryuko (1992) "Contrastive Rhetoric of Japanese and English: A Critical Approach," Ph. D. dissertation, Department of Education, University of Toronto
- Hinds, J. (1983) "Contrastive Rhetoric: Japanese and English," *TEXT*. 3, No. 2, pp. 183-195
- (1984) "Retention of Information Using a Japanese Style of Presentation," *Studies in Linguistics* 8, pp. 45-69
- (1987) "Reader Versus Writer Responsibility: A New Typology," *Writing Across Languages: Analysis of L2 Text*, edited by U. Connor and R. B. Kaplan, pp. 141-152, MA, Addison-Wesley
- (1990) "Inductive, Deductive, Quasi-Inductive: Expository Writing in Japanese, Korean, Chinese, and Thai," *Coherence in Writing: Research and Pedagogical Perspectives*, edited by U.

- Connor and A. M. Johns, pp. 87-110, Alexandria, VA: TESOL
- Tirkkonen-Condit & Lieflander-Koistinen (1989) "Argumentation in Finnish versus English and German editorials," *Discourse Interpretation Argumentation*, ed. by M. Kusch and H. Schroder, 173-181. Hamburg: Buske.
- Scollon, R. & S. W. Scollon (1995) *Intercultural Communication*. Oxford: Blackwell.
- ホール, E. T. (1979) 『文化を越えて』(TBS ブリタニカ)
- 本名信行 (1989) 「日本語の文体と英語の文体」『講座日本語と日本語教育』5, 明治書院, pp. 363-385
- メイナード, 泉子 (1993) 『会話分析』(くろしお出版)
- (1997) 「新聞コラムのレトリック」『談話分析の可能性 — 理論・方法・日本語の表現性 —』(くろしお出版), pp. 123-142
- (2004) 『談話言語学 — 日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究 —』(くろしお出版)

〈論文〉

WWWを対象にしたコンピュータ・ディスコース 研究の試み

田 辺 和 子

キーワード：コンピュータ媒介コミュニケーション、ウェブ・コーパス言語学、文法化、主観化、メタ言語機能

1. はじめに

コンピュータ・ディスコースというのは、ネットワーク化されたコンピュータを通して人間同士がメッセージをやりとりするときのコミュニケーションを指す (computer-mediated discourse, 以後, CMD と示す) (Herring, 2001: p.613)。そして、この研究は、コンピュータ媒介コミュニケーション研究 (computer-mediated communication, 以後, CMC と示す) の一環として位置付けられ、談話研究の分析手法を応用しようとするものである。本稿では、従来行われてきた談話研究の言語研究としての客観性の不十分さ、すなわちデータが短く、データ全体が示されないという欠点を補いながら、WWWを対象にしてCMDを試みた。一般に、CMDというとchatやe-mail通信などが主な研究対象で、WWW上のテキストは対象に含まないようだが、本稿は、(1)ブログ本文、(2)それらについて寄せられたコメントと、(3)コメントに対してのブログ作者の反応という3つの‘場’による相互コミュニケーションを研究する目的で、インターネットの上のテキストをコーパスとするウェブ・コーパス言語学の観点からコンピュータ・ディスコース分析の実践を行う。

先行研究としては、CMCに1990年代最初から取り組んできたSusan C.Herring(1996)の業績は、CMCの世界を拓いたとっていいだろう。一方、WWWをコーパスとみだてて言語研究を進めようとする流れは、Hundt, Nesselhauf & Biewer(2007)によって本格的な研究論文集が発表されたところである。

2. 研究目的

本研究の目的は、句表現「というか」(例：これは、「ぼたん」というか「ゆり」の花のようだ)における口語・縮約形としての変異形(とゆーか、てか、っか、っか等)が、もともとの「と

「というか」の意味を失いながら、構文論的・意味論的にどのように変化しているか考察することである（文法化）⁽¹⁾。さらに、それに伴って、文脈上の要素、すなわち、使用場面や使用状況、コミュニケーション機能がどのように変化するか考察したい。

3. 研究対象

本稿のデータは、ブログテキスト、“ギャル社長 藤田志穂 (sifow) の人気ブログ ギャル革命” <http://blog.livedoor.jp/sifow/> のブログ開設時 2005 年から 2008 年までの各年 1 月と 6 月分の全テキスト（ブログ本文・コメント文・コメントに対する答え）を対象に、「というか」の変異形が使われている部分を取り上げた（総例文数 117）。ブログ文書をコーパスとして使うことの本稿の特徴は、(1)その使用例がいつ使われたか詳細な年月日が把握できるので、使用例を正確に時系列に並べることができる。その結果、使用上の変化をつぶさに考察できる。(2)データの発話すべてがブログ本文を共有していて文脈を持つ文章例であるということである。使用者も確定できるので、1 個人の言語使用の変化を考察できる。したがって、ここでの 117 の総例文は、いわば一本の糸で繋がっている質的データで、従来のデータの型、すなわち個別的な 117 の文の集まりという量的データではない。

従来の談話研究は、データの全体像を明示することが習慣化されておらず、取り上げられた例が、データ全体の中でどの程度多く見られるのか、たった一例にすぎないのか、説明されることが少なかった。本稿では、該当例すべてを明らかにし、また、それらすべてを視野に入れた考察を行った。

4. 表の説明

表は、“ギャル社長 藤田志穂 (sifow) の人気ブログ ギャル革命” の全テキスト中の「というか」変異形の使用部分を、文中での位置・形式・機能別に整理したものである。以下に表の説明しながら、その内容について検証していきたい。

- ① 「文」の欄には、表中央にある「というか」ヴァリエーションの前後の文章を書き出した。
- ② 「レーベンシュタイン距離」とは、二つの文字列を一致させるための置換（挿入・削除）回数によって求められる文字列間距離⁽²⁾である。本表においては、「というか」という原型をレーベンシュタイン距離 2 の開始で「0（ゼロ）」と置き、各ヴァリエーションとの距離（何回の手続きで変換可能か）を定めた。
- ③ 「位置」欄は、「というか」のヴァリエーションが使われている場所である。行頭とは、行換えがなされる際に、変異形で次の行が始まっている場合である。
- ④ 「機能」欄は、「というか」の談話上の機能を情報改訂・情報添付・話題転換・相手の発言受け・順番取り（Turn-Taking）・緩衝辞・前に述べた自分の発言の引用・切り替えの 8 種類に分けいずれに当たるか記入したものである。機能の範疇分けでは、さまざまなレベルでの分

類ができるが、本稿は、「というか」の文法化の結果としての意味機能変化に着目したいという目的があるので、本来の意味である「軌道修正」⁽³⁾としての要素がどれほど残っているかに焦点を絞った。

- ⑤ 「前件」「後件」とは、「というか」ヴァリエーションの前後の文の内容を叙述と陳述、そのほか疑問・挨拶・呼びかけ・謝罪・祝辞と分類した。
- ⑥ 「範囲」の欄は、使われている「というか」変異形が、前後どれだけの範囲に対して、意味的な影響範囲としているか調べてみた。

5. 分析

5.1 個別分析

本項では、表の機能の種類ごとに例を取り出して具体的に考察したい。

5.1.1 情報改訂

例1：文番号 7/8（ブログ本文）

BIG になれますかねえ～?! ってか、なるつもりなんですけど♪笑)

「なれますかねえ～」に対して「なるつもりなんですけど」という言い換えをして、情報を改訂する目的で「ってか」を挿入している。この用法は、元々の句表現「というか」とほぼ同様の意味機能を果たしており、文法的にも、意味的にも同価なものが並立している。前件内容は、疑問符がついているが疑問形とは判断せず、心の内を述べた独り言の要素が強い発話として陳述とした。後件においては、自分の考えを他者に述べる形ではあるが主観的内容であるので陳述とした。影響を及ぼす「範囲」としては、「句」とした。

5.1.2 情報添付

例2：文番号 11/12（ブログ本文）

って思ったんです。ってか、目立ちたがりってのもあったのかもだけど……笑

上記の例は、例1より文法化が進み、情報改訂より意味の漂白化(bleaching)が見られる文である。改訂・修正というより前の情報に新たなものを加える色彩が強いと判断した。前件は、陳述、後件は、情報の提供がなされていると判断し叙述とした。ただし、この組み合わせは、文末表現を比較してみると「思ったんです」と「あったのかもだけど」(「あらたまった言い方」と「くだけた言い方」)というスピーチレベルの切り替えともなっている。「範囲」は、この場合非常に不明瞭であるが、「目立ちたがりである」ことが添付の対象と判断し「文」とした。

5.1.3 話題転換

例 3：文番号 17/18 (ブログ本文)

書きますね～ (顔)*

ってか，明日は撮影で下田まで行くから 5 時半集合…一体，あと何時間後に起きなきゃならないんだろう～ (顔)

上記の「ってか」は、「ってか」の前半とは異なった話題を後半で持ち出す際のつなぎ言葉として使用されている。したがってこの「ってか」は発話全体のディスコースを統御していると判断してよいだろう。そこで、話題転換の場合は、「範囲」は特定せず「なし」とする。前件は終助詞表現によって「陳述」、後件も「ならないんだろう」という主観表現により「陳述」とした。

* (顔) は、顔文字がここで挿入されていることをしめす。本論文では、顔文字の内容は議論しないことから、その emoticon の存在だけを示すことにした。

5.1.4 相手の発言受け

例 4：文番号 5/6 (コメントへの返事)

今まで行ったトコよりでっかくビックリしましたぁ (顔) ってか，力丸さんのイベにまぎれちゃって配ってもいいんですかぁ?!

ここでいう「力丸さんのイベント」というのは、この発言の前に「力丸さん」からのコメントでピラ配り参加を誘われているコンテキストがある。ここでは、まず自分の話題について話を始めたものの前の発言に話題をもどした形になる。そこで、相手の発言に内容を戻すディスコース・コントローラーの役割を果たしている。内容としては、前件は「びっくりした」という事実を伝える叙述、後件は、許可を求める疑問とした。使用域は、自分の発言全体である。

5.1.5 会話の順番受け (Turn-Taking)

例 5：文番号 21/22 (コメント)

てか，ランキング 70 位も落ちたのね

発話の開始時に使用する「というか」変異形の用法。フィラーや hedges とよばれるものとはほぼ同じ役割をしている。このコメントは、ブログの人気順位が落ちたことを揶揄している。機能として非難と定めた。この用法は、他のドメインである掲示板 2ch.net では、頻繁に使われるが、このブログではほとんどみられない使い方である。コメントの内容とともに、このブログに連帯意識を持つとうという意図はなくむしろ、相手を不快にすることを目的とした参加であることはこの言語使用形式に反映されている。

5.1.6 緩衝辞

例 6：文番号 35/36 (本文)

そしたら、ってか，判断と決断の差ってなんなの？

「いいよども」に当たるポーズ・間合いをとる目的で使われる用法である。前述⑤に非常に近い用法だが、使用される位置が、こちらのほうが制限がないという点において⑤とは区別するべきだと判断した。

5.1.7 以前に述べた自分の発言の引用

例7：文番号 84/85（コメントへの返事）

一緒に行きましょうねっ！（笑）ってか、日野はバリ②東京でしたねえ～（顔）おっちょこちょいですみません！！

「日野」の話題は、この前において会話の話題となっていて、「日野」がどこにあるか見当はずれの発言を志穂が自分でしていたことがわかり、ここで詫びている場面である。文番号 99/98 だけを視野において考えると「話題転換」である。しかし、既に話し合われた古い話題を引用して来るという要素を含んだ機能として、「話題転換」とは異なった機能として扱うことにし「自発言を引用」という範疇を作った。

5.1.8 切り替え

例8：文番号 86/87（コメントへの返事）

テストお疲れ様っ☆
ってか②、本当に大丈夫??

2007年ごろになると、挨拶+「というか」の変異形+疑問（例：大丈夫？）というようなパターン化が見られるようになる。挨拶の部分が「感謝」表現であることも多い。これは、文法化における一方向仮説において、最終的な段階で主観化・構文の固定化が起るといわれている現象に該当するだろう。ディスコースという視点においても、「決まり文句」化して、使用条件が限定されていくことが伺える。

機能分類については、実際は複数に関係する内容のものが多い。ただし、互いに関連性が強いものと弱いものがある。「話題転換」と「切り替え」は、判断に迷うことがしばしばあった。話題転換は、明らかに前件で使われなかったあたらしい語彙が後件で出現した時、「切り替え」は、文体・口調において「あらたまり」から「くだけた言い方」というようにメタ言語的要素が含まれる時に使うようにした。

5.2 全体分析

本項目では、表全体に見られる変化の特徴について述べる。

- ① 使用位置としては、2005年から2006年までは、文中・文頭にも使われていたが、2007年あたりから、機能や使用範囲に関係なく行頭に使用されることが圧倒的に多くなった。
- ② 「というか」変異形の使用の変遷としてプログライターの志穂が、2005年開設当初は「って

か」を使っているが、2007年1月あたりは「とゆーか」「とゅーか」と原型「というか」に近い形の使用がみられ、その後「ってか」に再度戻って固定化していくことがわかる。

- ③ 「ってか」使用の欄を見ていくと、2005年から2007年1月ぐらまでは、志穂はブログ本文中で使うことが多かったが、その後次第に送られてきたコメントへの対応に使う頻度が増える。これは、「というか」の文法化が元々の役割である「情報改訂」から譲歩の意味合いが薄れ「情報添付」となり、さらには使用域が薄れ修正機能が残り「話題転換」として働き、最終的には対人化を強め会話中に使われるようになり、語用化を深めていった結果である。書き言葉の機能から話し言葉の機能へとの変換が見られるとも言える。
- ④ 機能欄「切り替え」は、メタ言語的要素⁽⁴⁾の強いものが含まれる転換現象（例：フォーマル・インフォーマル、感謝・挨拶・呼びかけ・感動）で、2007年6月以降に増えている。

6. 結論

本稿は、「というか」のウェブ上の使用変遷を考察することで、文法化の変化に伴う文脈的变化（誰が、どのような場で、誰に向かって、何を目的に）を明確にした。

句表現であった「というか」が最終的には、主観化し、メタ言語的機能を獲得し、会話の切り替えや順番取りの機能やフィルターのような役割をするようになる。そして、その過程の途中には、「この場面ではこう言う」といったいわば「談話運びの定型化」という使用条件の固定化・制限化のプロセスが見られた。ある集団において言語使用の共有ということは、この慣習化された「決まり文句」ならぬ「決まりディスコース」の学び合い活動といえるのだろう。

謝辞

本稿執筆にあたり、井上史雄先生には、貴重なご教示をいただいたことを深く御礼申し上げます。

〈注〉

- (1) Hopper & Traugott (1993) は、文法化を次のように定義している。“the process whereby lexical items and constructions come in certain linguistic contexts to serve grammatical functions, and once grammaticalized, continue to develop new grammatical functions.”
- (2) レーベンシュタイン距離は、Heeringa (2004) によってドイツ語方言の分析に利用された。

	て	ゆ
と	1	2
い	2	2

左のようなマッチング作業によって「というか」に対して「てゆーか」のレーベンシュタイン距離を計算する。この場合、レーベンシュタイン距離は2。

- (3) 福原裕一 (2008) 博士論文要約, p. 4.
- (4) マグロイン花岡 (2007: 170) は、「ていうか」の機能を「メタ言語否定」と呼び、Horn (1985) による定義「命題に対しての真偽値的・意味論的演算子ではなく、前者の発話に対して反対する（意義を唱える、否認する）ための装置であり、その際否定されるのは（命題ではなく）慣習的・会話敵含意、発音、形態素、スタイル、使用域などである」を紹介している。

参考文献

- 福原裕一 (2008) 東北大学大学院国際文化研究科博士論文「若者言葉のフェイス・ワーク」
- Heeringa, Wilbert (2004) Measuring Dialect Pronunciation Differences using Levenshtein Distance. *Groningen Dissertations in Linguistics* 46.
- Herring, Susan C. (ed.) (1996) *Computer-Mediated Communication*. John Benjamins.
- Hopper, P. J. & Traugott, E. C. (1993) *Grammaticalization*. Cambridge.
- Hundt, Marianne, Nesselhauf, Nadja & Biewer, Carolin (2007) *Corpus Linguistics and the Web*. Rodopi.
- McGloin, Naomi Hanaoka (2007) 「文頭の「ていうか」とメタ言語否定」久野他編『言語学の諸相』
- 宇佐美まゆみ (1999) 「交感的コミュニケーションとしてのあいさつ行動」『国文学』第44巻6号

〈論 文〉

新敬語「ス」の使用場面の拡大と機能の変化

倉 持 益 子

キーワード：「ス」、敬意、親しさ、知性隠し、ポライトネス

はじめに

「これ、いいっすね」等の若い男性が語末に多用する「ス」は以前からよく耳にする。しかも様々な所で使われているところからすると、これには何らかのコミュニケーション上の効果があるものと思われる。

本稿では、コミュニケーションストラテジーとしてこの表現の機能を探ってみた。その結果、この表現は、ポジティブポライトネスの機能とネガティブポライトネスの機能を併せ持つことがわかった。また、ブログでの新たな文体使用とあいさつ言葉での機能の変化を見出すことができた。

なお、この表現の表記は先行研究でも「(っ)す」や「ス」などまちまちであるが、本稿では字数、初期の資料^①での多用という理由から「ス」を採用した。

1. 先行研究

尾崎喜光(2002)は、職場会話のコーパス分析を通じ、職場での「ス」について、20代を中心とする若い男性の使用が目立つが、40代以降や女性も少数ながら使うことと報告している。また、同書において、その使用法としては、名詞・形容詞に「ス」を付けた形がほとんどであることから、動詞に接続する形は、後から適応されたと考察している。

中村桃子(2007)では、「ス」は、敬意を表しながらも相手との距離間を縮める表現として編み出されたとし、表現の短縮・軽量化が〔内容〕の短縮化(距離の短縮)につながったとしている。

両研究共、これが敬語表現であることを表明している。しかし、尾崎(2002)では対象とした場面を職場に限っているため、学生(特に体育系)が多用すると言われるこの表現の現状を十分表現していない。また、中村(2007)も、この表現が中心の研究ではなかったためか、使用者や使用場面の分析が十分ではない。

2. 本稿の目的

本稿では、先行研究の「敬意表現である」という姿勢を受け継ぎ、中村の「新敬語」という位置づけを支持したうえで、この表現法の使用の広がりとはポライトネス機能を明らかにすることを目的とした。この「使用の広がり」とは、この表現がいつどのように広がったかという時間的なもの、さらに使用場所、使用方法の変化等を含んだものとする。また、この表現には「敬意」「親しさ」を相手に示す要素が見出せるが、使い方でのバランスがどう変わるのかを明らかにしたい。

3. 研究方法

時間的変化は、文書資料及び40代以上への聞き取り調査によった⁽²⁾。現在の使用の広がりに関しては、若い年代も含めた聞き取り調査とテレビ番組での記録調査、ブログの収集、分析の他、2種類のアンケート調査による。

4. 1960～80年代の使用

4.1 60年代から80年代までの「ス」の概要

この表現が、「～デス」の変化したものであるということは、先行研究からも明らかである。しかし、いつごろ、何がきっかけでどこから出てきた表現かは明らかにされていない。

本研究で得た資料では、1966年朝日新聞連載の4コママンガ「フジ三太郎」が最も古い。次いで、サザエさんにも1967年から登場する。新聞の漫画に取り上げられるということは、1960年代後半（昭和40年代の始め頃）にはある程度広まっていたと考えられる。

60年代の両作品を見ると、どちらも比較的若い年代の社会人が目上の人に使っているが、70年代に入ると学生の使用が目立ってくるようである。本研究で行った聞き取り調査からも、50代以上の男性3人に聞いたところ、3人とも70年代にこの表現に接したと答えた。そのうち2人は、学生、それも運動部所属の大学生が使っていたのを覚えている。また、この3名はいずれも地方出身者で、東京で初めてこの表現と接したと語っている。

地方への広まりも明らかではないが、北海道札幌出身者は1981年、高校生だった頃、初めてのアルバイトでこの表現を知ったという。したがって、80年ごろにはすでに札幌の若者たちが使っていた可能性が高い。

4.2 70年代にこの表現に接した人への聞き取り調査から

現在の本研究の聞き取り調査では、マンガ以外に60年代に使った、聞いたという情報はない。最も古いものが70年代前半である。以下にその記録を載せる。

- i) 70年代の始め頃に「ス」に初めて接した男性（宮城県出身 50代半ば，職業不明）

35年前，東京に出てきたとき，語尾に「っす」を付ける人を見て珍しいと思った。その人は，熊谷の高校出身で野球部にいた。自分では使う気にならなかった。

- ii) 70年代半ば頃「ス」に初めて接した男性（長野県出身 70代前半，楽器製造）

「ス」は自分も日常的に使っている。店に来る若者たちに影響されたのだろう。この言葉を聞き始めたのは第二子誕生の70年代半ば（本人40歳頃）だった。印象として，こっちを立ててくれる気持ちのいい言い方で好ましく感じられ，違和感はなかった。どこか故郷の信州方言にも通じる心地よさがあった。使っているのは，運動部員が多かった。その後，大工さんや左官屋さんの若者など，学生以外も使っていたのに気が付いた。しかし，東大生は使わなかったようだ。

- iii) 70年代後半に初めて接した男性（小田原市出身 60代前半，俳優）

1977年ドラマに出演した役（とび職）の中では「そおっすねー」とか「そうじゃないっすよー」「いいっすかー」などというせりふが多かった。番組終了後もそのまま口癖になって現在でも使っているという。（マネージャーを通じての回答）

以上の3人のうち，2人が「ス」を好意的に受け止め，自ら使うようになったと言っている。また，80年代初めから使い始めたという40代男性（北海道出身，美容師）も，この表現には好意的で，現在もたびたび使っているという。

まだ少数を対象としたに過ぎないが，これら聞き取り調査の結果は，現在「ス」は，若者世代に留まらない使用年齢層の広がりがあることを示唆している。

4.3 考察：ポライトネスの視点から見た「ス」の機能

70年代に「ス」に接した人たちが言っているように，この表現は運動部系の学生が多用していた。また，アルバイトで覚えたという証言や，現在の大学生からの聞き取り調査からも，アルバイト先でもよく使われていることがわかる。ではなぜ運動部やアルバイト先なのであろうか。以下に考察を述べたい。

若いながらも知的な階層とみなされる大学生が，アルバイトという単純労働者になる時，彼らの知性はむしろ嫌味な印象をもたらす危険性がある。また，運動部にも「インテリ臭さ」はじゃまである。客，店主，先輩に嫌われぬようにするには，知性の象徴たる敬語をわざと崩して「知性を隠す」ことがストラテジーになる⁽³⁾。

これは「ス」を残すことで敬意は伝えている。さらに，崩した言葉でも受け入れてくれる関係であるということから「親しさ」も表すようになっていったと考えられる。アンケートの事前調査としての聞きこみで，学生たちも目上で親しさを感じる相手に使うと答えたものが多かった。

敬意を示した方が良い相手に働きかける際に，相手のフェイスを傷つけないように相手を高い位置に置き，自らを低い位置にすえるのは，Brown & Levinson (1987) のいうところのネガティブ

ポライトネスストラテジーに当たる⁽⁴⁾。また、積極的に親しさを表すのはポジティブポライトネスに当たる⁽⁵⁾。この「ス」には、両ポライトネスの機能が備わっていると考えられる。

5. 使用場面の拡大 その1 (大学生の使用)

5.1 男女別及び品詞別の使用傾向

2008年6月から若者新表現に関するアンケート調査を行っている⁽⁶⁾。質問は、「自分も使う」「聞くことがある(自分は使わないが存在は認める)」「聞かない」の三択形式にした。その中から性別の明記があった85人の大学生を対象に男女別で集計をし、「ス」使用のグラフを作成した⁽⁷⁾。その結果、男子学生の77%が日常的に「ス」を使っているのに対し、女子学生は11%に留まった。したがって「ス」は、主に男性が使う言葉であると大学生に認識されているのがわかる。

また、図1から、よく使われるのは形容詞、次いで名詞、副詞等、元の形である「です」と接続しやすいものである。普段「です」と接続しない動詞は比較的使用されていない。

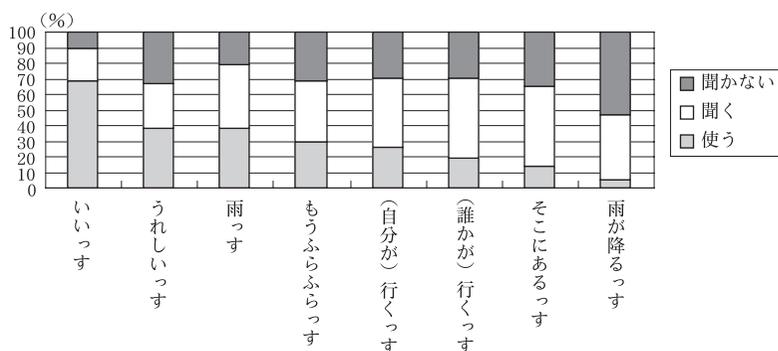


図1 男子学生「ス」使用

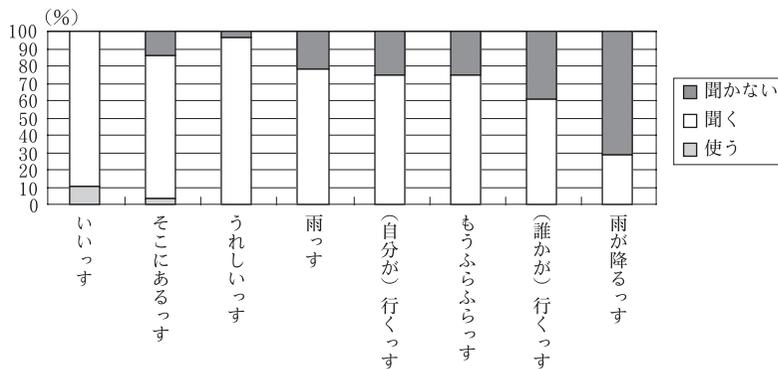


図2 女子学生「ス」使用

6. 使用場面の拡大その2（テレビにおける使用）

6.1 オリンピックのインタビューに現れた「ス」

本稿4.3で、「ス」は、「知性隠し」のストラテジーとして広まった可能性を示した。しかし、現在、それとは異なる使い方が見られるようになった。それは、自分の知性を隠すことを目的としておらず、相手へ親しさを示すという意図も薄い場合である。その代表例として、北京オリンピックでのメダル獲得が決まった直後のインタビューに答えた3選手の発言を紹介する。

「はい、うれしいっす」「ほんと、金メダル取れてよかったっす」「最高っすね」「優勝もできたので、本当満足っす」「明日も頑張りたいっす」（以上、北島康介）⁽⁸⁾

「これが自分色のメダルっすね」（松田丈志）⁽⁹⁾

「みんなのおかげっす」「オリンピックの畳はすべらなかつたっす。大丈夫っす」「勝ててよかったっす」「今、しばらく遊びたいっす」「練習したいっす」（以上、石井慧）⁽¹⁰⁾

ここでは、多少興奮気味とはいえ、日本全国に放送されることを意識したうでの発言であることは間違いない。メダル獲得というのは、自分自身への「絶対的な肯定」が得られた時であるといってもいいだろう。その精神下では、ありのままの自分を見せたいという気持ちになるのではないか。「ス」は、運動部の人がよく使うと言われるとおり、スポーツクラブ系の位相と言ってもよい。すなわち、自分たちの位相ことばを、誇りとともに使ったと考えられる。

ちなみに、彼らのうち北島と松田は、スタジオに招かれてのインタビューでは、「ス」が減り「デス」が増えていた。これは、自分たちの属する集団言葉を使うより、普通の日本語を使うことで、喜びを国民と分かち合いたいという意識が働いたためかもしれない。

6.2 人気俳優リポーターが使う「ス」

開局記念のノンフィクション番組に若手俳優がリポーターとして起用されていた。彼は最初から最後まで「すごいっす！ これは！」などの「ス」を連発していた⁽¹¹⁾。これは、おそらく彼の日常的な話し方であると同時に制作者側の意図もあったと考えられる。すなわち、「ス」を使用することにより、視聴者に彼の「素」の部分に触れさせることができる。テレビ制作者は、視聴者に人気俳優が直接語りかけるイメージを使いたかったのではないか。そうは言っても、くだけた使い方によって、かえって視聴者の反感を買うこともある。それを「ス」は世間でかなり許容されているとの制作側の判断で、2時間にわたる「ス」レポートが許されたのであろう。これはこの番組に限らず、若い男性が出演する番組によくあることである。

7. 使用場面の拡大その3 (ブログにおける使用)

ブログでも、かなり頻繁に「ス」という表現を目にする。しかし、使い方が口頭での使い方と差がある。例を紹介したい⁽¹²⁾。

例2 『パリパリの PARIS (パリっす)』【4日目】

パリといえばルーヴル美術館っすよね。友人の職場が近くなんでお昼を食べに行く約束してルーヴル近くを初めて一人で見て回ったっす。そして、パリの歩行者信号がイギリスや日本と違う事を発見したっす。歩行者信号は通常は縦に赤と青が並んでいるのに、フランスは横なんす。しかも止まっている歩行者のシルエットがどう見ても威張って立っているような感じでヒーロー登場って感じにも見えるっす。それから、公衆電話がオシャレなシースルーのガラス張りでセンスが良いなぁと思ってしまったっす。

先行研究からも動詞+スは少ないという報告がなされていたが、他のブログでも容易に「動詞+ス」は見出せる。「ス」は「です」の変化したものであるため、本来「です」に接続できない動詞に使うことは、口頭においては不自然さを生じてしまう。しかし、ブログならば、その不自然さも個性に代えられるということなのかもしれない。

ブログでの機能を明らかにするため、文章の一部を①普通体、②です・ます体にする。

A 普通体使用『パリパリの PARIS (パリだ)』【4日目】

パリといえばルーヴル美術館だよ。友人の職場が近くなんでお昼を食べに行く約束してルーヴル近くを初めて一人で見て回った。そして、パリの歩行者信号がイギリスや日本と違う事を発見した。

B です・ます体使用『パリパリの PARIS (パリです)』【4日目】

パリといえばルーヴル美術館ですよ。友人の職場が近くなんでお昼を食べに行く約束してルーヴル近くを初めて一人で見て回りました。そして、パリの歩行者信号がイギリスや日本と違う事を発見しました。

まず、Aの普通体文は、終助詞が皆無なら普通の日記と変わらない。また終助詞をつけると、読み手への意識は出るものの、少々なれなれしい印象を与える。次にBの丁寧体文であるが、これでは手紙そのものである。ブログという場特有のものを感じさせない。

ブログとは、ネット上で不特定多数の人に読んでもらうことを目的とした日記である。したがって、新しいコミュニケーションのための文体が求められる。ブログでの「ス」の多用(特に動詞において)は、以下のような効果をもたらすと考えられる。

1) 韻を踏むおもしろさ

文末のおよそ半分は動詞であろう。動詞をも「ス」にしてしまえば、全ての文末を「ス」

で統一することができる。それにより、リズム感とおもしろさが出てくる。

2) 相手との距離を保ちながら親しさを表す

普通体文は終助詞を使わないと無愛想になり、使うとなれなれしくなりやすい。それに対し、「ス」の文は元々敬意表現であるから、なれなれしくなるのを防いでくれる。また、崩した表現であるため、親しさを伝えることができる。

3) 新鮮さを与える

話し言葉でも「手紙」でもない新しい書きかたによって、新鮮な印象を与えることができる。

4) 仲間意識を高める

共通の文体を愛用する「ブログ仲間」としての意識を持つことができる。

以上のことから、ブログにおける「ス」を多用した新しい文体には、それが流行るだけの理由と効果があるといえる。

8. 機能の変化（あいさつ言葉への使用から）

近年、あいさつ言葉に「ス」を付けて使う傾向が出てきた。そこで、前出の共同研究「新表現調査」と、倉持の個人研究である「キャンパスあいさつ調査」⁽¹³⁾において、あいさつことばと「ス」の使い方と使用率を調査した。その結果、「ス」の新しい機能が見えてきた。

8.1 新表現調査から男女別使用

「新表現調査」の結果、男子学生の63%が何らかのあいさつ言葉に「ス」を付けているのがわかった。しかし、女子学生では皆無であった（図3, 4）。

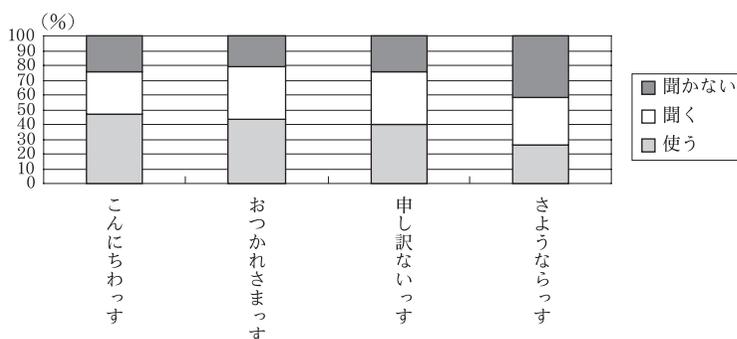


図3 男子学生「あいさつ+ス」

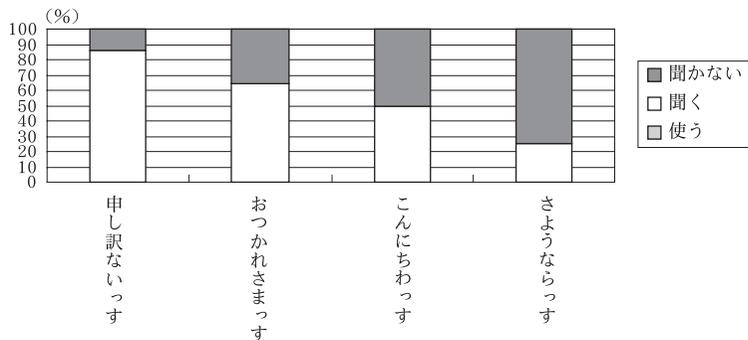


図4 女子学生「あいさつ+ス」

8.2 キャンパスあいさつ言葉調査から

キャンパスあいさつ調査の結果、あいさつの語尾に「ス」を付ける例がいくつも確認された。この中から、語尾が「ス」でも、「です」の縮約ではない「おす」や、その変形であろう「うす」「うっす」「うーす」「ういっす」等を除いた。その結果、「です」の縮約形「ス」の可能性のあるものが10グループ、22種、合計33例⁽¹⁴⁾になった。それを「ス」の前の語の形によってA、Bの2つのタイプに分けた。

1) タイプA (7グループ20種20例)

接続する前の語が一般的なあいさつ言葉の形を残しているものを「A」とした。

例：おはようっす こんにちはわす おつかれーす等

2) タイプB (3グループ3種13例)

前の部分と「ス」が一体化し、分けられなくなっているものを「B」とした。

例：ちよりっす ちゅーす ちーす等

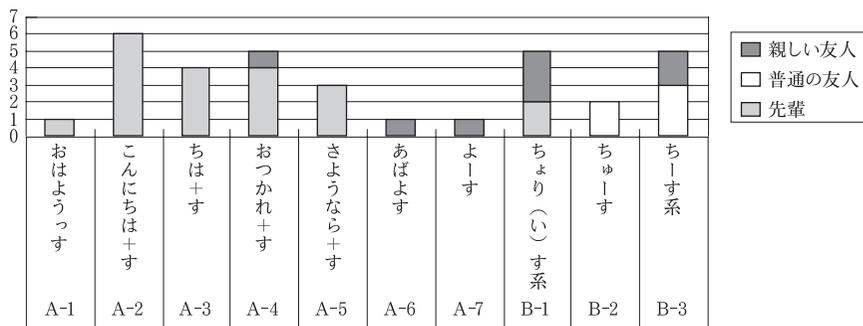


図5 「ス」のあいさつ対象別

(i) タイプ「A」の分析

このタイプは、「お疲れーす」「あばよす」「よーす」の3例を除き全てが先輩に対するあいさつになっている。「ちは」は「こんにちは」の略語であり、これを含めると「あばよす」以外は、ふだん「ス」なしで使われるごく一般的なあいさつ言葉である。先輩に対しては「おはようっす」「こんにちわっす」「さようならっす」といいながら、同じように敬意の対象である教師には「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」を使う。なぜ、先輩にはわざわざ「ス」を付けるのか。

日本語のあいさつでは、敬意を表せるものと十分に表せないものがある。「おはようございます」「お疲れさま」「ありがとうございました」「申し訳ございません」などは、「おはよう」「お疲れ」などとは敬意の面で差がある。一方「さようなら」「こんにちは」は、たとえ3歳児であれ大学教授であれ同じあいさつであるため、敬意を十分に表しにくい。しかも、これらは「出会い」「別れ」を表すコードである以上のメッセージ性を伝えにくい性格を持つ。

また、あいさつというものは、人間関係の保持を目的としているため、たいていすれ違いざまのわずかな間に相手に好印象を与えなければならない。しかし、日本語の敬意を示すあいさつは前出のように長いものが多い。これが「おはようっす」になると、敬意が表せると同時に短くてすむ。「ス」の持つ仲間意識や敬意のメッセージも伝えることができる。教師には「仲間意識」のメッセージは必要ないが、先輩には敬意と共に伝えたい気持ちが働くと考えられる。

また、「あばよす」を例にとると、「あばよ」だと少々乱暴に聞こえるが、敬意を表す「ス」を付けることで、相手のことを邪険に思っているのではない気持ちと、ちょっとした遊び心（親しさを込めた気持ち）が相手に伝えることができる。

(ii) タイプ「B」の分析

「こんにちは」の省略形である「ちわ」に「ス」を付けた「ちわす」がさらに変化し「ちゅーす」になったと考えられる。これは、今回のデータでは2名のみが普通の友人に使うとしたが、90年代に大流行した「スラムダンク」⁽¹⁵⁾では、監督や先輩に対しても使っていた。これがさらに変化して「ちーす」になったものと考えられる。「ちーす」には「ちゅーす」にわずかに残っていた敬意がさらに薄まり、ここでも「普通の友人」だけではなく「親しい友人」に使うという例が見られる。

現在、その出自がわからないものが「ちょり（い）す」である。これは2008年の流行語で、女性タレント⁽¹⁶⁾が使っているようだが、彼女が作ったものかどうか不明である。ただ、興味深いのは普通の友人には「ちょりー」を、親しい友人には「ちょりーす」を使うとした回答者がいた。親しい友人に「ス」の付いたあいさつことばを使う傾向は、データにも現れており、普通の友人には5例なのに対し、親しい友人に使うとした例は8例と若干多い。

今回、対象に加えなかった「おす」「うす」「うーす」等も、語末に「ス」を使うことから、その語源に関わりなく親しみが表せるあいさつと感じられているのではないか。

タイプBの分析により、挨拶に付ける「ス」には敬意表現からさらに変化し、若者たちがそれ

に親しさを表す機能を意識していることを示唆するものとなった。

9. ま と め

敬語を崩すことによって生まれた「ス」は、知性を隠す機能からネガティブポライトネスとポジティブポライトネスの両方の機能を併せ持つことになったと考えられる。これが40年以上を経て、運動部員以外の若者たちにも浸透し、さらに、テレビを通じて視聴者に語られるほど市民権を獲得した言い方となっている。しかし、アンケート調査から、女性の使用者は少なく、男言葉と一般的に認識されている。

ブログにおいては、口頭ではあまり使われない動詞接続が多用されている。これは、「ス」が品詞に関係なく接続できる「敬意と親しさを表す助動詞」に変化していることを表している。

また、あいさつ言葉に付けられた「ス」は、助動詞から接尾語へ変化している。さらに「ちゅーす」のように一語化してしまったものは、語末の「ス」から敬意の機能が薄れ、親しさを表す機能を担う「パーツ」と変化している。

謝 辞

聞き取り調査にご協力くださった方々、井上・倉持共同研究アンケートにご協力くださった方々、「あいさつ」調査回答者の中央学院大学法学部の皆さんに、心からの感謝をお伝えいたします。

〈注〉

- (1) 『フジ三太郎』での初出は1966年9月22日朝日新聞(夕刊)、『サザエさん』では1967年2月から翌年5月までの間、朝日新聞(朝刊)に掲載された(掲載日不明)。
- (2) 文書資料は、小説、コミックなど流行表現を反映しているものが中心である。聞き取り調査は、70代1人、60代1人、50代1人、40代1人の計4人(いずれも男性)である。ただし、60代の俳優へは、マネージャーを通じてのメールのやり取りのみで行った。
- (3) この「知性隠し」を裏付ける材料は、まだ十分とはいえない。今後はこれを作業仮説とし、アンケートなどで裏付けたいと考えている。
- (4) 『Politeness Some universals in language usage』pp.178-187のNegative politeness Strategy 5 “Give deference”に当たる。
- (5) (4)と同書pp.111-112のPositive politeness Strategy 4 “Use in-group identity markers”にある“Contraction and ellipsis”に通じる。「ス」は敬意表現のため、仲間内のマーカーと言い切ることにはできないが、本来の形を崩すことが許される親しみのマーカーにはなっている。
- (6) 井上史雄・倉持益子「若者新表現アンケート」。2008年6月から12月まで東日本の9つの大学の協力を得、同年12月現在集計中。この論文には、集計が終わった3校のデータのみ掲載した。
- (7) 協力大学3校は、東京23区内1校、千葉県湾岸部1校、同県内陸部1校でインフォーマット数94人、性別不明などで本稿のデータとして使用したのは男子57人、女子28人、計85人である。
- (8) 2008年8月11日、北島康介100m平泳ぎで優勝した直後、涙ぐみながらのインタビューで。
- (9) 同年8月13日、松田文志200mバタフライ決勝で3位に決まったときのインタビュー。
- (10) 同年8月15日、石井慧柔道100kg超級で優勝した直後のインタビューで。
- (11) 2008年9月17日放送『開局45周年記念番組速水もこみちが世界のピラミッドに登る!』テレビ東京。

- (12) 秋葉洪之助ブログ『パリパリの PARIS (パリっす) 4日目』より (引用・参考資料参照)。
- (13) 中央学院大学法学部 1年生から 4年生の男子 53名, 女子 2名を対象とし, 2008年 4月実施した。回答形式は使う場面ごとに, よく使うあいさつを自由に書き入れてもらうものである。
- (14) 語源が同じで形の違いもわずかなもの (レーベンシュタイン距離で 3以下) を同じ「グループ」, 音声上の違いを持つものを「種」として数えた。例えば, 「ちわっす」「ちわす」「ちわーす」は, 「ちわ(は) +す」という同じグループに属すが, 「種」としては, 「3種」である。また, 「例」とは, 集計に表れた数で, 「延べ語数」に当たる。
- (15) 『SLAM DUNK』井上雄彦作のバスケットボール漫画で, 1990年から 1996年まで週刊少年ジャンプに連載され, 後にアニメ化もされた。単行本の発行部数約 1億 2000万部 (2007年)。
- (16) タレントの木下優樹菜がバラエティ番組で使う, 出会った時のあいさつ言葉である。

引用・参考資料

『秋葉洪之助の今日も行き当たりばったりっす! パリパリの PARIS (パリっす) 4日目』1999-2001の旅行記 <http://www.ricewine.f2s.com/pages/akiba/pages/10.htm> 2008年 12月 9日掲載文再確認

サトウサンペイ (1974) 『フジ三太郎』1~4巻, 朝日ソノラマ

長谷川町子 (1997) 『長谷川町子全集』1~18巻, 朝日出版社, 第 18巻 p. 207・p. 264

参考文献

尾崎喜光 (2002) 「新しい丁寧語「(っ)す」『男性のことは・職場編』現代日本語研究会編, ひつじ書房, pp. 89-98

中村桃子 (2007) 「新しい「男ことば」の登場——「です・ます」から「ス」へ」『〈性〉と日本語ことばがつくる男と女』NHKBOOKS, 日本放送出版協会刊, pp. 59-73

Brown & Levinson (1987) “Politeness Some universals in language usage” Cambridge

〈論文〉

書きことばにおける形容詞の使用状況

— 学習者と母語話者の比較 —

木下謙朗

キーワード：形容詞，書きことば，修飾部用法，述部用法，多様性

1. はじめに

本研究は日本語学習者と日本語母語話者（以下，JNS）の作文に表出した形容詞⁽¹⁾の表出状況を観察したうえで，先行研究で述べられている日本語学習者とJNSの話しことばにおける形容詞の表出状況を比較し，その特徴を明らかにするものである。

形容詞は多くの教科書で初級の早い段階で導入されており，『日本語能力試験出題基準 [改訂版]』（国際交流基金・日本国際教育支援協会 2007，以下，『出題基準』）では，4級の文法リストにあげられている。

(1) 『日本語能力試験出題基準 [改訂版]』— 4級— (国際交流基金・日本国際教育支援協会 2007)

- | | |
|----------------------|------------------------|
| A. 文法事項 | 6 形容詞+名詞 |
| A-I 文型/活用等 | 7 形容詞+ノ |
| [途中省略] | 8 形容動詞の現在形/過去形（肯定，否定） |
| 3 形容詞の現在形/過去形（肯定，否定） | 9 形容動詞の「テ形」（デス/ダの中止形デ） |
| [例文省略，以下同] | 10 形容動詞の連用形+動詞 |
| 4 形容詞のテ形 | 11 形容動詞+名詞 |
| 5 形容詞の連用形+動詞 | 12 形容動詞+ノ（ノ=名詞の代用） |

（『出題基準』 pp. 127-128）

このように『出題基準』では形容詞の機能として，述語として機能する述語用法，名詞の修飾語として機能する連体用法，動詞を修飾する連用用法の3つの機能があげられており（橋本・青山 1992），述語用法と連体用法は同時に導入されている教科書が多くみられる。

2. 先行研究

日本語学習者や JNS が使用する形容詞の表出位置についての調査報告はいくつかある。曹・仁科 (2006a) では JNS の作文に表出した形容詞について、曹・仁科 (2006b) では日本語学習者 (中国語母語話者) の作文に表出した形容詞について、イ形容詞とナ形容詞が修飾部、述部でそれぞれどのくらい表出しているのかを調査している。その結果、イ形容詞についてみると、JNS は述部での使用が修飾部の使用の約 4 倍となっているが、学習者は修飾部と述部で約 10% の違いしかみられず、修飾部と述部でほぼ同様の使用がみられる。ナ形容詞についてみると、JNS は修飾部と述部でほぼ同様の使用がみられるのに対し、学習者は述部よりも修飾部での使用が約 30% 多くなっており、イ形容詞とナ形容詞に共通して JNS より学習者のほうが修飾部での使用が多くみられ、JNS と学習者で修飾部と述部、イ形容詞とナ形容詞の表出数の割合が異なっていることが報告されている。

また、仁田 (1988) では現代小説 (520 頁余り) に表出する形容詞を、名詞を修飾限定する用法と、述語として働いている用法とに区別し調査している。ここでは、イ形容詞とナ形容詞の区別はされていないが、述部にあらわれる形容詞は修飾部にあらわれるものの約半分しか出現せず、曹・仁科 (2006a, b) とは異なる表出状況となっている。曹・仁科 (2006a, b)、仁田 (1988) はいずれも書きことばの調査であるが、話しことばの調査については木下 (2007) がある。

木下では学習者 (英語, 中国語, 韓国語をそれぞれ母語とする) の資料を自然発話といわれている (ニャンジャローンズック 2001 等) 「KY コーパス」を使用し、また JNS の資料は「上村コーパス」を使用し修飾部と述部にあらわれる形容詞について調査している。その結果、形容詞の修飾部と述部の割合が、イ形容詞とナ形容詞に共通してレベルの上昇にともない JNS に近づくと言われている。

そこで本稿では、日本語学習者と JNS の書きことば⁽²⁾ に表出した形容詞の使用状況を概観し、学習者と JNS で形容詞の使用実態 (表出位置, 使用語彙) は異なるという仮説を立て、分析する。

3. 調査資料

本稿では、国立国語研究所 (2001) の『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース ver. 2. CD-ROM 版』から抽出した CNS (課題 1, 課題 2, それぞれ 5 名), KNS (課題 1, 課題 2, それぞれ 5 名), JNS (課題 1, 課題 2, それぞれ 5 名) の計 30 名分を使用する。CNS, KNS の学習時間は約 1,000 時間程度である。課題 1 は「あなたの国の行事について」、課題 2 は「たばこについてのあなたの意見」である。学習者、JNS への課題の指示は以下のようなものである。

・日本語母語話者への課題

以下の課題からひとつを選び、日本語で 800 字程度の作文を書いてください。日本の事情をよく知らない国外の人びとに読んでもらうつもりで書いてください。

作文課題 1

日本の行事や祭り、祝い事などの中からひとつを選び、日本語で紹介文を書いてください。

作文課題 2

喫煙を規制するかどうかには賛否両論があります。喫煙は百害あって一利ないものであるから、公共の場所ではたばこを吸えないよう法律で規制すべきだ、またたばこのコマーシャルは子どもに悪影響を与えるから、テレビ等での放送も厳しく制限すべきだ、という意見がある一方、喫煙者にも喫煙の権利があるはずだから、規則で一律に禁止するのは不当である、という意見もあります。この件に関するあなた自身の考えを、規制反対か賛成か必ずどちらかの立場に立ったうえで、日本語で論じてください。

・日本語学習者への課題

作文課題 1

あなたの国にある行事やお祭り、おいわいごとなどをひとつえらんで、日本人の学生や大学の先生たちに日本語で紹介してください。800 字くらいで書いてください。

作文課題 2

今、日本ではたばこのことが問題になっています。ある人は言います。「会社やレストラン、バスや電車など公共の場所ではたばこを吸えないよう規則を作るべきだ。また、たばこのコマーシャルは子どもに悪い影響を与えるから、テレビで放送できないようにするべきだ」。

一方、次のように言う人もいます。「規則を作って禁止するのはおかしい。だれにもたばこを吸う権利があるはずだ」。

あなたはどのように思いますか。たばこについてあなたの意見を書いてください。

4. 結果と考察

4.1 形容詞の表出状況

学習者と JNS の資料 (30 編) から抽出した形容詞は、イ形容詞 139 例、ナ形容詞 91 例であった。図 1, 2 は形容詞の表出数を形容詞の種類別 (イ形容詞とナ形容詞)、表出位置別 (修飾部と述部) に分けたものである。図 1 の課題 1 では、どの母語話者においても総表出数が約 40 例となっているが、表出位置や形容詞の種類は母語によって異なっている。図 2 の課題 2 では、母語によって総表出数、表出位置、種類が大きく異なっているのがわかる。特に、JNS の表出数は KNS の約

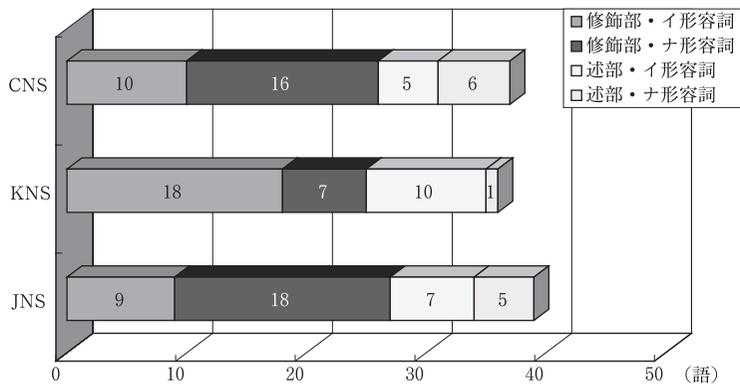


図1 形容詞表出状況 (課題1)

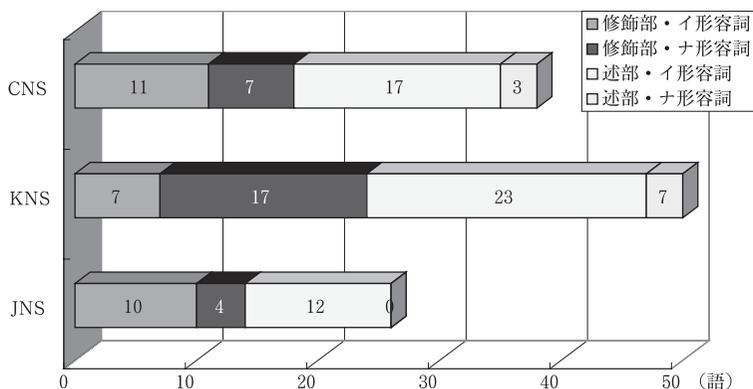


図2 形容詞表出状況 (課題2)

半数となっており、作文のトピックによって使用する形容詞が異なると予想できる。

作文の字数は課題の指示によると「800字程度」とあるが、書き手によって異なっていると思われる。そこで母語別に文節数を計算したところ(表1)、母語や課題によって文節数は異なっていることがわかった。この結果を踏まえ、1文節あたりに何語の形容詞が使用されているかを母語別に比較するため、図3、4に1文節あたりの表出状況を課題別に示す。

1文節あたりの形容詞の表出状況を観察すると、課題1(図3)の場合はJNS>KNS>CNSの順で高くなり、課題2(図4)の場合はKNS>CNS>JNSの順で高くなっていた。課題1の「行事」についての作文は、学習者とJNSでほぼ同数の形容詞の使用がみられたが(図1)、1文節あたりの表出状況をみると(図4)、JNS>KNS>CNSの順で形容詞の使用頻度が高いことがわかつ

表1 母語別にみた文節数

		文節数
JNS	課題1	67
	課題2	94
CNS	課題1	106
	課題2	86
KNS	課題1	80
	課題2	99
学習者 ⁽³⁾	課題1	93
	課題2	92.5

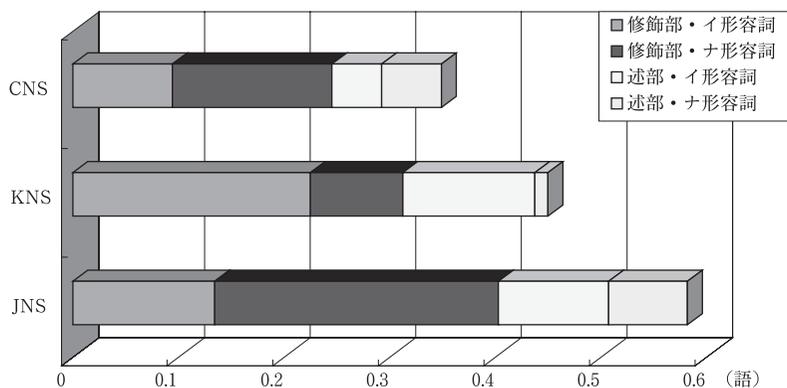


図3 1文節あたり形容詞表出状況(課題1)

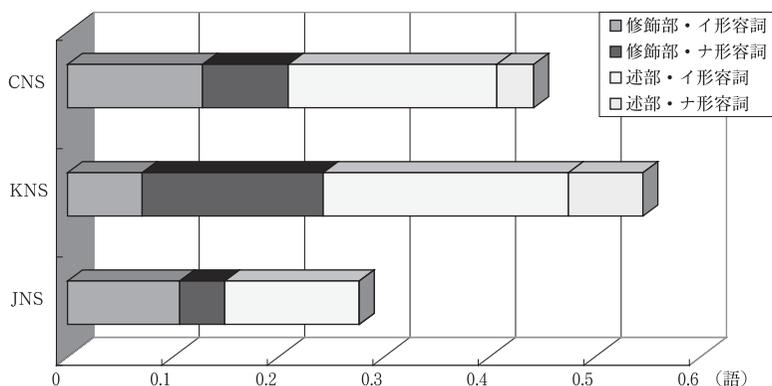


図4 1文節あたり形容詞表出状況(課題2)

た。課題2の「喫煙の規制」については、形容詞の使用数と1文節あたりの表出状況に強い正の相関がみられた($\gamma=0.993$)。このことから、課題2においては形容詞の使用頻度や文節数は母語により異なるが、1文節あたりの形容詞の使用頻度はKNS, CNS, JNSで共通していることが明らかとなった。

次に、表出した形容詞を表出位置別、種類別に割合(100%積み上げ)を出したのが図5, 6である。

図5から課題1においては、学習者とJNSに共通して形容詞の表出位置が修飾部で約65%となっているが、形容詞の種類は母語により異なっていることがわかる。また、図6から課題2においては、形容詞の表出位置が学習者は修飾部で約45%となっているが、JNSは約60%となり、学習者とJNSで異なった結果となった。形容詞の種類については、課題1と同様に母語により異なっていた。

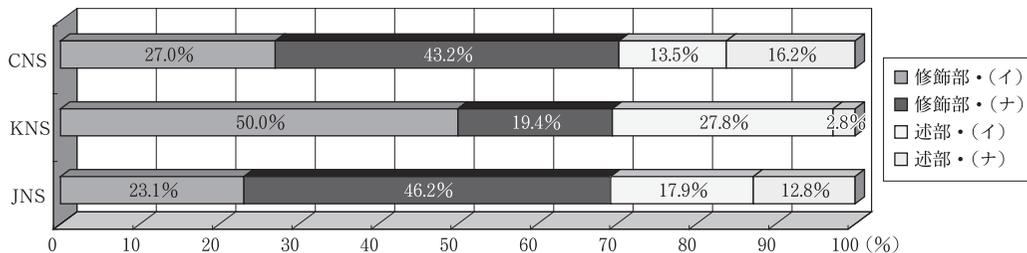


図5 1文節あたり形容詞表出頻度 (課題 1)

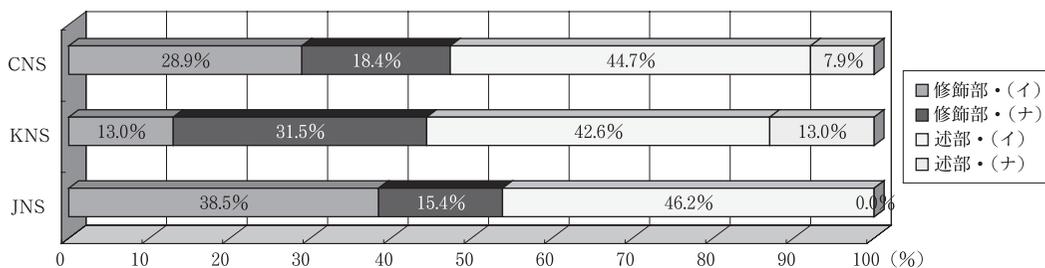


図6 1文節あたり形容詞表出頻度 (課題 2)

4.2 書きことばと話しことばの比較

次にイ形容詞とナ形容詞が、修飾部と述部に表出する割合を、先行研究(木下 2007)の話しことばと比較し、書きことばと話しことばの差異を観察する。図 7, 8 の上部 3 つは本研究の書きことば、下部 5 つは先行研究の話しことばである。

その結果、修飾部で使用する割合は、話しことばと書きことばに共通してイ形容詞よりもナ形容詞が多い。また、イ形容詞とナ形容詞に共通して、話しことばよりも書きことばのほうが、修飾部で使用する割合が 10% 以上も高くなっていることが明らかとなった。その理由として、話しことばの場合は瞬間的に使用する語彙を頭の中で処理しなければならないが、書きことばの場合は時間的にも視覚的にも自身で推敲する機会があるため、形容詞を述語用法ではなく、連体用法として使用することが多くなったと考えられる。話しことばである先行研究の場合、レベルの上昇にともない発話する際に自動化がおり、推敲する時間が短くなることから形容詞の修飾部での使用が増加するのであろう。

4.3 形容詞の頻度

最後に修飾部のイ形容詞、修飾部のナ形容詞、述部のイ形容詞、述部のナ形容詞として使用される形容詞を質的に観察する。使用される形容詞の種類や頻度は作文の課題によって異なると思われるが、本研究では学習者と JNS で同一のトピックで書かれた作文を使用し観察をしている。そのため、同一課題における形容詞の使用状況は、学習者より JNS のほうが異なり語数も多く、使用

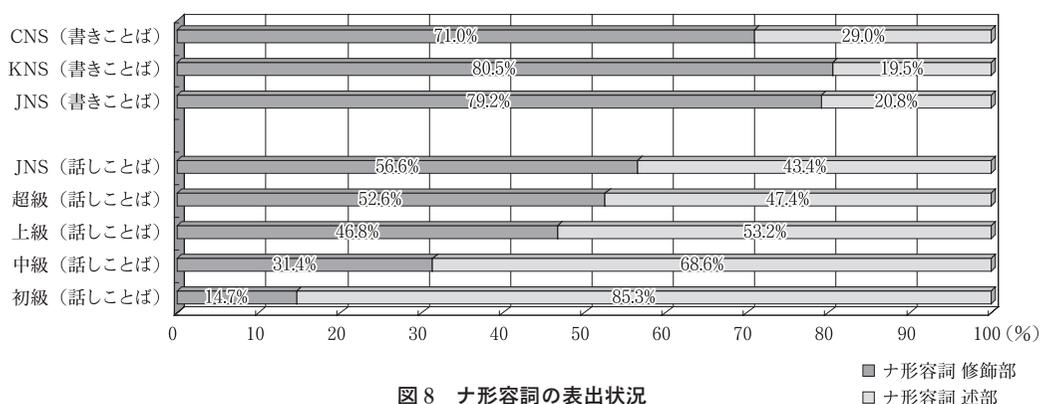
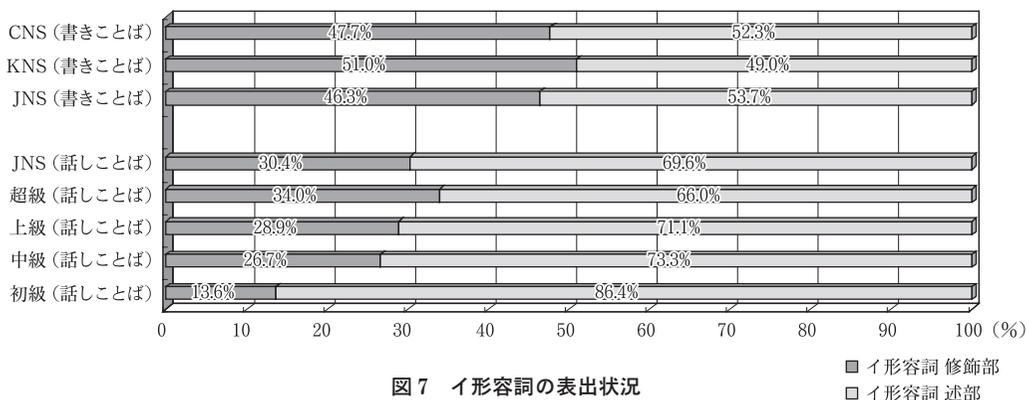


表 2 課題 1 の多様性

	イ形容詞		ナ形容詞	
	修飾部	述部	修飾部	述部
CNS	0.80	1.00	0.50	0.83
KNS	0.72	0.70	0.86	1.00
JNS	0.88	0.88	0.67	0.83

表 3 課題 2 の多様性

	イ形容詞		ナ形容詞	
	修飾部	述部	修飾部	述部
CNS	0.27	0.59	0.86	0.67
KNS	0.71	0.35	0.76	0.71
JNS	0.60	0.50	1.00	0.00

語彙の多様性も高いと筆者は予想していた。しかし、表 2, 3 の結果をみると（数値は 1 に近ければ近いほど多様性が高い）すべての表出位置、形容詞で JNS の多様性が高いわけでもなく、形容詞の表出しない箇所（網掛け部）も存在した。

また、書きことばとして使用される形容詞は、学習者よりも JNS のほうが難易度の高い語彙を使用すると予測していた。しかし、実際に表出した形容詞を母語別、表出位置別にみても（表 4～9：各母語話者の表出した形容詞の語彙表を参考資料として付記する）、JNS の使用語彙が特別難易度の高いものばかりではなかった。ナ形容詞においては、学習者にも 1 級・2 級の語彙使用があり、母語による使用語彙の難易度の違いはみられなかった。

5. おわりに

本稿は書きことばにおける形容詞の表出状況について、学習者と JNS と比較し、また書きことばと話しことばとの比較をおこなった。その結果、以下の3点が明らかとなった。

- ① 作文の課題により、使用する形容詞数、1文節あたりの表出頻度、修飾部と述部の表出割合は異なる。
- ② 話しことばと書きことばを比べると、形容詞の種類に関係なく書きことばにおいて修飾部での使用が多い。
- ③ 使用形容詞の多様性と難易度は学習者に比べ JNS が高いというわけではない。

河野（2008）では話しことばの特徴として以下のように述べている、

日常談話では、連体修飾語の割合が少なく、独立語が多い。また、文構造が単純で短い物が多く、一文中の多くの情報をつめこもうとするのではなく、短い積み重ねによって少しずつ段階を追って情報の伝達を行おうとしている。

今回の結果では、話しことばよりも書きことばにおいて連体用法の使用が高いことが明らかになったが、これは河野（2008）を支持する結果であったといえるだろう。連体用法の少ない話しことばは学習者のレベルの上昇にともない、連体用法が増加するとの報告があったが（木下 2007）、書きことばにおいてもレベルの上昇によって変化するものだろうか。今後は書きことばについて、レベル変化による連体用法の使用割合の変化や、連体用法で使用される形容詞や、形容詞と共起する名詞の特徴を明らかにし、使用頻度の高い形容詞や共起する名詞の語彙教材などを作成し、日本語教育の現場に応用できればと考えている。

〈注〉

- (1) 本稿で「形容詞」を使用するときはイ形容詞とナ形容詞の両方を含むものとする。
- (2) 本稿でいう「書きことば」とは単に書かれたもの（作文）を指すこととする。
- (3) 学習者とは CNS と KNS の平均。

参考文献

- 河野俊之（2008）「話し言葉の教育」『日本語学』vol. 27-5 臨時増刊号、特集 話し言葉の日本語、212-221
- 木下謙朗（2007）「日本語学習者のイ形容詞の使用実態 — 母語別習得モデルに向けて —」『第18回第二言語習得研究会全国大会予稿集』、73-78、第二言語習得研究会（JASLA）
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会（編）（2007）『日本語能力試験出題基準 [改訂版]』
- スニーラット・ニャンジャロンスック（2001）「OPI データにおける「条件表現」の習得研究 — 中国語、

- 韓国語, 英語母語話者の自然発話から —— 『日本語教育』 111号, 26-35
- 曹紅荃・仁科喜久子 (2006a) 「中国人学習者の産出した共起表現から見る語彙習得の問題 —— 作文対訳データベースの活用 ——」 第56回第二言語習得研究会配布資料
- (2006b) 「中国人学習者の作文誤用例から見る共起表現の習得及び教育への提言 —— 名詞と形容詞及び形容動詞の共起表現について ——」 『日本語教育』 130号, 70-79, 日本語教育学会
- 田中稔子 (1990) 『田中稔子の日本語の文法 —— 教師の疑問に答えます ——』 近代文藝社
- 仁田義雄 (1988) 「日本語文法における形容詞」 『月刊言語』 Vol. 27, No. 3, 26-35, 大修館書店
- 橋本三奈子・青山文啓 (1992) 「形容詞の三つの用法: 終止, 連体, 連用」 『計量国語学』 18巻 5号, 201-204, 計量国語学会
- 水谷信子 (1994) 『日本語の教え方・実践マニュアル 実例で学ぶ誤用分析の方法』 アルク

表 8 KNS 表出語彙 (課題 2)

修飾部 (イ)	基準 (級)	表出数	修飾部 (ナ)	基準 (級)	表出数	述部 (イ)	基準 (級)	表出数	述部 (ナ)	基準 (級)	表出数		
よ	い	4	2	いろいろ	4	3	よ	い	4	7	当たり前	2	2
悪	い	4	2	きれい	4	2	い	い	4	5	重要	2	2
大きい	い	4	1	有害	級外	2	苦しい	2	3	大丈夫	4	1	
幼い	い	2	1	～的	2	1	多い	3	2	大変	4	1	
楽しい	い	4	1	おろか	1	1	高い	4	2	敏感	1	1	
				様々	2	1	若い	4	2				
				重要	2	1	おかしい(変)	3	1				
				好き	4	1	ない	4	1				
				健やか	1	1							
				大変	4	1							
				敏感	1	1							
				下手	4	1							
				無責任	級外	1							
異なり語数		延べ語数		異なり語数		延べ語数	異なり語数		延べ語数	異なり語数		延べ語数	
5		7		13		17	8		23	5		7	

表 9 JNS 表出語彙 (課題 2)

修飾部 (イ)	基準 (級)	表出数	修飾部 (ナ)	基準 (級)	表出数	述部 (イ)	基準 (級)	表出数	述部 (ナ)	基準 (級)	表出数	
悪	い	4	3	正当	1	1	ない	4	6			
い	い	4	2	多大	級外	1	多い	3	2			
小さい	い	4	2	適当	3	1	い	い	4	1		
有難い	い	2	1	必要	3	1	おかしい(変)	3	1			
狭い	い	4	1				久しい	1	1			
難しい	い	4	1				悪い	4	1			
異なり語数		延べ語数		異なり語数		延べ語数	異なり語数		延べ語数	異なり語数		延べ語数
6		10		4		4	6		12	0		0

〈論文〉

韓国人日本語学習者の特殊拍の認知について

— 日本語母語話者との比較 —

任 星

キーワード：特殊拍，認知，脳波，日本語母語話者，韓国人日本語学習者

はじめに

日本語学習者にとって特殊拍の知覚と生成の問題は、以前から指摘されており、例えば「切って」が「きて」に、「来て」が「きって」となる特殊拍の脱落や挿入が起きることが知られている。このような現象は知覚と産出に並存する問題である（戸田 2003）。また、日本語母語話者は母音の持続時間に基づいて、長母音と短母音を異なる音韻として区別していることが知られている（藤崎・杉藤 1977）。しかし、日本語学習者の多くにとって、母音の長さを適切な長さに制御して発音することや母音の長短を正確に知覚することは容易ではなく、このことは、学習者の母語や日本語レベルにかかわらず広く観察されている（助川 1993, 小熊 2002）。

通常、知覚の習得は生成に先行すると考えられているが、これとは逆の事例や、聴取能力の向上が必ずしも発音の正確さには結びつかないという調査結果も報告されている（戸田 2003）。知覚と生成が一致しなければならないという理論的根拠はないが、両者は密接な関係にあると言える。この関係を解明する科学的方法に脳波実験による解析がまさにそれにあたるのではないかと思う。言語音知覚を評価する新しい手法として、脳波の一種である事象関連電位（ERP）^①を脳波から取り出すことにより、言語音知覚による脳活動を調べることが可能である。言語脳科学の研究成果は、直接的とは言わずとも第二言語習得研究と外国語教育学に影響を与えるものであると指摘されている（窪田 2005）。近年の言語脳科学の発展を見ると、文法・意味・音声・語彙・談話などの多様な角度からの研究が活発に行われているが、日本語教育研究分野においては、まだまだ研究や報告が少ないのが現状である。

そこで、本稿ではERPを使った脳波実験を行い、日本語母語話者（以下母語話者）および韓国人日本語学習者（以下学習者）を対象に脳神経レベルにおける特殊拍の認知実態について探った。その結果、母語の違いにより、違う方略で特殊拍を認知していることと、母語話者では長音、学習者では促音に高電圧が現れたことを指摘する。

1. 先行研究と課題

城生 (2007), 丸島 (2006) の研究では, ERP を使った脳波実験を行い, 脳神経レベルにおける日本語モーラの正体について考察した。その結果, モーラより音節の聴き分けが ERP に及ぼす影響が大きいと述べている。また, 任 (2007, 2008a) ではそれぞれ韓国語母語話者と日本語母語話者を対象に日本語モーラ認知の実験を行った結果, 母語と関係なく, 特殊拍を含む刺激音と特殊拍を含まない刺激音の間では有意差が見られたと指摘している。しかし, これらの研究はいずれも特殊拍の有無による有意差があるという報告だけであって, 特殊拍の種類によって認知スタイルがどのように異なるかについては言及されていない。そこで, 本稿では特殊拍のみを取り出して分析を試みる。その際, 以下の3点に着目する。

- ① 特殊拍の種類によって認知実態が違うか否か。
- ② アクセント型の違いによる差はあるか否か。
- ③ 母語の違いによる差はあるか否か。

2. 手順と解析方法

本実験に入る前に被験者に課題の目的と内容を十分に説明し, 実験に対する理解と許可を得た。被験者をシールドルーム⁽²⁾内の椅子に座らせ, 国際 10-20 法⁽³⁾に基づくエレクトロ・キャップ (Electro-Cap International 社製, ECI-2) を装着させた。実験はノーマルによる silent repetition⁽⁴⁾ によった。各刺激音の呈示間隔はおよそ 3,000 ms である。刺激音は各刺激音につき 35 回呈示で, 計 210 回である。再生音圧は 65 dB SL⁽⁵⁾ (音圧計: リオン社製・型式 NL-14)。

被験者にスピーカーからランダムで出てくる刺激音を「頭の中で繰り返すように」指示を与えた。また, 最も安定した脳波が得られるようにいろいろ考慮した。被験者がリラックスした状態で, 座ってもらい, 課題を聴く際に ERP 波形に影響を及ぼす要因となる行動などについて被験者に注意をさせた。取り込みは単発課題⁽⁶⁾で, 加算平均回数は 35 回⁽⁷⁾である。

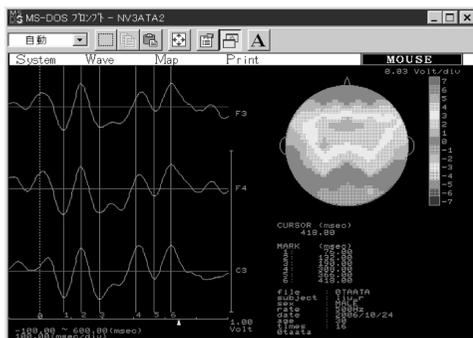


図 1

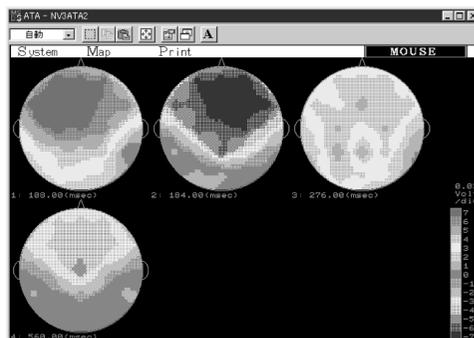


図 2

城生 (1997) で行っている方法に則り、解析ソフト ATAMAP の波形とトポグラフィーを摺り合わせ、ソフト搭載のマーキング機能で陰性波・陽性波で最も色濃くトポグラフィーが反応したところでカーソルを立てた (図 1)。そのカーソルを立てた時点でのトポグラフィーを並べたものが図 2 である。

被験者の瞬目などによるアーチファクト⁽⁸⁾が発生したため、取り込みソフト EPLYZER を用いて RAW データ再加算を行った。潜時と、図 2 で示したトポグラフィーのように、目で読み取れる電圧の相対差をもとに情報処理を行い、結果を求めた。なお、データ処理を行う際、以下の点に注目した。

- ① N 1, P 2, N 2, P 3 のピーク潜時 (PL, Peak Latency の略)
- ② 「P 2-N 1」, 「N 2-P 2」, 「P 3-N 2」のピーク間潜時 (IPL, Inter Peak Latency の略)
- ③ N 1 から P 3 までのピーク潜時相加平均値
- ④ N 2, P 3 の電圧情報
- ⑤ アクセント型

3. 被験者

学習者は 2 名とも上級日本語学習者で、日本滞在歴は 3 年以上である。本実験では、被験者が持つ音声上の特徴を統一するため、母語話者および学習者とも同一方言話者に限定した。

表 1 被験者情報

母語	被験者	性別	年齢	利き手	職業	母方言
日本語 (J)	JM	男	22	右	大学生	東京方言
	JF	女	22	右	大学生	東京方言
韓国語 (K)	KM	男	36	右	大学研究員	ソウル方言
	KF	女	28	右	大学院生	ソウル方言

4. 刺激音

林 (1990a, 1990b), 林・寛 (1989, 1990) など脳神経科学の分野における先行研究では、音素

表 2

刺激音	調音時間長 (ms)	
	平板型	頭高型
taRta ⁽⁹⁾	584	483
taNta	588	517
taQta	587	553

刺激音調音：東京方言話者 (20 代男性)

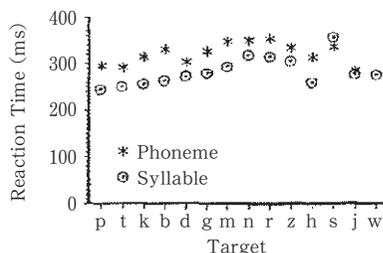


図 3 音素・音節ターゲット毎の反応時間 (林・寛 1989)

の種類によって脳内での反応時間が異なることが指摘されている。日本語の場合、/p/, /t/ など立ち上がりの鋭いものは潜時が短く、/s/, /r/, /n/, /m/ などでは逆に潜時が比較的長めになることが報告されている（図3）。本実験における刺激音の作成にあたっては、被験者の聴覚印象を考慮に入れ、子音は破裂音 /t/ に、母音は最も安定度が高く明るい音色を帯びている /a/（城生1997）の組み合わせを用いた。また、日本語に実際に存在する有意味語を刺激音にすることも考えられるが、本実験ではより客観的な結果を得るため、無意味語を刺激音にした。

表3 潜時情報（平板型） 単位：ms

成分	刺激音	JF	JM	KF	KM
N 1	長音	124	112	114	130
	撥音	130	132	112	122
	促音	124	124	120	128
P 2	長音	184	196	180	188
	撥音	192	208	194	188
	促音	192	196	186	196
N 2	長音	290	330	306	376
	撥音	264	296	298	266
	促音	268	354	284	332
P 3	長音	544	418	544	536
	撥音	464	356	672	452
	促音	320	432	540	532

表4 潜時情報（頭高型） 単位：ms

成分	刺激音	JF	JM	KF	KM
N 1	長音	124	120	112	122
	撥音	122	114	114	122
	促音	128	128	128	128
P 2	長音	188	180	194	192
	撥音	192	200	186	184
	促音	188	204	202	196
N 2	長音	272	336	308	306
	撥音	272	370	338	320
	促音	306	360	332	312
P 3	長音	564	560	546	568
	撥音	356	458	600	554
	促音	364	484	464	600

5. 結果

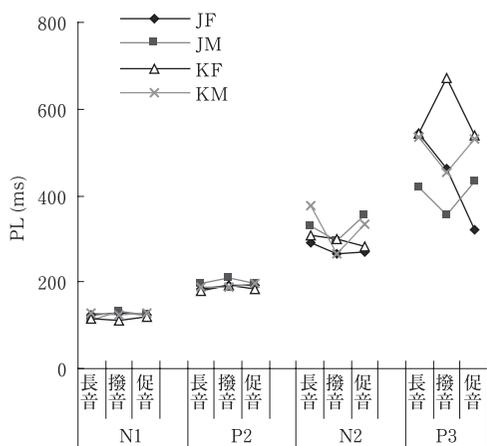


図4 ピーク潜時（平板型）

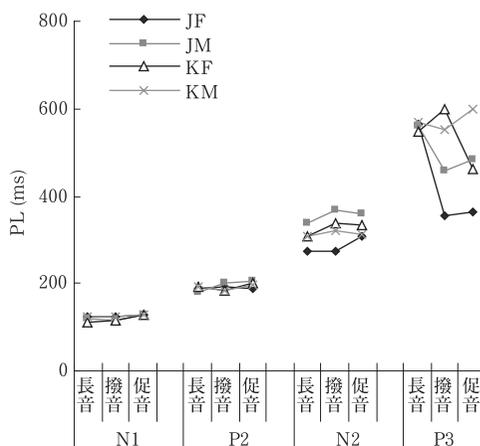


図5 ピーク潜時（頭高型）

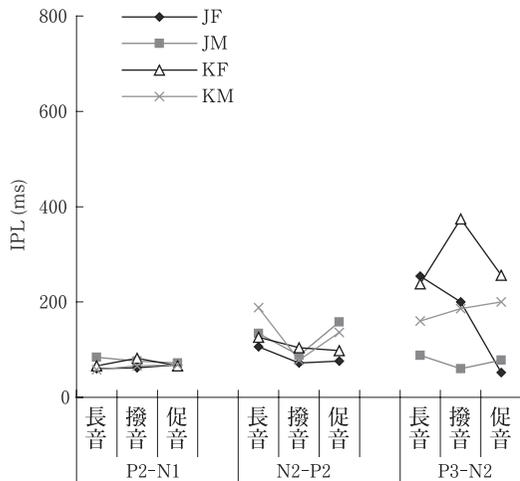


図6 ピーク間潜時（平板型）

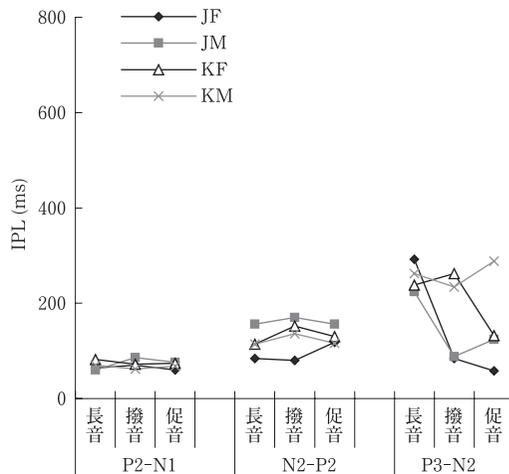


図7 ピーク間潜時（頭高型）

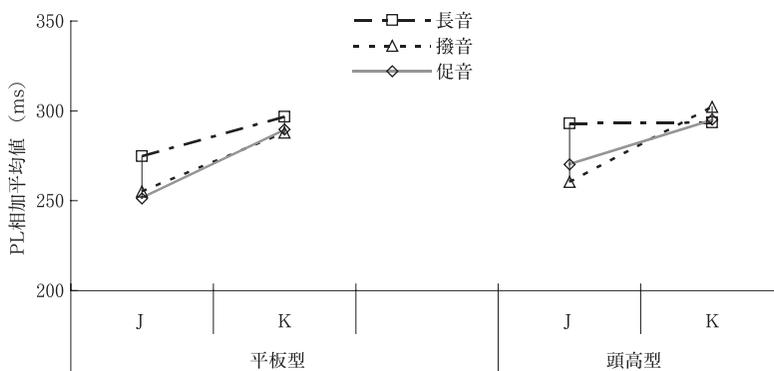


図8 ピーク潜時の相加平均

表5 電圧情報（平板型）

成分	刺激音	JF	JM	KF	KM
N 2	長音	1	2	2	2
	撥音	2	1	3	3
	促音	3	3	1	1
P 3	長音	2	2	2	2
	撥音	1	3	3	3
	促音	3	1	1	1

** 数字が大きいほど電圧が低い

表6 電圧情報（頭高型）

成分	刺激音	JF	JM	KF	KM
N 2	長音	2	1	2	2
	撥音	1	2	1	3
	促音	3	3	3	1
P 3	長音	1	1	1	3
	撥音	3	2	2	2
	促音	2	3	3	1

** 数字が大きいほど電圧が低い

表5と表6は、トポグラフィー上でのN2, P3を取り出して、電圧の最も高い特殊拍を「1」、次に高い特殊拍を「2」、一番低い特殊拍を「3」という順に、点数をつけたものである。この方法は主観的に認知における脳の反応が確認できる。

6. 考 察

まず、N1, P2のピーク潜時に注目すると、アクセント型や母語を問わず顕著な動きは見られない(図4, 図5)。城生(1998)によれば、N1, P2は基本的には聴覚皮質の反応であるが、内因性の成分が重畳しており、語音判断の根拠となる。また、N1, P2は通常ペアで出現し、睡眠時には出現しないことから、高次機能の認知と関わる事が確かめられているといわれる。特殊拍の潜時に変化が大きく現れていないことは、この段階において特殊拍の区別はしていないのではないかと考えられる。

具体的にN1, P2に注目することにする(表3, 表4)。まず、平板型N1から分析すると、わずかな差ではあるが、母語話者においては、撥音の潜時が遅れていることがわかる。逆に学習者で遅れているのは促音で、撥音は早くなっている。次に、頭高型を見ると、母語を問わず促音が最も遅くなっている。それに対し、KFを除いたほかでは撥音が早いほうである。P2の潜時をみると、平板型では母語を問わず撥音が遅れているが、長音は早くなっていることが確認できる。頭高型で、JFを除いたほかでは促音の潜時が遅い。また、潜時が早くなっているのは母語話者では長音で、学習者では撥音である。

顕著な動きが見られたのはN2, P3である。N2は二番目に立ち上がった陰性波で、注意力と高い相関を示している。従って、言語音のような対象では、特に注意が傾けられると大きな振幅を持って出現しやすいと言われている⁽¹⁰⁾。この段階において、潜時に大きい変化が現れたことは、特殊拍を区別する認知処理はN2から始まるのではないかと考えられる。具体的にみると、N2において、平板型ではJMを除いたほかで長音、頭高型ではJFを除いたほかで撥音が遅れていることがわかる。一方、早くなっているのは、平板型では撥音、頭高型では長音である。

次にP3の潜時について分析する。P3は三番目に立ち上がった陽性波で、一般的な思考、判断等の高次機能を反映するといわれている。P3においては、アクセント型を問わず、明らかに学習者のほうが遅れていることがわかる。また、長音ではJMを除いたほかでは非常に安定していることが分かる。

ピーク間潜時(図6, 図7)について見ると、いずれも学習者の潜時が母語話者より遅れていることが確認できる。特に母語話者は、アクセント型に関わらず、長音が遅くなっている。一方、学習者においては、平板型で長音、頭高型で撥音が遅いという結果となった。

図8は母語話者別にN1からP3までのピーク潜時の相加平均値を示したものである。頭高型長音を除くほかでは、いずれも学習者が母語話者より潜時が遅いことが分かる。以下は、潜時の時間長について比較したものである。

	<u>平板型(早い⇔遅い)</u>	<u>頭高型(早い⇔遅い)</u>
母語話者(J)	促音>撥音>長音	撥音>促音>長音
学 習 者(K)	撥音>促音>長音	長音>促音>撥音

上記の順番をまとめると、平板型では、母語に関わらず、長音が促音と撥音より遅いことがわかる。また、母語話者は頭高型でも長音が遅くなっているが、学習者は早くなっている。このことから、母語話者にとって特殊拍のうち、長音が他に比べ、脳内での処理時間が遅れているのではないかと考えられる。ただし、刺激音の調音時間長（表2）をみると、長音の時間長が他に比べ短くなっているが、調音時間長との相関については今後に戻したい。

表5、表6はN2、P3の電圧情報をアクセント型別に分けて示したものである。平板型において、学習者は両被験者とも促音に対する電圧が高いことが確認できる。母語話者でもJMは促音に電圧が高い。しかし、JFにおいては促音の電圧が他に比べ低くなっている。一方、頭高型において、母語話者は、長音の電圧が他に比べ高いことがわかる。また、促音は平板型と同じく電圧が低い。学習者では男性被験者と女性被験者とで個人差が確認された。いずれにせよ、母語話者は促音に対する電圧が低く、長音に対する電圧が高いということは間違いない。これは図8の結果ともかなり一致している。

以上のことから、母語の違いにより、違う方略で認知していることが分かる⁽¹¹⁾。また、従来の知覚実験の報告からも分かるように、学習者における促音に対する認知の難しさが窺える。

おわりに

本研究では日本語母語話者と韓国人日本語学習者を対象に特殊拍の認知実験を行った。その結果、潜時と電圧に注目したところ、N1、P2よりも、N2、P3に顕著な動きが見られることが明らかになった。次に、N1、P2、N2において、撥音が他とは異なる動きをしていることも明らかになった。N2、P3の電圧情報からは、促音のアクセント型による異なる動きが見て取れた。また、母語の違いにより、違う方略で特殊拍を認知していることと、母語話者では長音、学習者では促音に高電圧が現れることがわかった。しかし、特殊拍に先行および後続する子音の種類によって異なる結果が出ることも考えられる。今後は、子音種との関係および今回言及していなかった調音時間長との関係について分析したいと思う。

付記

本稿は日本語教育学世界大会2008《第7回日本語教育国際研究大会》(2008年7月11日、釜山外国語大学校)で、口頭発表した内容に一部加筆・修正したものである。発表の場で貴重なコメントを下された関光準先生(建国大学校教授、韓国)に改めてお礼を申し上げます。

〈注〉

- (1) 事象関連電位(event related potential: ERP)は、光や音、あるいは自発的な運動といった特定の事象に関連して生じる一過性の電位変動であり、自発脳波に重畳して記録される。意識をもって活動する人間から安全に記録できるため、心理学におけるツールとして利用されることが近年増えてきた。従来の行動指標に加えてERPを測定することにより、外からは観察できない心理活動に関するさまざまな知見が得られている。ERPを使って人間の心の働きを調べようとする研究は、認知心理生理学(認

知精神生理学, cognitive psychophysiology) と呼ばれる (Donchin, Ritter & McCallum, 1978)。ERP は脳活動の指標ではあっても、脳で生じるすべての神経活動を反映するわけではない。ERP が記録できるのは、頭皮上で観察できる電場を形成するように配置された、ある程度大きな神経集団 (典型的には、頭皮に垂直な向きに平行して並んだ大脳皮質の錐体細胞の集まり) が一斉に活動するときだけである (宮内 1997)。

- (2) シールドルームとは電磁波を通さない壁・天井・床で囲まれた部屋のことである。部屋の中には、外部とは電磁的に隔絶された環境が作り出されており、電磁波の外部から部屋の中への侵入、また、内部から部屋の外部へ漏れることはない。
- (3) 国際 10/20 法: モントリオール大学のジャスパー (Jasper) により提唱された方法なので、モントリオール法あるいはジャスパー法といわれることもある。これは、頭部を計測することによって導出部分を割り出していく方法で、鼻根 (Nasion) と後頭結節 (Inion) 間、および左右両耳介前点 (または外耳孔) 間をそれぞれ計測し、それを 10% および 20% で均等間隔に分割していくものである。計測によって電極位置を定めるので、何度検査をしても、あるいは検者が代わっても、必ず同一部位に付けることができ、位置に関して再現性のある導出結果が得られる (末永・岡田 2004)。
- (4) 任 (2008a) を参照されたい。
- (5) デシベル表示には物理的に規定したレベルを基準とした SPL (sound pressure level) と、ヒトの感覚を基準とする SL (sensitive level) がある (城生 2005)。
- (6), (7) 任 (2008a) を参照されたい。
- (8) 脳波記録に混入する脳波以外の現象のことである (大熊 1999)。
- (9) 図表では「taRta」=長音, 「taNta」=撥音, 「taQta」=促音と表記する。
- (10) N2 と言語音との対応関係については城生 (1998) による。
- (11) このことはまた、城生 (2007) にも指摘されている。

参考文献

- 小熊利江 (2002) 「学習者の自然発話に見られる日本語リズムの特徴」『言語文化と日本語教育』24, お茶の水女子大学日本語文化学会, 1-12.
- 大熊輝雄 (1999) 『臨床脳波学』第 5 版, 医学書院
- 窪田三喜夫 (2005) 「脳と言語習得」『第二言語習得研究の現在 — これからの外国語教育への視点 —』, 大修館書店, 43-58.
- 城生 佰太郎 (1997) 『実験音声学研究』勉誠社, 277.
- (1998) 『日本音声学科学』サン・エデュケーショナル, 57.
- (2005) 『日本音声学研究』勉誠出版
- (2007) 「モーラの正体 — ERP を用いた実験音声学的研究 —」『文藝言語研究・言語編』52, 筑波大学大学院人文社会科学部研究科文芸・言語専攻紀要, 23-36.
- 末永和栄・岡田保紀 (2004) 『最新脳波基準テキスト』改定 2 版, メディカルシステム研修所
- 助川泰彦 (1993) 「母語別に見た発音の傾向 — アンケート調査の結果から —」, 水谷修・鮎澤孝子・前川喜久雄 (編) 『日本語音声と日本語教育』(1992 年度文部省科学研究費補助金重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」D1 班研究成果報告書), 187-222.
- 戸田貴子 (2003) 「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』7:2, 日本音声学, 70-83.
- 入野野宏・堀 忠雄 (2000) 「心理学研究における事象関連電位 (ERP) の利用」『広島大学総合科学部紀要Ⅳ・理系編』26, 15-32.
- 任 星 (2007) 「韓国人日本語学習者における日本語モーラの認知 — 脳波による検証 —」『第 5 回韓国日本学連合会国際学術大会 Proceedings』, 531-536.
- (2008a) 「脳波実験による日本語モーラ認知の実態 — 日本語母語話者の場合 —」『明海日本語』13, 明海大学日本語学会, 75-84.

- (2008b) 「脳波実験を用いた特殊拍認知に関する一考察 — 日本語母語話者と韓国語母語話者を対象に —」 『日本語教育学世界大会 2008 《第7回日本語教育国際研究大会》 予稿集』 2, 149-152.
- 林 実 (1990a) 「音節のスペクトル変化に対する聞性誘発磁界の検討」 『日本音響学会講演論文集』 3-1, 135-136.
- (1990b) 「単語音声に対する聞性誘発磁界の検討」 『日本音響学会講演論文集』 1-7-13, 343-344.
- 林 実・笈 一彦 (1989) 「音素・音節検出実験に基づく音声知覚の基本単位の検討」 『日本音響学会講演論文集』 3-2-1, 355-356.
- (1990) 「反応時間に基づく音声知覚の基本単位の検討」 『日本音響学会講演論文集』 2-5-4, 311-312.
- 藤崎博也・杉藤美代子 (1977) 「音声の物理的性質」 『岩波講座日本語』 5, 岩波書店, 63-106.
- 丸島 歩 (2006) 「モーラ課題に関する基礎実験」 『言語学論叢』 25, 筑波大学一般応用言語学研究室, 41-58.
- 宮内 哲 (1997) 「ヒトの脳機能の非侵襲的測定 — これからの生理心理学はどうあるべきか —」 『生理心理学と精神生理学』 15, 日本生理心理学会, 11-29.
- Donchin, E., Ritter, W., & McCallum, W. C. (1978). Cognitive psychophysiology: The endogenous components of the ERP. In: E. Callaway, P. Tueting & S. H. Koslow (Eds.), *Event-Related Brain Potentials in Man* (pp. 349-411). New York: Academic Press.

〈論 文〉

日本語母語話者と韓国人日本語学習者の感情表現

— プラス評価, マイナス評価に注目して —

堀 内 貴 子

キーワード：感情表現, プラス評価, マイナス評価, 中間

はじめに

言語学習時、母語では表現できるのに学習している言語ではどのように表現したらよいか分からない、という経験をもつことは誰にでもあるだろう。特に言語における感情表現というのは学習者が使えるようになるのは経験上、難しいようであり、母語話者の使用実態は非常に興味深い。

堀内(2007)では小学生の読書感想文を資料に感情表現の複雑化について調査を行った。その中で小学生・低学年(以下、「低学年」)、小学生・中学年(以下、「中学年」)、小学生・高学年(以下、「高学年」)、中学生、高校生と学年があがるごとに、表出する感情表現の持つ評価の割合が、「楽しい」「嬉しい」などのプラス評価より「悲しい」「辛い」などのマイナス評価をもつものが多くなるように感じた。また、日本語は否定的な表現が多い、ネガティブな表現が多いなどと聞くことがあるが、それは事実であるのか。感情表現の場合はどうなのか。また同じ日本語でも学習者の場合はどうなのかについて疑問を持った。本稿はその疑問を解決するためにプラス評価、マイナス評価という観点に着目し、日本語母語話者(以下、「母語話者」)と韓国人日本語学習者(以下、「韓国人学習者」)の作文を資料に調査を行った報告である。

1. 感情表現

前田(1993:4)は言語での感情表現について「感情語を考える場合の基本としては、感情語彙から出発すべきであろう」また、「慣用的な表現も問題となってくる。更に心というものは明確にしがたいものであるから、それを表すための比喩表現も多彩である」と述べている。言語における感情表現と聞いて、思い浮かぶのは感情形容詞や感情動詞と呼ばれるものであるが、それ以外を使用したものも多い。前田が述べるように比喩表現も多彩であり、すべてを明確に規定するのは難しい。本稿では先行研究の中から中村(1993)の『感情表現辞典』を参考に感情表現を選択する。し

かし、この辞典は文学作品で表出されたものを中心に扱っており、感情表現全てを網羅しているとは言いがたいようである。そこで筆者の判断から『感情表現辞典』に掲載されている言葉以外にも次の条件にあうものを感情表現とする。

(1) 感情形容詞 感情動詞

一般的に形容詞、動詞の中でも感情形容詞、感情動詞は人の感情を表現するものと定義されており、本研究の対象とする。

(2) 感情を表現するオノマトペ

オノマトペとは擬音語、擬声語、擬態語と呼ばれる語句のことである。これらについては多くの研究があるが、ここでは特に言及しない。『感情表現辞典』にもいくつか掲載されているが、実際の表出例には促音が入ったものなど多少表記に差があるものが見られる。例えば、「いらいらする」「いらだたい」などはあるが「いらっとする」は掲載されていない。「いらっ」の意味を考えると「いらいら」などと同じで腹立たしいさまを表していると感じられる。また、本研究では『感情表現辞典』に準じて、「いらっ」のように考えられるものについてもなるべく広く扱い感情表現として捉えることにする。

(3) 「気持ち」「気分」「心」「気」について表現

『日本国語大辞典 第二版』(2001)では感情について「物事に感じて起こる心持。気分。喜怒哀楽などの気持ち。」と定義する。「心持」というのは心の状態、気持ち、気分を指す言葉であるので、「気持ち」「気分」「心」「気」について表現しているものについても感情表現とする。

(4) その他

(1)～(3)でほぼ感情表現について網羅できるが、比喩的な表現などについては適宜確認をする。

2. 研究方法

2.1 資料

2.1.1 母語話者

全国規模で行われる読書感想文コンクールの入選作品を集めた本が出版されている。その中で2004年度のコンクールの入選作品を集めた本を使用し、低学年・中学年・高学年・中学生・高校生の読書感想文からそれぞれ30人分を資料とする。この本には「自由読書」と「課題読書」の項目があり、今回使用した資料はほとんどが自由読書である。自由読書というのは「自由に選んだ図書。フィクション、ノンフィクションを問わない。」であり、感想文の対象となる本は自由に投稿者である児童、生徒がそれぞれ選んだものであると考えられる。

- 全国学校図書館協議会編 (2005) 『考える読書 第50回青少年読書感想文
全国コンクール入選作品 小学校低学年の部』(毎日新聞社)
- 全国学校図書館協議会編 (2005) 『考える読書 第50回青少年読書感想文
全国コンクール入選作品 小学校中学年の部』(毎日新聞社)
- 全国学校図書館協議会編 (2005) 『考える読書 第50回青少年読書感想文
全国コンクール入選作品 小学校高学年の部』(毎日新聞社)
- 全国学校図書館協議会編 (2005) 『考える読書 第50回青少年読書感想文
全国コンクール入選作品 中学・高校・勤労青少年の部』(毎日新聞社)

2.1.2 韓国人学習者

韓国にある大学の授業(2004年度)で書かれた作文を使用する。全部で6名で、そのうち、2名は12タイトル分、4名は6タイトル分の作文を使用する。それぞれの作文のタイトルは抽象的なものではなく、自分に関係のあるものを選択した。また、「私の好きな映画」というようなすでにその作文のプラス、マイナスといった傾向がわかるようなものは避けた。

この学習者の日本語能力は3名(16編)が日本語能力試験1級、3名が2級である。

2.2 方法

資料から1で述べた定義に従い、感情表現を取り出し、集計する。さらにその感情表現についてプラス評価をもつもの、マイナス評価をもつもの、どちらともいえない中間のものに分け、学年によってどのような特徴があるのか、差はどうかについて考察する。

2.2.1 分類方法

『感情表現辞典』では感情表現を「喜・怒・哀・怖・恥・好・厭・昂・安・驚」の10種類の見出しに分類している。本稿ではこれをもとに「喜・好・安」をプラス評価、「昂・驚」を中間、「怒・哀・怖・恥・厭」をマイナス評価とした。しかし、文脈上全てがこれにあてはまらないので、飛田・浅田(1991)を参考に筆者の判断で、よい評価をもつ感情をプラス評価、悪い評価を持つ感情をマイナス評価とし、どちらでもないものを中間とした。また、プラス評価、マイナス評価の否定形の場合は中間とした。例えば、プラス評価である「楽しい」が否定されて、「楽しくない」になった場合は中間とした。

以上をまとめると次のようになる。

分類例

プラス評価(喜・好・安)

例：うれしい たのしい なんとなくほっとする 心にじーんとあたたかい

中間（昂・驚）

例：おどろいた はっとした おそれず たのしくない

マイナス評価（怒 哀 怖 恥 厭）

例：悲しい もやもやした気持ち なんだか不安になっていた いらいらさせられ

2.2.2 表出例

実際に表出された感情表現を以下に記す^①。

① 低学年

- ・とてもきもちがよくなりました
- ・心がうきうきするような
- ・たのしいです
- ・すごくびっくりした
- ・こわかった
- ・かなしくなりました
- ・すごくつらくてなみだがでそうだったよ

② 中学年

- ・一番心がうれしくなる
- ・とっても大好きです
- ・ほっとして心があたかかくなりました
- ・びっくりした
- ・とても悲しい気持ちになりました
- ・大声でさげびたい気持ちです
- ・涙が止まらなくて胸のおくがキュンとしました

③ 高学年

- ・心の中が軽くなった気がした
- ・少しだけうれしくなった
- ・とても晴れ晴れとした気持ちだった
- ・おどろいた
- ・びっくりした
- ・とても怖くなり
- ・後悔する気持ち

④ 中学生

- ・深い感動
- ・喜びをかみしめる
- ・安堵感に包まれた
- ・驚きました
- ・はっとさせられた
- ・後ろめたい気持ち
- ・眠れないくらい腹を立てる

⑤ 高校生

- ・感情が嬉しさに染められました
- ・懐しく感じられる
- ・心の中が不思議とあたたかくなっていた
- ・愛する
- ・ハッとした
- ・怖くなくなった
- ・後悔した
- ・死ぬより苦しい心の痛みを感じた

3. 結果・考察

3.1 感情表現のもつ評価の割合

資料から感情表現を取り出し、プラス評価、中間、マイナス評価に分類し、割合を出し、母語話者と韓国人学習者、それぞれを図にした。

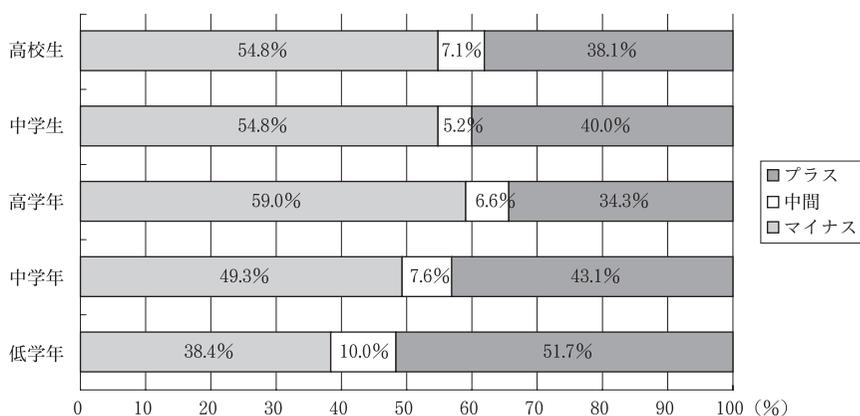


図1 母語話者の感情表現の学年ごとの変化

図1は母語話者の感情表現をプラス評価、中間、マイナス評価に分類し、割合を出したものである。低学年は唯一プラス評価が50%を超え、マイナス評価の割合のほうが少ない。中学年ではマイナス評価が約50%を占め、プラス評価よりも多い。高学年、中学生、高校生でもマイナス評価の方が多い。また、中間に位置するものは10%またはそれ以下であり、共通して少ない。

それぞれを比較すると、低学年から中学年、高学年となるにつれ、約10%ずつの割合でプラス評価が減り、マイナス評価が増えている。しかし、中学生になるとわずかだが高学年よりもプラス評価が増え、マイナス評価が減っている。また中学生と高校生はほとんど差がない。

これらのことから小学生は学年があがるごとに表出される感情表現が、プラス評価のものからマイナス評価のものへ移り変わっていくといえる。また、中学生、高校生とほとんど変化がないことから、プラス評価、マイナス評価という観点からみた感情表現は高学年から中学生あたりで安定するものと考えられる。

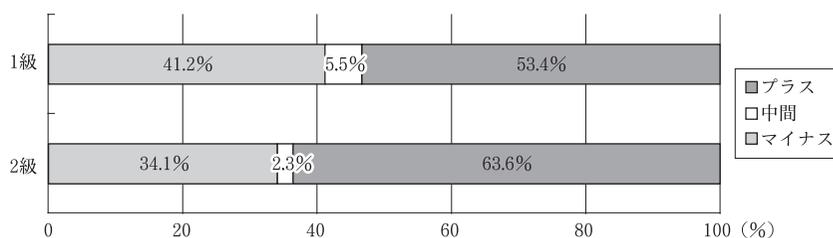


図2 韓国入学者の感情表現のレベル別の変化

図2は韓国入学者の感情表現をプラス評価、中間、マイナス評価に分類し、割合を出したものをレベルごとにわけたものである。1級の学習者と2級の学習者では1級の学習者のほうがマイナス評価の割合が多い。資料数が少ないので、一般化はできないが、日本語の感情表現は日本語のレベルがあがるにつれプラス評価よりもマイナス評価の割合が多くなるといえる。

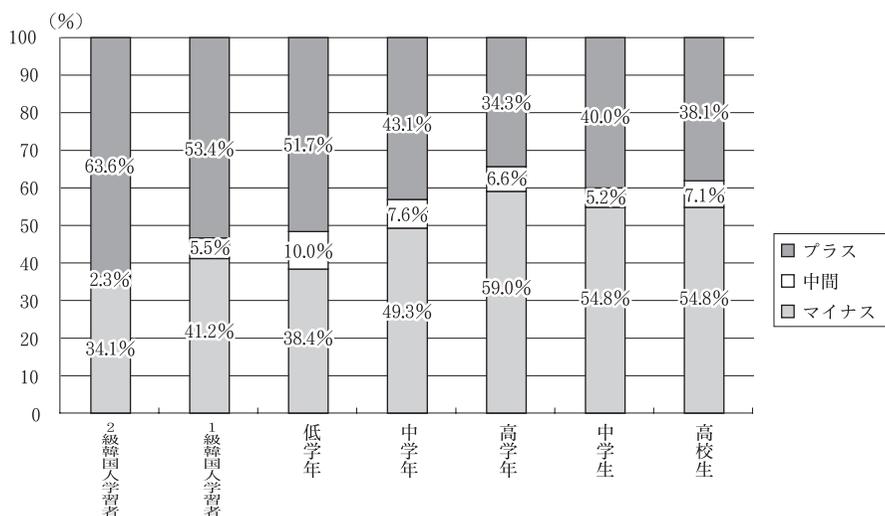


図3 母語話者と韓国入学者の感情表現のレベル別の変化

図3は母語話者と韓国人学習者をまとめたものである。比較すると、韓国人学習者は低学年よりむしろかではあるが、プラスの割合が多いことが分かる。全体を見ると、図の左側から2級韓国人学習者→1級韓国人学習者→低学年→中学年→高学年となだらかにプラスの割合が減り、マイナスの割合が増えている。学習者の資料が少ないのでこちらも一般化することは難しいが、日本語のレベルが1級、2級であっても、プラス評価、マイナス評価という視点から考えると母語話者には届いていないといえるのではないだろうか。

おわりに

以上の調査から、次のことが分かった。

- ① プラス評価の感情表現がマイナス評価の感情表現より多く使われるのは、小学低学年のみである。
- ② 小学生では学年があがるごとに、プラス評価の感情表現が減少し、マイナス評価のものが増加する傾向があるが、中学生、高校生ではほとんど変化がない。
- ③ 韓国人学習者は母語話者と違い、プラス評価の感情表現が多い。
- ④ 韓国人学習者は日本語のレベルがあがるとプラス評価の感情表現が減り、マイナス評価の感情表現が増える。これは母語話者の学年による変化と同じ傾向である。

今回は韓国人学習者のみの調査であったが、今後は他の言語を母語とする学習者についても調査を行い、母語ごとの特徴などについて明らかにしたい。

また母語話者の表出に影響を与える可能性のある国語の教科書、学習者の表出に影響を与える可能性のある日本語のテキストについても調査を行い、日本語の感情表現の実態を明らかにしたい。

謝辞

本稿は日本語教育学会世界大会2008「第7回日本語教育国際研究大会」(2008年7月11日、釜山外国語大学校)で、口頭発表した内容に加筆・修正したものである。

口頭発表の場で、貴重なお意見を下さった方々、口頭発表、本稿執筆の際にご指導いただいた水谷信子教授に心よりお礼申し上げます。

〈注〉

- (1) 表出例はそれぞれ100例以上あり、全てを掲載することはできないので、ここでは任意の数例のみを挙げる。

参考文献

- 加藤安彦(1993)「国定読本の喜怒哀楽を表すことば——学年経過に伴う語の多様化——」『日本語学』12巻1号、明治書院、pp.71-84
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 第I巻』くろしお出版

- 中村明（1993）『感情表現辞典』（榊東京堂出版）
- 飛田良文・浅田秀子（1991）『現代形容詞辞典』東京堂出版
- 堀内貴子（2007a）「日本語におけるオノマトペを含む感情表現の語句 — 若年層の読書感想文から —」
『明海対照言語学論集』No. 8, pp. 65-71
- （2007b）「若年層の読書感想文における感情表現の語句について — 複雑さの一考察 —」『韓国
日本学連合会第 5 回国際学術大会予稿集』pp. 428-432
- （2008）「日本語の感情表現の実態 — プラス評価, マイナス評価に注目して —」『日本語教育学
世界大会 2008 第 7 回日本語教育国際研究大会予稿集』2, pp. 114-117
- 前田富祺（1993）「日本語の感情を表すことば」『日本語学』12 卷 1 号, 明治書院, pp. 4-13

〈論文〉

言語景観研究の現状について

江 源

キーワード：言語景観，共時的研究，通時的研究，総合的研究

はじめに

本稿は、言語景観研究が言語学的研究にもたらす新たな可能性を、関連分野の研究動向を踏まえながら展望するものである。言語景観は、地理学、社会言語学を始めとする諸分野において、さまざまな視点や方法による調査研究が世界中でなされてきた。ここでは、言語景観研究の状況をより包括的に捉えるために、(1)言語景観の定義について、(2)日本国内における研究、(3)海外における研究、(4)筆者による総合的研究 という4つの枠組みを設けた。

以下では、まず言語景観の定義を再考する。それを踏まえ、日本国内と海外に分けて、言語景観研究の動向を概観する。最後に筆者による研究のまとめと今後の課題を述べる。

1. 「言語景観」の定義について

『日本国語大辞典』(1998)では、景観を①「(ドイツ Landshaft, 英 Landscape の訳語) 植物学、地理学用語で風景を主として植物相、地形の観点から眺めた場合の認識像をいう」、②「観賞する価値のある眺め。また、比喩的に、社会のある部分を眺め渡したとき見て取れる状況をいう」と定義している。

言語景観研究で扱う言語景観は、景観の下位概念に属する都市景観に見られる書き言葉を指すものが多く、景観工学の観点から見ると、都市景観とは、都市における人造物の造形をいい、都市を構成する自然や人工的建築物や工作物などの物理環境の眺めについての主として視覚的イメージをいう。広義に解釈するときには、都市における諸活動や、市民生活を反映した雰囲気など含まれているイメージをもいう(石井・元田, 1993)。

日本では、言語景観という用語を使い始めたのは地理学者の正井泰夫である(正井, 1972: 153-158)。正井(1972)は「言語およびその視覚表現である文字からみた都市景観のことである」と定義している。このような定義ができる理由について後に正井(1983)の論文では、都市景観は、建

築物（高さ、色彩、材料、様式など）、道路網、緑、土地利用、住民など、さまざまな構成要素をもつ、「言語は文字という媒体を通して視覚に訴えることができる。その結果、景観要素となりうるのである。日本の都市のように、きわめて多くの看板が用いられているところでは、この言語景観が主要な景観要素の1つとなっている」、「言語景観はまた、異なる文化（圏）の認知にも役立つ」と説明した。

言語景観に相当する英語の「linguistic landscape」に関する社会言語学者 R. Landry と R. Y. Bourhis (1997) の記述を参考にして、バックハウス (2005) は言語景観を「道路標識、広告看板、地名表示、店名表示、官庁の標識などに含まれる可視的な言語の総体」と定義している。バックハウス (2005) は、また、言語景観を「日本語しか含まない単一言語表示」と「日本語以外、あるいは日本語の代わりに、ほかの言語を含む多言語表示」、また公的表示（道路標識、地名表示、官庁の標識など）と私的表示（店名表示、広告看板など）とそれぞれ二分している。

以上のように、言語景観研究には少なくとも、言語と景観との2つの側面に焦点を当て、考察する視点が必要となる。さらに、言語景観の定義もそれに応じて、新たに定める必要があろう。

2. 日本国内における研究

理論的出発点によって、先行研究を地理学的研究、社会言語学的研究、経済言語学的研究、言語サービスの研究というように4種類に分けてみた。これらの先行研究は、研究目的によって、データの採集方法がそれぞれ異なる点が多いため、直接に比較するのを控えたほうがよいと思うが、1つの地域あるいは複数の地域を1つの全体としてとらえる研究がほとんどであり、複数の地域を比較する研究はまだ十分でないようである。

2.1 地理学的研究

先駆的な調査として、地理学者の正井 (1969/1972) が1962年に新宿で実施したものがある。調査の対象は店名看板で、それを言語別、文字別、そして業種を踏まえて分析した。その研究の目的は「あまりにも地理学的研究ということにこだわるつもりはない。むしろ単にさまざまな言語、さまざまな文字が新宿という盛場において、いかなる状態で実在しているかを考察したい」としている。新宿では当時未だ漢字が圧倒的に多く使用されていたという分析の結果があるが、一時代前には、より漢字的な文化景観が見られたという点を考慮すると、1962年の新宿はローマ字によって代表されるような国際性・異国情緒がかなり見られるというべきだろうと述べている (正井1969)。

2.2 社会言語学的研究

1990年代後半よりほぼ10年の間に、言語景観は社会言語学において世界的に注目され始めた分野であると言われている。さまざまな研究が世界中で行われてきた。日本においても、染谷 (2002)、

金 (2005/2007), オバタ・ライマン (2005), ダニエル・ロング (2006), バックハウス (2006/2007) などをあげることができる。

染谷 (2002) は「看板の文字表記」というテーマで、小田急線沿線を中心に行った。染谷はターミナル駅をなるべく避け、日常生活の匂いがする商店街から駅周辺の看板をデジタルカメラで撮影し、採集した。その結果、看板の文字体系の使用傾向と、表記法の実態について考察した結果は日常生活において漢字の勢力が大きいことと、日本語のローマ字表記というより、外国語のローマ字表記が押し寄せていることが判明した。

金 (2005/2007) の一連の研究では、東京や大阪などの大都会で日本に在住する外国人が主にコミュニティ内の情報交換のために掲げる表示というところに注目して、これを中心に考察した。

オバタ・ライマン (2005) は「表参道店名の表記」を時間と空間とテーマ (企業名) の3観点から観察し、ここに現れる日本語の共時的・通時的変化と来たるべき時代の流れを比較考察した。特に、「街や通りのイメージ作りに表現としての店名表記は重要な要素である」という指摘に注目したい。

ダニエル・ロング (2006) は、奄美の言語景観の目を地域言語に向けて、「目に付く方言」の実態を探った。具体的には奄美でどのような言語景観が形成されているかを、それと関わっているいくつかの言語学的や社会言語学的要因から考察した。

バックハウス (2006/2007) は外国語表示が特に多い場所の一つの東京都内に焦点をあて、山手線の日暮里駅以外の28駅の周辺で、調査を行った。バックハウスは一定地域にあるすべての表示が使われている言語ごとに分類して、①「だれによつての多言語景観」、②「だれのための多言語景観」という2つの疑問から検証した。

2.3 経済言語学的研究

言語が商品、値段が付くものだという経済言語学の観点から日本の言語景観を経済原理とのかかわり、すなわち言語景観を支配する背後の原理を探るものとして井上 (2000/2001/2005/2007) の研究がある。近代の表記を

- ① 漢字優勢タイプ
- ② カタカナ優勢タイプ
- ③ アルファベット優勢タイプ
- ④ アルファベットプラス優勢タイプ

の4段階に分けている。一連の研究の結果をふまえた上で、戦後のカタカナへの傾斜、さらに現代のアルファベットへの傾斜があると述べている。また、「地域差は、日本全体の周圏論でなく、むしろ都市空間構成内部の地域差」(井上 2007) という指摘にも注目したい。

2.4 言語サービスの研究

来日した外国人たちは、さまざまな問題に直面している。そのうちの1つとして言葉の問題があ

げられる。言語政策の一環として、外国人が日本社会で順調に生活していけるように、日本人側から言語サービスを提供する必要がある。外国人に対する情報伝達という言語サービスの1つとしては、道路標識、街区表示板、地下鉄案内板、避難標識等のような外国人のための多言語表示である(河原 2004)。これらの問題を扱った研究としては、平野 (1996)、バックハウス (2004)、庄司博史・金美善 (2007)、田中 (2007)、田中・上倉・秋山・須藤 (2007)、田中・上倉・新坂 (2007)、小野原信善 (2007) らの研究が挙げられる。

3. 海外における研究

2 節では、日本における言語景観研究を分類して紹介した。実際に海外でもさまざまな視点や方法による調査研究がなされてきた。本稿では、紙数制限のため、その中の2つだけを紹介することにする。

3.1 バンコクに関する調査

バンコクはタイ王国の首都であり、政治的、経済的、文化的中心地でもある。その人口構成は主体であるタイ人のほか、華人、アジアと欧米から来た各種言語を母語とした人も数多くいる。

バンコクの言語景観に関する研究はまず Smalley (1994) によるものが挙げられる。調査対象はバンコク市内3つの地区における店名看板である。店名看板に見られる①文字使用、②言語使用、③ビジネス対象の言語使用、を分析した。その結果、住民構成の違いによって文字使用と言語使用の地理的傾向があることが観察された。

また、Huebner (2006) は都市における言語の多様性に焦点を当て、バンコク郊外15ヶ所を調査し、言語景観を公的表示と私的表示に分けて分析した。公的表示にはタイ文字の使用率が高く、私的表示にはローマ字の使用率が高いことが分かった。

3.2 国際比較研究

Scollon & Scollon (2003) は都市景観をディスコースの多様性による「記号論的結合体」(semiotic aggregate) と見なし、世界的範囲で調査を行った。「記号論的結合体」の概念を例証するために、彼らはアジアに位置する香港、北京、ヨーロッパに位置するウィーン、パリ、アメリカのワシントン D.C. を調査し、比較した。

Scollon & Scollon (2003) は都市空間におけるディスコースを①地方自治体主導ディスコース、②地方自治体公共事業ディスコース、③広告的ディスコース、④反社会的 (transgressive) ディスカースの4種に分類した。さらに、記号論的機能を①コード優先 (code preference)、②言語内容 (inscription)、③物理的位置 (emplacement) の3つの視点から各地言語景観の異同を考察した。

4. 筆者による総合的研究

前述のような共時態の現状記述は必要不可欠なものであり、これまでの言語景観研究が果たした意義が大きい。その一方で、言語景観における通時の研究という視点を導入する必要性が生じていることも事実である。つまり、言語景観における言語使用の変化を進行中の言語変化現象と捉えるべく、将来的変化予測も含めた使用傾向変化を捉える視点として導入すべきである。

それから、言語景観における言語あるいは言語使用だけに焦点を当てたものが多いが、景観に含まれる言語外的側面にも関心を払うべきである。

以上のことから、江（2008）による具体的研究事例を示し、検討する。

4.1 研究概要

2007年6月から12月にかけて、銀座、表参道、新宿、秋葉原、門前仲町という5地域における言語景観について調査を行った。この5地域は質量ともに多言語化の著しい東京都内の代表的な商業集積地域である。公的表示は行政側や公的企業から計画的に提供されるものであるのに対して、私的表示においては規則がなく、その表示の作成者の意志次第で自発的に考案されるものである。商業施設の言語景観には経済原理が反映されやすいため、言語的多様性は公的表示よりバラエティーに富んでいるという（井上、2007）。

この観点から、江（2008）では、上記5地域のメインストリートの両側に掲げられているすべての店名表示、広告看板などいわゆる私的表示を調査対象にした。

採集した写真データを2つの非言語的要素（地域、業種）、3つの言語的要素（言語種、文字種、表記法）という5つのカテゴリーに分けた。

4.2 先行研究との比較による通時的考察

通時の変化を見るために、本研究と同質の先行研究を比較することを試みた。正井（1969/1972）と染谷（2002）のものは、調査目的、調査地域あるいは調査範囲が本研究と異なるが、いわゆる私的看板を扱ったという点で、本研究と同質なものと見なされる。ここでは、文字種の組み合わせ方という項で正井（1969/1972）や染谷（2002）の研究によるデータと比較してみる。文字種の各種組み合わせの件数はそれぞれの調査で得られたサンプルの総件数の占める割合を算出し、視覚化すると、図1となる。図1では、以下のようなことが考えられる。

- ① 漢字のみでの表記は年代順で顕著に減少していることが観察される。言語景観における日本語使用は減少傾向にある。
- ② ローマ字のみでの表記は急速に増加していることが観察される。西洋諸言語使用は増加傾向にある。
- ③ 門前仲町で得られた文字種の組み合わせ方状況は、染谷（2002）による文字種の組み合わせ

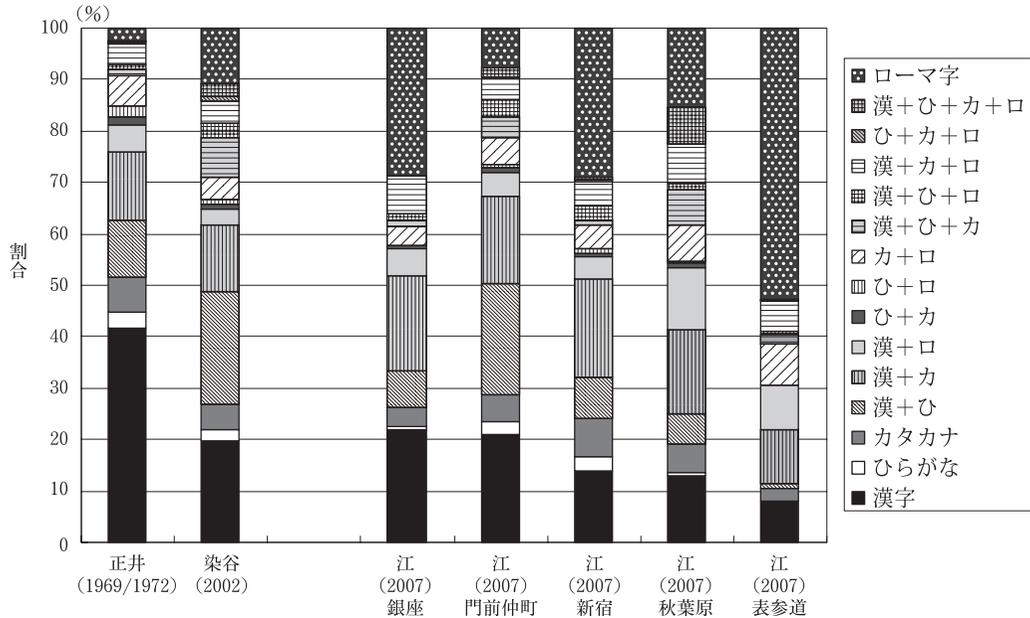


図1 文字種使用の通時的変化

方の集計結果と比べると、似たようなパターンであることが観察される。

- ④ 調査した5つの地域における漢字のみの表示の使用率を比較することによって、各地域の漢字のみの表示の使用率はそれぞれの地域の歴史の長さとは正比例をなすのではないかと考えられる。このことから、同時点での地域別調査を中心とした本研究でも、ある程度通時的変化が推察されたとと言えるだろう。

つまり、本研究と正井（1969/1972）や染谷（2002）の研究との比較によって得られた漢字（日本語）使用の減少傾向とローマ字（西洋諸言語）使用の増加傾向が見られた。ここから、多言語化は通時的に進んでいることが証明できるだろう。

4.3 Correspondence Analysis による総合的考察

4.2では、言語景観における言語使用を通時的に考察したが、言語景観における景観という側面も研究視野に入れるべきである。景観的観点から都市環境とその街路を利用する人々の性格などを把握して、例えば「近代的センスの道」、「コミュニティの道」とか「歴史文化ふれあいの道」とか「若者の街」とか、都市のもつそれぞれの個性を尊重して、その個性を表現することが大切である。そして逆にいえば、街路を構成する要素の素材や意味を周辺と調和させる。したがって、言語景観に見られる言語使用状況もどの程度各地域のイメージを反映しているのかにも注目したい。

2つの非言語的要素（地域、業種）、3つの言語的要素（言語種、文字種^①、表記法）という5つの要素の相互関連関係を同時に見るために、Correspondence Analysis という多変量解析法の適

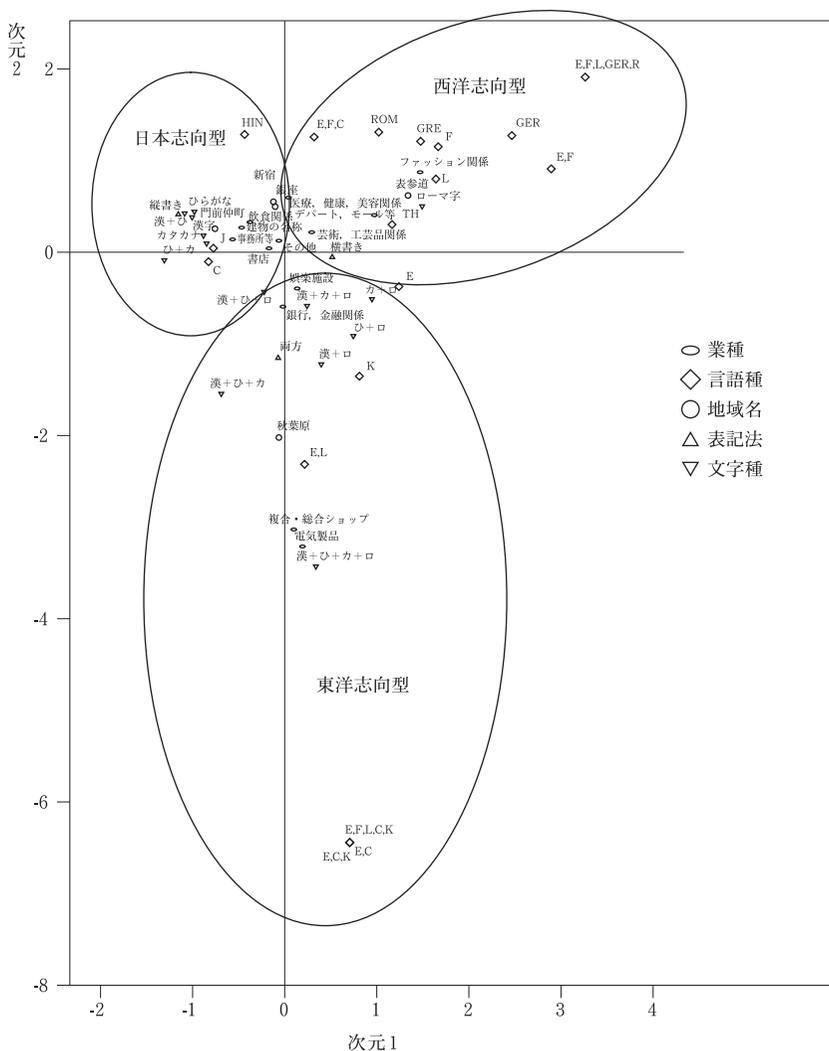


図2 Correspondence Analysis による総合的考察

用を試み、グラフを出した。図2から、調査した5つの地域における言語景観の多言語使用パターンを日本志向型、西洋志向型、東洋志向型の3つに分類できた。以下にその説明をする。

- ① 日本志向型：銀座、新宿、門前仲町では、縦書きで、しかも日本語の使用が主であることによって、いずれも日本志向が強いことが理解できた。業種分布を見ても、建物の名称、各種の事務所、飲食関係が多い。これらの業種の利用者は日本人が主であると考えられる。
- ② 西洋志向型：表参道では、横書きで、西洋言語の使用が7割も占めることによって、西洋志向が確認できた。医療・健康・美容関係、芸術・工芸品関係との2つの業種は西洋から多くのものを摂取しているため、西洋言語の使用の多いことがこの結果に表れている。
- ③ 東洋志向型：秋葉原には、電気製品売り場、世界的ブームを引き起こした漫画および関連グッ

ズを扱う総合・複合ショップ、娯楽施設としてのゲームセンターが多い。秋葉原では、日本語の使用率が銀座や新宿と変わらないが、日本語+英語+隣接国家言語（中国語、韓国語）との4ヶ国語によるものが多く、縦書きと横書きを併用する傾向が強い。これは秋葉原に通ってくる顧客が日本人の他に、近隣国家と地区（中国、韓国、台湾）の人が主体であり、この客層の消費活動を促す効果を狙うために町の表示が工夫されている結果だと推察される。

おわりに

本稿では、これまでの「言語景観」研究を概観し、また江（2008）による研究を通して、どのような展望が開けるのかを考察してきた。そもそも「言語景観」研究は言語学、地理学、歴史学、社会学、経済学等々といった多分野からの解明が統合されて初めてその全体像が見えてくるという、学際的分野なのである。本稿は、通時的、総合的考察という視点が加わることで、「言語景観」研究を考えた上で新たなスタートとなるだろう。

〈注〉

- (1) この分析では、朝鮮語やヒンデディー語などの言語の文字も、外国語表音文字の一種であるという観点から、便宜上ローマ字の項に分類することにした。

参考文献

- Backhaus, Peter (2006) Multilingualism in Tokyo: A Look into the Linguistic Landscape. *International Journal of Multilingualism*. pp. 52-66
- (2007) *Linguistic Landscapes: A Comparative Study of Urban Multilingualism in Tokyo*. Clevedon・Buffalo・Toronto: Multilingual Matters
- バックハウス、ペーター (2004) 「内なる国際化」— 東京都の言語サービス」河原俊昭(編)『地方自治体の言語サービス：多言語社会への扉をひらく』春風社 pp. 37-53
- (2005) 「日本の多言語景観」真田信治・庄司博史(編)『辞典 日本の多言語社会』岩波書店 pp. 53-56
- (2007) 「公共文字と日本の多言語化 — 東京の言語景観を事例に」国立国語研究所(編)『文字と社会』（新「ことば」シリーズ20）きょうせい pp. 92-97
- ダニエル・ロング (2006) 「『わんきゃがやらんば!』観光客の目に付く奄美ことばの言語景観論的試み」『日本方言研究会 第83回研究発表会 発表原稿集』日本方言研究会 pp. 27-34
- Gorter, Durk (2006) Introduction: The study of the linguistic landscape as a new approach to multilingualism. In D. Gorter, (ed). *Linguistic Landscape, A New Approach to Multilingualism*, (pp. 1-6). Clevedon・Buffalo・Toronto: Multilingual Matters
- 平野桂介 (1996) 「言語政策としての多言語サービス」『日本語学』15(13) pp. 65-72
- INOUE, Fumio (2005) Econolinguistic Aspects of Multilingual Sign in Japan. *IJSL*
- 井上史雄 (2000) 『日本語の値段』大修館
- (2001) 『日本語は生き残れるか — 経済言語学の視点から』PHP 新書
- (2007) 「多言語表示の経済原理」『社会言語科学会 第20回大会発表論文集』社会言語科学会 pp. 255-256
- 石井一郎・元田良孝 (1993) 『景観工学』鹿島出版会

- 河原俊昭(編) (2004) 『地方自治体の言語サービス：多言語社会への扉をひらく』 春風社
- 金美善 (2005) 「言語景観にみえる在日コリアンの言語使用 — 新来者の登場がもたらしたもの —」 真田信治他編『在日コリアンの言語相』 和泉書院 pp. 195-224
- (2007) 「新宿の多言語景観 コリアンニューカマーの経済活動を中心に」 『社会言語科学会 第19回大会発表論文集』 社会言語科学会 pp. 272-275
- 江源 (2008) 『言語景観から見る日本の多言語化状況』 明海大学大学院 応用言語研究科修士学位論文
- (2008) 「言語景観に見られる東京多言語化の実態 — 商業集積地域を調査対象に —」 『社会言語科学会 第22回大会発表論文集』 社会言語科学会 pp. 86-89
- (2008) 「日本の多言語化状況に関する一考察 — 言語景観を調査対象に —」 第8回国際日本語教育・日本研究シンポジウム ポスター発表
- オバタ・ライマン, エツコ (2005) 「表記法から観察するビジネス・アイデンティティ：表参道商店街の店名(1)」 『麗澤学際ジャーナル』 13(1) pp. 39-67
- 小野原信善 (2007) 「香川県の言語景観 — 国際化と言語サービス」 河原俊昭・野山広(編) 『外国人住民への言語サービス：地域社会・自治体は多言語社会をどう迎えるか』 明石書店 pp. 206-229
- Scollon, R. & Scollon, S. W. (2003) *Discourses in place: Language in the Material World*. London and New York: Routledge
- Smalley, W. A. (1994) *Linguistic Diversity and National Unity: Language Ecology in Thailand*. Chicago, IL: University Press
- 染谷裕子 (2002) 「看板の文字表記」 飛田良文・佐藤武義(編) 『現代日本語講座 第6巻 文字・表記』 明治書院 pp. 221-243
- 庄司博史(編) (2007) 『まちかど多言語表示調査報告書』 多言語化現象研究会
- 庄司博史 (2005) 「日本の多言語化」 真田信治・庄司博史(編) 『辞典 日本の多言語社会』 岩波書店 pp. 48-53
- 庄司博史・金美善 (2007) 「京阪神の多言語表示にみえる多言語化現象 — 2005年まちかど多言語表示調査から —」 『社会言語科学会 第19回大会発表論文集』 社会言語科学会 pp. 324-327
- 田中ゆかり(編) (2007) 『山手線の多言語状況』 日本大学文理学部国文学科
- 田中ゆかり・上倉牧子・秋山智美・須藤央 (2007) 「東京圏の言語的多様性 — 東京圏デパート言語景観調査から —」 『社会言語学 第10巻第1号』 社会言語科学会 pp. 5-17
- 田中ゆかり・上倉牧子・新坂望 (2007) 「東京圏の言語景観 — 山手線各駅調査と鉄道会社アンケートから」 『日本語学会 2007年度秋季大会予稿集』 日本語学会 pp. 207-214
- Landry, Rodrigue & Bourhis, Richard Y. (1997) Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology* 16, pp. 23-49
- 正井泰夫 (1969) 「言語別・文字別にみた新宿における諸設営物の名称と看板広告」 『史苑』 29巻2号 立教大学史学会 pp. 44-55
- (1972) 『東京の生活地図』 時事通信社
- (1983) 「新宿の喫茶店名 — 言語景観の文化地理」 『筑波大学地域研究』 1

〈論文〉

「キリスト・クリシタン」の意味と表記の変遷

— 国語辞書と青空文庫を中心に —

李 明 心

キーワード：キリスト，クリシタン，基督，国語辞書，青空文庫

1. はじめに

現在日本語で使われている「キリスト」、「クリシタン」の語は何回かにわたる表記の変化を経て現代に到っている。日本に初めてキリスト教が入ったのは1549年宣教師のザビエルによる。つまり、1549年から「キリスト」、「クリシタン」の語は日本で使われたと考えられる。しかし、日本の歴史においてキリスト教は禁教の時代もあるのでこれらの語が封印されたこともあった。禁教は開国により解け、1889年大日本帝国憲法によって信教の自由が認められた。禁教の時代を除くと約400年間この二つの語が使われていたといえよう。

「キリスト」の語は「きりしと」の表記を始め「基督」、「きりすと」、「キリスト」などいくつかの表記が使われ現在はおもに「基督」、「キリスト」のように表記する。

「クリシタン」は「きりしたん」という表記を始め、「貴理志端」、「貴理死丹」、「鬼利支端」、「吉利支丹」、「クリシタン」、「切支丹」などが使われて、現在は主に「クリシタン」、「切支丹」の表記が使われる。

本稿では「キリスト」・「クリシタン」の語が外来語として日本に入り、どのような表記の変化を経て現代に至っているかを明らかにすることを目的としている。

2. 「キリスト」、「クリシタン」の語の意味

「キリスト」とは救世主を意味する。元来ギリシャ語の「*khristos*」は油を注いで清められた者を意味する。キリスト教ではイエスを救世主として「キリスト」と呼ぶ。

「クリシタン」とは室町時代の末期、日本に伝来したキリスト教（カトリック教）、またその信者を指す語である。しかし、今は「隠れクリシタン」、「クリシタン大名」、「クリシタン版」、「クリシタン奉行」、「クリシタン文学」、「クリシタン屋敷」などを表す時に用い、キリスト教の信者をいう

時は主に「クリスチャン」、「キリスト教信者」などで表す。

3. 表記の変遷

上述のように「キリスト」、「キリシタン」の表記の変遷は幾度もあるが、どのような変化があったのか、変化の流れを探ることにする。

3.1 調査方法と資料

国語辞書を調べ、二つの言葉の表記の変遷、また、使われた書籍を調べ整理して比較する。『日本国語大辞典第二版』(2001)によると大正時代以降は表記の変化が見られないので国語辞書はその以前の辞書までとする。

さらに、辞書から得られた表記をキーワードとして青空文庫のホームページ (www.aozora.gr.jp) で検索し、その作品の年代を調べる。

3.2 調査結果

3.2.1 キリスト

まず、『日本国語大辞典第二版』(2001)によると、

「キリスト」とは日本伝来当時は「キリシト」であったが、江戸時代後期から「キリスト」となった。中国イエズス会士によって、音訳語「基利斯督」およびその略語「基督」がつくられ、「基督」はプロテスタント宣教師に受け継がれ、19世紀中葉の漢語聖書用語として定着した。また、日本でも明治初年から「基督」が当て字として新教系の刊行物で用いられ、明治中期までには一般的表記法として確立した」

という。しかし、日本語訳聖書では文語訳も口語訳も一貫して「キリスト」の語が用いられている。

表1(『日本国語大辞典 第二版』(2001)による)から分かるように「キリスト」は「きりしと」→{「キリスト」、「基督」}の順に表記が変わり、明治以降は「キリスト」、「基督」の両方の表記が

表1

年	書名	作者	表記
1593	病者を扶くる心得		きりしと
1605	妙貞問答 下		きりしと
1886	改訂増補和英語林集成		Kirisuto, キリスト, 基督
1914	道程	高村光太郎	基督
1919	或る女 前・七	有島 武郎	基督
1933~37	若い人 上・一	石坂洋次郎	キリスト

使われるようになった。ここでは、「改訂増補和英語林集成」に載っているローマ字表記の「Kirisuto」は扱わない。

3.2.1.1 国語辞書

次に表記の変化が見られた明治時代の国語辞書を調べると次のような結果が得られた。

表 2

年	辞書	表記	意味
1888	漢英対照いろは辞典	きりすと	基督（耶穌の名にして救主の義）Christ
1889	和漢雅俗いろは辞典	きりすと	基督（耶穌の名にして救主の義）

表 2 の辞書ではひらがなの「きりすと」の表記が使われていたのが分かる。

年度から見ると「きりしと」→「キリスト」、「基督」→「きりすと」の順になる。

表 3

年	辞書	表記	意味
1893	日本大辞書	きりすとます	英語, Christmas ノ 訛り
1896	帝国大辞典	きりすとます	英語の Christmas の 訛り
1897	日本新辞林	きりすとます	英語 Christmas ノ 訛り, 耶蘇降誕節, 西洋にて十二月二十五日の祭り。

表 3 に挙げた辞書には「きりすと」、「きりしと」の表記は載っていないが「きりすとます」の表記が載っている。『日本大辞書』と『帝国大辞典』では「きりすとます」の語を単に英語の発音のなまりと説明しているが『日本新辞林』では他の辞書とは違って「きりすとます」を「耶蘇降誕節」と説明しているのが新しい。つまり、「きりすとます」はクリスマスをいう。

3.2.1.2 青空文庫

以上の辞書から「きりしと」、「きりすと」、「基督」、「キリスト」の四つの表記が用いられたことが分かった。次に、青空文庫ではこの四つの表記が使われているのか、また、よく使われている表記は何かを調べる。青空文庫に載っている作品数は約 7,700 件である。その中で四つのいずれが使われている作品は約 420 件である。

「きりしと」平仮名の「きりしと」の表記が使われたのはわずか二つの作品である。芥川龍之介の『きりしとほろ上人伝』（1919）と宮本百合子の『長崎の印象（この一篇を N 氏, A 氏におくる）』（1926）である。いずれも年代はそう古くはないが作品の内容がキリシタン時代の物語であるため、古い語をそのまま作品の中で表現したと思われる。

「キリスト」カタカナの「キリスト」の表記は四つの表記の中で一番多く検索された。検索された作品は 1891 年から 1956 年までで約 260 件（62%）である。「基督」のルビにも使われたのを含むと約 360 件である。

「基督」漢字の「基督」の表記が検索された作品は153件で約36%ぐらいである。年代は1887年から1968年までである。「基督」は単独で表記しているのもあり、「きりすと」、「キリスト」、「ハリストス」、「クリスト」のルビが振られているものもある。

一番多いのが「^{キリスト}基督」で、次が「^{ハリストス}基督」、次は頻度は少ないものの「^{ハリストス}基督」、「^{きりすと}基督」、「^{ノエル}基督」の順である。

「^{ハリストス}基督」が検索されたのはロシア文学を翻訳した作品（「六号室」アントン・チェーホフ（瀬沼夏葉訳））である。翻訳する際、「基督」の語にロシア語をそのままルビとして振ったと思われる。

「ハリストス」とは『大辞林』によると「ロシア語の [Khristos] でキリストのことをいう。日本正教会では主に「キリスト」を「ハリストス」と呼ぶ」という。

「^{ノエル}基督」の表記は一ヶ所だけある。岡本かの子の「街頭（巴里のある夕）」の中で「^{ノエル}基督降誕祭」と表現している。作中のパリの街の風景を描く場面でクリスマスをフランス語の「ノエル」と表現している。

「ノエル」とは『新漢和大辞典』によると、フランス語の [Noel] でクリスマスやクリスマスの季節、クリスマス・キャロルなどをいうと述べている。

「きりすと」の表記がある作品は五つで、1915年から1952年までで「きりすと」、「きりすと教」、「えす・きりすと」のような表現で用いられている。

以上、「きりしと」、「基督」、「キリスト」、「きりすと」の四つの表記がどの程度用いられているかを青空文庫で調べた。一番多く使われている表記は「キリスト」(62%)、その次は「基督」(36%)、「きりすと」(1%)、「きりしと」(1%)の順である。

3.2.3 キリシタン

『外来語の語源』(1979)によるとキリスト教が日本に伝来した当初は南蛮宗、天主教、後に吉利

表4

年	書名	表記
1599	ぎやどべかどる 上・一・三	きりしたん
1600	どちなきりしたん 序	きりしたん
1605	妙貞問答 下	貴理志端, きりしたん
1656	乾坤弁説 序	鬼利支端
1676	集義和書 八	吉利支丹
1701	浮世草子・傾城色三味線 京・一	切支丹
1797	契利斯督記	吉利支丹
1914	外来語辞典	キリシタン (切支丹)
1933	天草土産	切支丹

支丹とよばれたが、禁教後、特に將軍徳川綱吉以後は吉の字をはばかり切支丹、切死丹などと書かれたという。

表4（『日本国語大辞典 第二版』（2001）による）から分かるように、「キリシタン」の表記は1599年から見られ、いくつかの変化を経て1914年以降は現在使われている「キリシタン」、「切支丹」の二つの表記が使われているのがわかる。

きりしたん→貴理志端→鬼利支端→吉利支丹→切支丹→キリシタン

3.2.3.1 国語辞書

上述のように1914年以降は表記の変化が見られないので明治時代の辞書のみを調べた。

表5

年	辞書	表記	意味
1888	ことばのはやし	きりしたん	切支丹
1888	漢英対照いろは辞典	きりしたん	切支丹（洋教の名今の耶穌教又其信者）
1889	和漢雅俗いろは辞典	きりしたん	切支丹（洋教の名今の耶穌教又其信者）
1889～91	日本辞書言海	キリシタン	切支丹（基督の訛）
1893	日本大辞書	きりしたん	切支丹（モト西班牙語、Christian の訛り）
1894	日本大辞林	きりしたん	切支丹（宗門の名）
1896	帝国大辞典	きりしたん	切支丹（もと西班牙語の Christian の訛り）
1897	日本新辞林	きりしたん	切支丹（西班牙語の Christian の訛り）

表5に挙げた国語辞書では『日本辞書言海』の表記は「キリシタン」、その他は平仮名の「きりしたん」となっている。しかし、意味の説明はそれぞれである。「キリシタン」とは元来キリスト教とその信者の二つを指していたが、国語辞書ではこの二つの意味を説明しているのもあり、さらに「基督の訛」や「宗門の名」、「Christian の訛り」と説明している。

3.2.3.2 青空文庫

次に、文学作品には「キリシタン」の語がどのように表記されているかを調べる。以上から得られた「きりしたん>貴理志端>鬼利支端>吉利支丹>切支丹>キリシタン」の表記を一つずつ検索すると「吉利支丹」、「切支丹」、「キリシタン」の三つの表記が得られた。しかし、「きりしたん」の表記は「吉利支丹」、「切支丹」のルビとして用いられているだけである。検索されたのは「吉利支丹」が13件、「切支丹」が91件、「キリシタン」が10件で合計114件である。

「きりしたん」平仮名の「きりしたん」の表記は単独で使われたものはなかった。漢字の振り仮名で使われている。「吉利支丹」のルビに2回（1927年、1941年）、「切支丹」に35回（1905年～1954年）使われている。

「吉利支丹」の表記で検索された作品数は13作品で1879年から1950年までである。「吉利支丹」は単独で用いられているのが4回、その他はルビが付いている。ルビとして用いられているものにはカタカナの「キリシタン」は7回、平仮名の「きりしたん」は2回である。

「キリシタン」カタカナの「キリシタン」の表記は10件の作品に検索された（1928年～1950年）。しかし、漢字のルビとして主に使われている。

「切支丹」の表記は91件の作品に検索された（1902年～1954年）。主にルビが付けられている（約70%）。

以上、「キリシタン」に対する七つの表記を青空文庫で調べた。その結果、「きりしたん」、「吉利支丹」、「キリシタン」、「切支丹」の四つの表記が使われているのが明らかになった。一番多く使われた表記は「切支丹」（80%）、次が「吉利支丹」（11%）、「キリシタン」（9%）の順である。「きりしたん」の表記はルビだけで使われている。ルビは平仮名の「きりしたん」、カタカナの「キリシタン」両方見られるが、「きりしたん」はわずかで、主に「キリシタン」の方が用いられている。

4. 「キリスト」、「キリシタン」の音訳

「キリスト」、「キリシタン」の語は16世紀に外来語として日本に入って来た語である。[Christo]はポルトガル語で日本語では「キリシト」と発音していた。この[ch]が[k]ではなくて[キ]と発音しているのはなぜか。矢崎源九郎（1964）によると語頭の子音が連続する場合そのあとにつづく母音と同じ母音を語頭の子音にそえて発音したからであるという。さらに、「キリシト」になるのは順行同化の影響であるという。つまり、前の母音の影響をうけて[シ]となったということである。

5. まとめ

今回の調査で「キリスト」、「キリシタン」という言葉は戦国時代から使われてきたのが明らかになった。また、何回かの表記の変化を経て現代に至っているということが分かった。「キリスト」は「きりしと」から「キリスト」にかわり、「キリシタン」という語はあまり使われなくなり、その代わりに「キリスト教」、「キリスト教信者」、「クリスチャン」などのような語が使われるようになった。また、青空文庫に収められている文学作品では主に「キリスト」、「基督」、「切支丹」の表記が使われているのが分かった。今回の調査で見付けられなかった「キリシタン」に相当する表記がいくつかある。それらには「貴理志端」、「鬼利支端」、「切死丹」などがある。これらの表記はどのような文献で用いられているかを探るのは今後の課題の一つである。

参考文献

- 矢崎源九郎（1964）『日本の外来語』岩波書店
吉沢典男・石綿敏雄（1979）「外来語の語源」角川書店
李 明心（2006）「日本におけるキリスト教文化に関する研究」（明海大学大学院応用言語学研究科博士前期課程学位論文）

辞書

- 高橋五郎（1888）『漢英対照いろは辞典』大空社
物集高見（1888）『ことばのはやし』大空社
高橋五郎（1888-89）『和漢雅俗いろは辞典』大空社
大槻文彦（1889-91）『日本辞書言海』大空社
山田美妙（1892-93）『日本大辞書』日本大辞書発行所
物集高見（1894）『日本大辞林』宮内省
藤井乙男・草野清民（1896）『帝国大辞典』三省堂
林 甕臣・棚橋一郎（1897）『日本新辞林』三省堂
小稲義男（1980）『新漢和大辞典』第5版 研究社
日本基督教協議会文書事業部（1991）『キリスト教大事典』改訂新版 教文館
松村明三省堂編修所（1998）『大辞林』第2版 三省堂
小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典』小学館

インターネット上の文献

- 青空文庫 www.aozora.gr.jp

〈論文〉

俳句歳時記にみる外来語

山 野 栄 子

キーワード：俳句、歳時記、季語、外来語

1. はじめに

俳句は日本が世界に送り出した文学である。『入門歳時記』(1980)と『実用 俳句歳時記』(2004)を使い、俳句歳時記に取り上げられている外来語についてみる。

上記2冊は、24年の時を隔ててはいるが、編著者も違い、取り扱っている季語数も違うので厳密な経年比較はできない。しかし、俳句において好まれる外来語の傾向を探ることは、日本語の現状を知るうえで無駄ではないと考える。

2. 先行研究

俳句と外来語についての論文に、高橋(2003)と高橋(2004)がある。高橋(2004)には、「平成12年に発行された講談社版の『新日本大歳時記』を見ると春夏秋冬新年を通じて、391の外来語の季語がある。この五巻本の歳時記に収録されている季語は約5,000というから、約8パーセントが外来語の季語だということになる」とある。筆者が調べた限りでは、他の研究は見あたらない。

3. 季語数

3.1 『入門歳時記』1980年

『入門歳時記』に取り上げられている季語は、全部で見出し語805語、副題1,336語で、合計2,141語である。副題というのは見出し語の異名や見出し語に準じて用いられる季語である。例えば見出し語「復活祭」副題「イースター」、見出し語「登山」副題「登山口 登山宿 ケルン」などである。

外来語数は見出し語では12語、副題では20語(外来語を含む混種語、以下混種語とする4語を含む)であった。割合は1.5%である(表1)。1980年までの新聞・雑誌・テレビ・教科書の語彙調

査によると、外来語は異なり語数では7%前後を占めている（伊藤 2007）。1.5%は7%よりはるかに少ない。

表 1

	総 数	外来語数	割 合 (%)
見出し語	805	12	1.5
副 題	1,336	20	1.5
合 計	2,141	32	1.5

3.2 『実用 俳句歳時記』2004年

『実用 俳句歳時記』に取り上げられている季語は、全部で見出し語 2,747 語、副題 5,306 語で、合計 8,053 語である。

外来語数は見出し語では 102 語（混種語 19 語・外来語を含む複合語 1 語を含む）、副題では 169 語（混種語 43 語・複合語 1 語を含む）であった。割合は 3.4%である（表 2）。

表 2

	総 数	外来語数	割 合 (%)
見出し語	2,747	102	3.7
副 題	5,306	169	3.2
合 計	8,053	271	3.4

4. 内 訳

4.1 『入門歳時記』1980年

見出し語と副題を合わせた季語の内訳を示す。項目は分類目次を基に筆者が分類した。飲み物 4 語、遊ぶ物 8 語、身に付ける物 5 語、植物 4 語、行事 3 語、動物 1 語、生活 7 語である。各割合を図 1 に示す。

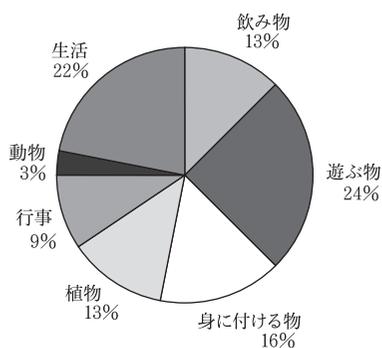


図 1

「遊ぶ物」の割合が多いのが分かる。例えば「スキー」「プール」「ビアガーデン」などがあがり、季節感が存在している。次に割合の多い「生活」も季節特有のものはっきりしており、「ストーブ」「スチーム」「ラッセル車」などである。「食べ物」が一つもない。編著者の取捨選択の結果ではあるが、食べ物に季節感がなくなってきていることの反映であろうか。

4.2 『実用 歳時記』2004年

見出し語と副題を合わせた内訳は、飲み物 15 語、遊ぶ物 46 語、身に付ける物 45 語、植物 69 語、行事 12 語、動物 2 語、生活 42 語、食べ物 40 語である。各割合を図 2 に示す。

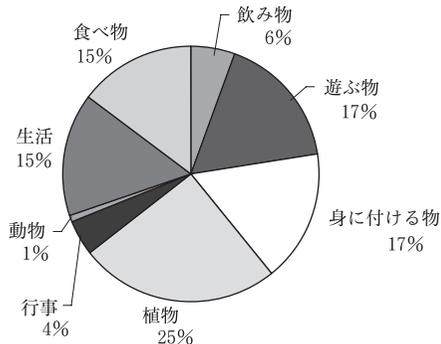


図 2

「植物」の割合が多いのは、輸入品が増えたためと思われる。加えて和名だけではなく、外来語で呼ぶこともあることが考えられる。例えば「^{ほたるぶくろ}蛍袋」の異名で、「カンパネルラ」, 「^{はなみずき}花水木」の異名で「アメリカン・ドッグ・フラワー」などである。「食べ物」「飲み物」に比べ、「植物」にはまだまだ季節感が存在している物が多いということでもある。

5. 拍数

5.1 『入門歳時記』1980年

各外来語の拍数を見してみる。和語・漢語との混種語・複合語は、季語としてのまとまりを優先し、和語・漢語部分も含んで数える。

見出し語

3拍:7 4拍:2 5拍:3

副題

3拍:3 4拍:7 5拍:6 6拍:3 8拍:1

図 4 はそれぞれの拍数の割合を示したものであるが、「マスク」「ラムネ」「スワン」などの 3 拍の季語が最も多く、5 拍以下が 88% である。

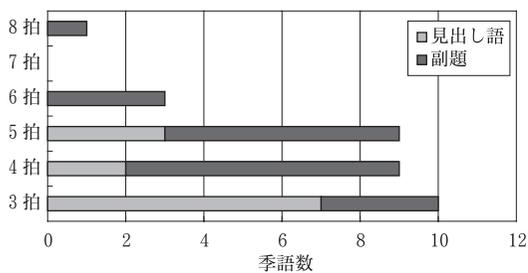


図3

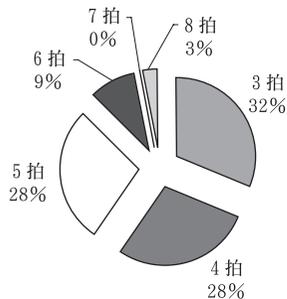


図4

5.2 『実用 歳時記』2004年

見出し語

2拍：1 3拍：23 4拍：27 5拍：22 6拍：19 7拍：5 8拍：3 9拍：2

副題

2拍：3 3拍：16 4拍：33 5拍：39 6拍：33 7拍：28 8拍：12 9拍：1
10拍：2 11拍：1 12拍：1

図6はそれぞれの拍数の割合を示したものであるが、「サンオイル」「フリージア」「クリスマス」

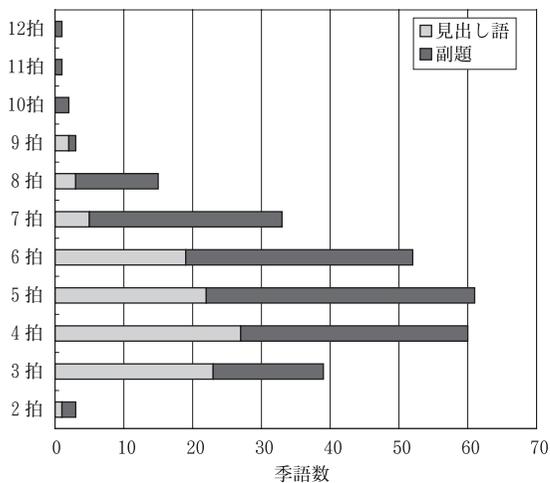


図5

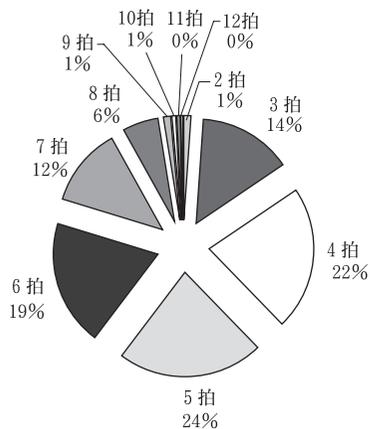


図6

などの5拍が最も多く、5拍以下は61%である。1980年と単純に比べると、取り上げている季語数そのものが多いので、拍数の多い外来語の割合も自ずと高くなることを考え合わせても、全体的に拍数の多い外来語が多くなってきていることが窺える。長い語でも、難なく覚えたり、身近な物、身近な事として使ったりしているのではないだろうか。

6. 『入門歳時記』1980年において『実用 歳時記』2004年にない季語

『入門歳時記』1980年において、『実用 俳句歳時記』2004年にない季語を見てみる。「ビアホール」「ケルン」「バルコニー」「ベランダ」「テラス」「ヒーター」の6語である。「バルコニー」「ベランダ」「テラス」に季節感というのも変であるが、この3語は、「露台」の副題としてあがっていたもので、籐椅子・木椅子などが置かれ、夏に涼を取る場所として取り上げられている。今日の日常生活では、集合住宅などでは特に、洗濯物を干す場所などになってしまい、季語としての情趣がなくなったか。ちなみに2004年には、「露台」もない。「ビアホール」は、飲食店の形態が変わり、廃れつつある言葉か。「ケルン」はもう十分山頂などに積石があり、目に馴染んだ物となり、句作に用いられることもなくなってきているのか。「ヒーター」は、2004年では、生活用品が充実してきたせいか、「ガスストーブ」や「石油ストーブ」などと細かく分かれる。

7. おわりに

俳句における外来語の使用は、江戸時代の松尾芭蕉からもう始まっている。高橋（2003）に

季語をもったいわゆる俳句として最初に外来語を用いたのはやはり芭蕉のようである。芭蕉は
甲比丹もつくばはせけり君が春
という句を延宝七年（1679）頃作っている。甲比丹はカピタンで、オランダ語の kapitein に漢字を当てたものである

とある。明治になり、カタカナ表記されるようになってからも、正岡子規なども積極的に使用している（高橋 2003）。和語や漢語とは違う響き、新しい物、新しい事を楽しもうという心意気が感じられる。現代においてもより斬新な言葉を求め、句作に反映させているのがわかる。そして、その選ばれる言葉は、「植物」など、きれいで、季節を感じるができるものである。さらに、「鉄線てっせん花か」を「クレマチス」と異名を使うことにより目新しさ、異国感を出すこともできる。俳句に外来語を取り入れる傾向は今後も続くであろう。

謝 辞

本論執筆にあたり、井上史雄先生よりご助言をいただきました。ここに改めてお礼を申し上げます。

参考文献

- 石綿敏雄（2001）『外来語の総合的研究』東京堂出版
 石綿敏雄（1985）『日本語の中の外来語』岩波書店
 伊藤雅光（2007）「国立国語研究所 第30回ことばフォーラム」予稿集

- 榎本好宏（2002）『季語語源成り立ち辞典』平凡社
——（2007）『季語の来歴』平凡社
大野林火（1980）『入門歳時記』角川書店
高橋悦男（2003）「外来語と俳句」『早稲田社会科学総合研究』第4巻第2号
高橋悦男（2004）「季語になった外来語」『早稲田社会科学総合研究』第5巻第1号
辻 桃子（2004）『実用 俳句歳時記』成美堂出版
長谷川真理子他（2006）『外来語と現代社会』国立国語研究所
文化庁（1997）『言葉に関する問答集 — 外来語編 —』
文化庁（1998）『言葉に関する問答集 — 外来語編(2) —』

〈研究ノート〉

ディベートにみられる終助詞「ね」「よ」「よね」の使用

— 日本語母語話者を対象に —

鄭 智 恵

キーワード：日本語母語話者、ディベート、終助詞、ね・よ・よね、ポライトネス・ストラテジー

はじめに

コミュニケーションは常に自分の立場表明を伴うものであり、その都度人間関係を調整するポライトネス・ストラテジーがあると考えられる。日本語において円滑なコミュニケーションを行う上終助詞の役割は大きい。双方意見の違うディベートの場の終助詞「ね」「よ」「よね」の使用実態を日本語母語話者を対象に調査し、「ね」が一番多く使われていたことがわかった。

1. 先行研究と研究課題

日本語の文末表現は「ポライトネス」とかかわる(大塚2000, 2003)。文末表現の「ね」「よ」「よね」の研究はいままで数多くなされてきた(白川1992, 田窪・金水1996, 宇佐美1997, 宮崎2000, 伊豆原1993, 2003等)。議論場面、反対意見の陳述にみられる終助詞の研究は李(2001)と大塚(2003)がある。しかし試合形式のディベートにおける終助詞の研究は管見の限り少ない。

本稿では、日本語母語話者を対象に試合形式のディベートにみられる終助詞「ね」「よ」「よね」の使用様態を明らかにしたい。

2. 調査資料

日本ディベート協会(JDA)主催第1回から第13回(1995-2007年)大会、15試合を無作為に選び、(<http://japan-debate-association.org/>実録・JDAディベート大会)ネット公表の文字化資料を分析した。

3. 結果と考察

3.1 全般の使用

終助詞「ね」「よ」「よね」の使用結果を図1に示した。「ね」(62.2%)がもっとも多く使われ、その次が「よね」(35.0%),「よ」(2.7%)であった。「ね」の多用によって、相手と異なる意見を

少しでも和らげて伝えようとの意図がみられる。鄭（2009）^(注)では、台湾人日本語学習者が一番多く使っている「よね」という結果と異なっていた。「ね」「よ」「よね」が、発話量（総モーラ数）に占める割合は1.2%である。

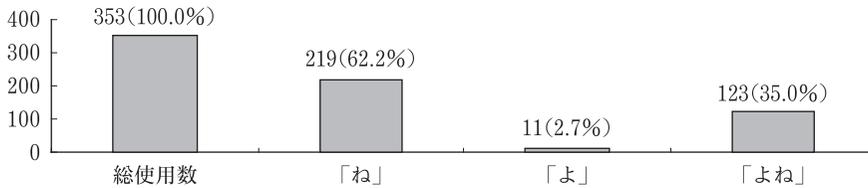


図1 使用頻度

3.2 質疑側（Questioner）と応答側（Respondent）

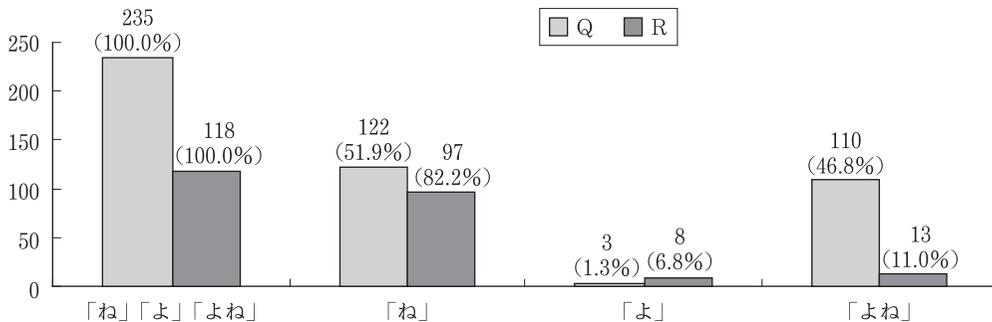


図2 質疑側と応答側の使用頻度

図2は質疑側（Questioner, 以下, Qと略す）と応答側（Respondent, 以下, Rと略す）の結果を示したものである。QはRの2倍弱であった。内訳をみると、「ね」の使用はQ, Rとも一番高く、とくにRは82%も占めている。「よね」はQが四割強であった。ちなみに、鄭（2009）^(注)の台湾人日本語学習者の結果では、Qは「よね」（107回）、Rは「ね」（13回）の使用が高かった。

4. ま と め

台湾人日本語学習者は「よね」を多く使い（鄭2009）^(注)、日本語母語話者は「ね」を多く使っていることがわかった。この結果を踏まえて、ディベートにおいて使用される「ね」と「よね」のコミュニケーション機能・使用効果に着眼し、今後の研究課題としたい。

（注）鄭智恵「直言表現にみられるポライトネス・ストラテジーの使用について——台湾大学生の日本語ディベートを例に」銘伝大学国際シンポジウム（2009.3発表予定）

謝 辞

本論文の執筆にあたり、JDA専務理事・立教大学松本茂教授からデータ使用許可をいただいた。この場を借りて深く御礼を申し上げたい。

〈研究ノート〉

日本語以外の言語を母語とする子どもと日本語教育

— 日本語指導における母語使用の必要性 —

蘇 曉 翠

キーワード：日本語学習，日本語指導，漢字学習，九九の練習，母語の勉強

1. はじめに

日本語以外の言語を母語とする子ども（以下、子どもと呼ぶ）に対する施策の歴史が浅い日本では、学校生活の中心となる教育問題について、多くの問題が残されており、その子どもたちの母語や母文化の喪失という問題まで対策を講じられないのが現状である。本稿では、日本語学習および教科学習などの学習サポートのうえで、どのような問題に遭遇するかについて、参与観察で得られた知見を報告する。

2. 観察対象及び調査方法

対象は、小学3年生（9歳）の中国語を母語とする女子児童（以下、Tさんとする）である。Tさんは中国で小学校2年生に半年程度通って、2008年2月来日した。観察開始時には日本の学校での日本語指導により、ひらがな・かたかな・小学1年生の漢字は習得済みであった。週1回Tさんの学校に赴き、日本語母語話者の日本語指導者（以下、日本語指導者と呼ぶ）と1対1で2時間程度行う学習サポートに中国語母語話者の筆者も参加し、適宜中国語で説明を加える形で観察を行った。学習内容は、主に漢字学習と九九の練習を中心とした算数、国語などの教科に関わるものである。

3. 結果および考察

漢字文化圏の中国から来たTさんと言っても、1年生の漢字から学ばなければならなかった。

Tさんの漢字学習は、外国人の子ども向けに作られた小学2年生の漢字練習用のワークブック（「かんじだいすき（二）～日本語をまなぶ世界の子どものために～」国際日本語普及協会）に沿って、まず新しく学習する漢字の意味を理解することから始められた。いくつかの漢字について、理解するのが難しいものもあった。例えば、日常生活の上であまり使われていない、抽象的な単語や複数の意味を表わす単語、日本語特有の表現などの理解が難しかった。例を上げてみると、小学2

年生の漢字の里，戸，広場，用，当番，交通，車，引く，当たる，台などである。中国語にないもの、意味の違うものは日本語での理解が難しいらしく、すぐ中国語を介して覚えたり、理解したりしようとする。

算数では、掛け算が完全にできなかったため、日本語指導者の判断で「母語の九九」を暗記することとした。Tさんは中国で掛け算は学習済み（中国語による指導）であったが、完全に習得しておらず間違いも多かった。毎回口頭で九九を言わせるようにしていたが、間違いには、単に正確に暗記できていないこと以外に、共通点があることが観察できた。例えば、 $3 \times 7 = 27$, $4 \times 6 = 27$, $7 \times 2 = 17$, $8 \times 9 = 42$ （解答はTさんによる誤答）など、Tさんにとって、数字の概念と音の組合せは4（ヨン）、7（ナナ）で、覚えており、4（シ）、7（シチ）という読みは日常会話にもあまり無いために、混乱を引き起こす原因となっているものと思われる。スムーズに発音できないとリズムがあわないので、口ずさんで覚えにくい。慣れない言葉での暗記は、小さなことでも障害につながり、想像以上に時間と訓練が必要な難しい作業であった。日本語では一ヶ月たっても、覚えられなかったため、母語で九九を暗記することにしたところ、一週間で暗記できた。これは日本語指導者によれば「例外的な早さ」だということである。

また、算数の文章題を解くためには、計算の知識の他に読解力が必要になる。そのため、計算方法を知っていても、文章題になると解答できないことがある。文章題には独特な言いまわしが使われるからである。算数の文章題でTさんが理解できなかったうちの一つは、助数詞である。助数詞は、外国人の子どもが苦手とする分野の1つである。

問題文が以下ようになっていた。「すずめがでんせんに19わとまっています。そのうち5わとんでいきました。でんせんにとまっているすずめはなんばになりますか」（下線筆者）。

この問題では設問の単位が「ば」で、答えのすずめの数14に対応する「わ」になっていない。この問題に誤答したTさんは、「日本語指導者の解説を聞いたら、自分が理解できていなかった部分すぐわかる。同じ問題が母語の勉強のときも出された。そのとき、正解だったのに、日本語で問題にしたら、日本語がわからないから、できなかった。日本の漢字でも、半分以上意味がわかるから、算数の問題もできるだけ、ひらがなではなくて、漢字にしてほしい」と言っていた。

4. ま と め

Tさんは「話すことができて、漢字を書いたり、読んだりできないので、授業には全くついていけないし、穴を埋めるのもすごく大変。もっとレベルにあった勉強（漢字練習や母語の勉強）をやってほしい。」「学校で使っている教科書が母語で訳してあるといい」と語っていた。今回の事例から考えると、子どもたちは、母語を介して教科学習を理解しているので、言語や学習の背景が多様化する子どもたちに対応するためには適宜母語を使った教科学習の補習を主目的とする日本語指導を行うのが、望ましいと考える。また、将来的には母語保持のサポートをも行うことも視野にいれるべきではないかと考える。

謝 辞

本稿調査では、千葉市教育委員会指導室の方々にご協力いただきました。心から感謝の気持ちを申し上げます。

〈研究ノート〉

中国人日本語学習者による促音の 知覚判断方略について

孫 荃 麟

キーワード：持続時間、音節間の長短バランス、母方言の影響、拍の相対性と絶対性

1. 研究目的と方法

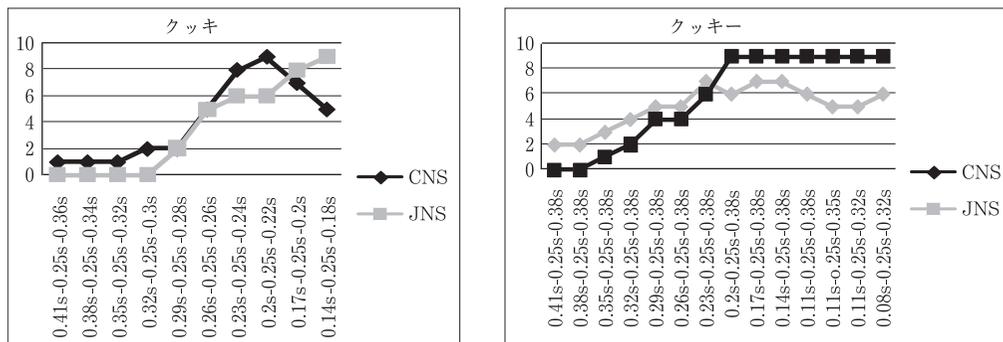
第二言語習得において、母語干渉がもっとも顕著に現れる分野が音声音韻であり、特殊拍の習得にも母語の影響が大きいと言われている。また、戸田(2003)によると特殊拍はモーラ性が付与され、アクセント核を担わないため、様々な異音を持つなどの理由で、自立拍に比べ複雑である。このため、第二言語学習者のみならず、日本語を母語とする幼児にとっても難しいと述べている。

そこで、本研究では特殊拍(促音)について、時間感覚という視点から、日本語母語話者(以下、JNS)の促音の知覚判断の方略を明らかにした上で、それと比較しながら中国人日本語学習者(以下、CNS)がどのような方法を使って、特殊拍の促音を知覚しているかについて調査した。

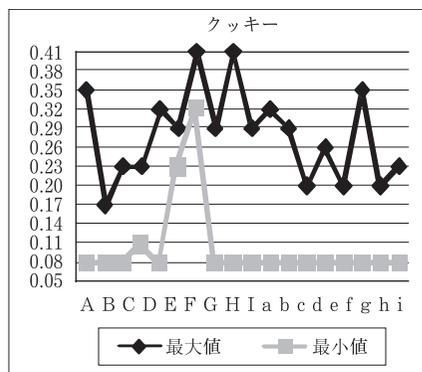
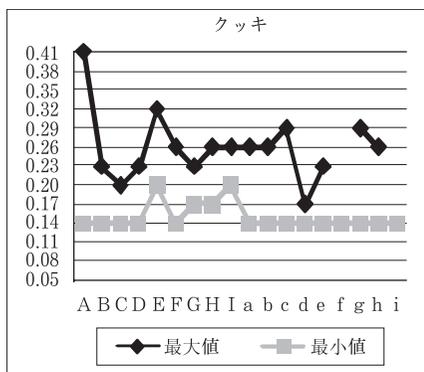
今回の研究では、モーラの音節だけを、また音素的音節だけを使うのではなく、両方とも用いて、新たなまとまりをひとつの区切り単位とする。たとえば、今回取り上げたクッキーの場合、「ク」、「ッ」、「キー」の三つのまとまりとする。つまり、CV、Q、CVRそれぞれをひとつの単位とするということであった。また、研究方法は三段階あり、(1)JNS 7名に対して、発話調査を行い、それをもとに(2)刺激音を作成した上で、(3)JNSとCNSの大学生各9名に対して、知覚調査を行った。

2. 研究結果

方法(3)の知覚調査の結果、母語別にまとめた持続時間人数分布とJNSとCNSの各人知覚範囲分



布二つの側面から結果を分析、考察した。人数分布図の縦軸は人数を表し、横軸は持続時間を表す。知覚範囲分布図（縦軸は第1音節の持続時間）を表す。横軸は対象者を表す（A～IはCNS, a～iはJNS）。さらに、標本範囲を参照しながら、分析を行った。



- ① JNSの促音の知覚判断の方略を明らかになり、促音が入っている3音節語(CVQCV)を知覚する時、閉鎖時間が促音の構成を満たす十分な閉鎖時間であれば、促音だと判断した上、促音および促音先行のCVと促音後継のCVの持続時間の長短バランスで、知覚を行っていると考えられる。促音と長音二つともが入っている4音節の語(CVQCVR)を知覚するときも同様に、各音の持続時間の長短バランスで知覚を行っているということがわかった。
- ② JNSが思っている1拍の長さは相対的な性質と絶対的な性質を持つとわかった。
- ③ CNSの促音の知覚判断の方略をJNSの結果と比較したところ、まずCNSは日本語学習歴に関わらず、1拍として成立するかどうかを判断の前提として1拍の長さで判断しているのだが、自分が思っている1拍の長さの境界値はJNSが持っている1拍の絶対的長さの境界値と異なっている。そのため、1拍を長くしたり、短くしたりする傾向がある。そして、朝鮮族であるCNSと上海出身のCNSが使っている方法については、JNSと同様の方法を使っている可能性があるが、それを確かめるためには、朝鮮族と上海出身のCNSに対して、縦断研究を行う必要がある。
- ④ 日本語の学習時間が長くなれば、なるほど、学習者の1拍の長さの境界値はJNSが持っている1拍の絶対的長さの境界値に近づいていくことがわかった。
- ⑤ 母方言からの影響については、朝鮮族と上海出身以外のCNSが負の影響を受けている。また香港出身のCNSが同じ学習時間の違う出身地の学習者と比べ、母方言からの影響が大きいとわかった。しかしながら、この特徴が普遍的なのか、特殊的なのかを明らかにするためには、もっと多くのCNSに対して、出身地別の調査を行う必要がある。

参考文献

- 戸田貴子 (2003) 「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』7巻2号, 日本音声学会, pp. 70-83
 戸田貴子 (2008) 「日本語学習者の音声に関する問題点」『日本語教育と音声』第2章, くろしお出版, pp. 23-41

〈研究ノート〉

商標の称呼のモーラ数が増加したときの 類否判断に与える影響

— 語尾に「ス」「ズ」が付加して1モーラ増加した場合 —

須賀 総夫

1. 「称呼類似」について

ある商標から導き出される「称呼」(appellation 端的には発音)が他の商標のそれと類似するか否か、が「称呼類似」の問題であって、出願した商標の称呼が先登録のものと同様と類似すると登録を受けられないし、場合によっては商標権侵害の責任を問われるため、商標を使用する事業者にとって、重大な利害がある。称呼類似の判断は、二つの商標の称呼をそれぞれ決定したうえで、その間に「聴き紛れ」がないかどうかを検討する作業であるが、この検討は、時と所を別にして二つの商標に接した需用者がそれらを混同するか否か、という観点から行なうので、音声よりは音韻の、人の脳裏に残った観念的なものを対象とすることになり、そこに困難がある。

筆者は、登録の実務を行なっている特許庁の実務において、称呼類似がどのような基準で判断されているか、特許庁が出した「審決」を資料として調査している。これまでに、二つの称呼のモーラ数が異なることが、判断にどう影響するかをみた。

2. 称呼類似を決定する諸要因と、「ス」「ズ」の付加

称呼類似を決定する要因としては、二つの称呼のモーラ数の大小・異同、異なる音節を構成する音素の素性の違い、聞こえ度、アクセントなどが考えられている。ここでは、モーラ数と有声・無声の違いのうちで、とくに一方の称呼が他方の称呼の末尾に、ス[su]またはズ[zu]がついた形とつかない形との組み合わせを取上げる。「ス」および「ズ」は、複数の表現として商標に多く採用され、判断された事例数が多い。

調査は、平成元年～19年10月までに出了特許庁の審決類(拒絶査定不服審判の審決、登録異議申立に対する決定および登録無効審判の審決)を対象とした。

データは、(株)パテントジャパン社『商標類否叢集』第65号(2008)から得た。

3. 語尾への「ス」の付加

「ス」の付加によりモーラ数が増加するわけで、その影響は、当然にモーラ数の小さいうちは大きく、モーラ数が大きくなると急速に低下する。このようすを、非類似認定率(審査部で類似

と判断した結論が審判部で覆えされ、非類似とされた件数の割合)で見れば、下の表のようなになる(6→7モーラ以上は事例が少ないので省略。実際の商標はラテン文字で構成されることが多いが、表には称呼だけをカタカナで記した)。

この率は、平成前半期よりも後半期のほうが高くなっている。つまり、近年では、「ス」が付加された称呼は、そうでないものから聴き分けられる、という判断が強くなっている。

「ス」の付加	2→3モーラ	3→4モーラ	4→5モーラ	5→6モーラ
具体例	ココ vs. ココス	マック vs. マックス	ユニック vs. ユニックス	エステック vs. エステックス
具体例についての類否判断	類似→非類似	類似→類似・非類似の両様あり	類似→類似・非類似の両様あり	類似→類似
非類似認定率%	86%	48%	38%	9%
非類似(全体)	39%			

類否判断が変更されるかどうかにかかわらず、「ス」が付加する語尾の音節がどのようなものであるかが、大きく影響していることがわかった。それを下の表に記す。

	促音+ク ～ック→～ックス	鼻音 ン→ンス ム→ムス	その他 X→Xス
具体例	クリック vs. クリックス アレック vs. アレックス*	ラリアン vs. ラリアンス クライム vs. クライムス	サンブラ vs. サンプラス ウイング vs. ウイングス
具体例についての類否判断	類似→類似 *類似→類似・非類似の両様	類似→非類似 類似→非類似	類似→非類似 類似→類似のまま
非類似認定率%	15%	71%	38%

4. 語尾への「ズ」の付加

「ズ」の付加によるモーラ数の増加が与える影響は、「ス」の付加について上にみたような傾向と同様であるが、モーラ数が小さいところで、もっと顕著といえる。

「ズ」の付加	2→3モーラ	3→4モーラ	4→5モーラ	5→6モーラ
具体例	トイ vs. トイズ	ウイン vs. ウインズ	パターン vs. パターンズ	サンホーム vs. サンホームズ
具体例についての類否判断	類似→非類似	類似→類似・非類似の両様あり	類似→類似	類似→類似
非類似認定率%	100%	36%	37%	17%
非類似(全体)	24%			

5. 結 論

- 1) モーラ数が小さいうちは、「ス」「ズ」の付加が引き起こすモーラ数増加の影響が大きく、非類似とされる率が高いが、その傾向はモーラ数が大きくなるにつれて急激に低くなる。
- 2) 「ス」が付加する語尾の音節が促音に続く「ク」である場合、非類似となる率が低いのは、「ス」が付加したとき「ク」の母音は無声化ないしは脱落して、いきなり破擦音 [ks] を形成し、この [ks] と [k] との相違があまり印象に残らないためと考えられる。
- 3) それに対し、鼻音 [m] [n] から摩擦音 [s] への移行は際だって聞こえ、「ス」の付加により類似から非類似へと結論が変わるようである。
- 4) 無声の「ス」に対して有声の「ズ」の付加は、影響がより大きくて類似の判断が覆る率が高いであろうと考えたが、この予測は外れ、非類似と判断される率はかえって低かった。今後の研究課題である。

〈研究ノート〉

日本の多言語景観：デパートと歓迎ポスター

井上史雄

1. デパートの多言語使用の増加

ここでは日本の言語景観 (linguistic landscape) について、いくつかの類型を指摘する。まず先端的事例として、デパートを扱う。デパートの多言語表示は以前から進んでいた。表1に1988年と2004年、2005年の外国語使用状況を示す(井上2001で提示したデータに新たに補った)。16年の間に、外国語の使用は1.4言語から2.1言語に増えた。1年後の別の調査では2.3言語になった(調査したデパートが違ったためもある)。英語(22)に次ぐ外国語が中国語(11)・韓国語(11)になり、上位から、英中韓仏西独伊葡である。なお対比のために韓国ソウルの状況を示す(井上2008.11)。ソウルのデパートは、1988年の東京より多言語化が進んでいない。

表1 デパート店内案内図の多言語化

	店舗数	平均 外国語数	含む 母国語	東京の										外国語数	母国語を含む
				1	2	3	4	5	6	7	8	9			
				日	英	中	韓	仏	西	独	伊	葡			
東京 1988	28	1.4	2.4	28	23	9	3	3	1					39	(28+39=)67
東京 2004	26	2.1	3.1	26	22	11	11	6	2	1	1			54	(26+54=)80
東京 2005	24	2.3	3.3	24	21	12	12	4	2	1	1	1		54	(24+54=)78
ソウル2006	14	0.6	1.4	3	3	2	12	0	0	0	0	0	0	8	(12+8=)20

このような商業施設の言語景観には、経済原理が反映される。売り上げに客層が影響するから、多言語化が進行する。ただし実際の客の要望以外に、デパートのイメージ・格付けのために(知的よりは情的な)言語選択が行われる。西欧の言語のパンフレットが多いのは、その表れである。

2. Yokoso Japan の言語景観

次に外国人向けの言語景観の典型として、日本政府 Yokoso Japan の歓迎のポスターを扱おう。2002年の京成電鉄と2007年のYokoso Japanの言語選択は同じで、英韓中独仏西である(表2の○印)。ただ言語の順番が違うことと、2007年Yokoso Japanで中国語の簡体字と繁体字の双方が載っていることが違う。このうち英語と中国語・韓国語のセットは2002年のワールドカップ日韓共催を機に、JRをはじめとする公的表示でよく見られるようになった。「JECK」と略記できる。このポスターでは他にフランス語とドイツ語・スペイン語が使われている。

Yokoso Japanの言語選択は、東京のデパートのフロアガイドにおける言語使用と似ているが、

完全に一致する組み合わせは、見つかっていない。商業的な客層を見計らっての選択とは違う。

Yokoso Japan の組み合わせは、日本の大学教育などでよく学ばれている言語でもある。最近約5年間の大学での外国語開講数の上位（英中仏独韓西；露伊羅）と一致している（井上 2008.3）。

Yokoso Japan の言語選択は、成田空港の利用者数と一致しない。表 2 に最近の観光客数を言語別に示した。

国際観光振興機構（JNTO）のホームページの国家別の集計表に基づき、公用語によって再計算した。例えば中国語は「中国+台湾+香港/2+シンガポール/4」で計算し、フランス語は「フランス+ベルギー/2+スイス/3」で計算した。上位からソートして配列した。

地理的近接効果がみごとに働き、アジアの韓国語・中国語が上位である。なお台湾が1,255,642で中国より多いので、文字からいうと繁体字使用国の観光客が多いが、国交の関係か、日本国内の公的多言語表示では大陸向けの簡体字が多い。観光客からいうとアジアのタイ語とインドネシア語（マレーシアを含む）の使用者が多いが、歓迎の範囲には入らないようだ。

他は英仏独西という欧米の言語である。日本語国際センサスの「将来必要な言語の世界推計」の順番、「英中仏独日西露…」の上位と一致する（木越 2004）。つまり、このポスターの言語選択は、日本にとって（国際的に）重要と考えられている、いわばステレオタイプに基づくものと考えられる。以上あげた言語選択は、国内の需要に合わせた市場価値の反映であり、地理的近接効果が働いた結果である。

3. 地域の言語景観

以上のように、景観という可視的データによって、言語使用の状況を確認する。これまでの研究成果によれば、諸言語の勢力・経済価値は、景観から推定できる。それは各種統計資料、調査資料によるものとよく一致する。言語景観は言語の市場価値を可視化したものと解釈できる。そのメカニズム、背景を探るのは、経済言語学分野の実践的研究である。知的・実用的要因以外に、情動的・心理的要因が左右する。

現在日本の多言語化は、さまざまな形で進行している。身の回りふれた現象も、記録し、集積し、分析することによって、一般的傾向を指し示す。諸言語の勢力・順番が分かるし、日本国内の言語の市場価値を反映する。卒業研究のテーマの一つとして、好適なものの一つだろう。

参考文献

- 井上史雄（2001）『日本語は生き残れるか——経済言語学の視点から』PHP 新書
 井上史雄（2008.3）「ドイツ語・日本語の経済言語学的価値変動」応用言語学研究 10, pp. 99-109.
 井上史雄（2008.11）「ソウルデパートの日本語」〈ことばの散歩道 126〉日本語学, 27-12.
 木越 勉（2004）「地理的距離からみた言語の使用価値」言語 33（9）, pp. 80-83.

表 2 観光客数の言語別集計

言語別観光客数 2007		成田	
総計	5,954,180		
韓国語	2,084,195	○	
中国語	1,892,578	○	
英語	1,082,892	○	欧米語
フランス語	150,211	○	欧米語
タイ語	119,718		
インドネシア語	100,981		
ドイツ語	62,471	○	欧米語
スペイン語	47,176	○	欧米語
フィリピン語	45,971		
ロシア語	37,747		
イタリア語	36,245		欧米語
ポルトガル語	22,082		欧米語
ヒンディー語	21,373		
オランダ語	20,289		欧米語

〈研究ノート〉

Google ストリートビューを使っての言語使用調査

— 新宿区歌舞伎町の言語景観 —

本 間 勇 介

キーワード：Google ストリートビュー，言語景観

はじめに

2008年8月4日，検索エンジンの「Google」が日本で「Google ストリートビュー」のサービスを開始した。本稿では「Google ストリートビュー」を使って，新宿区歌舞伎町の言語景観を調査した。

1. Google ストリートビューについて

1.1 Google ストリートビューとは

2007年にアメリカで「Google」が、「Google マップ」と「Google Earth」のサイトページを使ってビルの上まで街路写真を見ることができる「Google ストリートビュー」のサービスを開始した。現在では、「Google マップ」で日本，アメリカ，フランス，イタリア，オーストラリアなどの主要都市でインターネットを使って，街路写真を見ることができる。

1.2 Google ストリートビューの使い方

「Google ストリートビュー」で見られるところは、「Google マップ」地図上の青色で塗られている地域である。カメラアイコンまたはズームインをすると，黄色い人型のアイコンが現れる。これをドラックすると，「Google ストリートビュー」の画面になる。「Google ストリートビュー」では，東や西などの方位クリックをクリックすると前進・後進をすることができる。マウスをスクロールすると拡大・縮小，マウスの操作によりビルの上まで街路写真を見られる。

2. ストリートビューを用いての言語景観調査の利点・欠点

本稿では，「Google ストリートビュー」を用いて言語景観を調べた。バックハウス(2005)は，言語景観を「日本語しか含まない単一言語表示」と「日本語以外，あるいは日本語の代わりに，ほかの言語を含む多言語表示」，また公的表示(道路標識，地名表示，官庁の標識など)と私的表示

(店名表示、広告看板など)と定義している。

正井(1983)の言語景観の調査では、実際に歩いて地図に多言語使用を書き込んだ。バックハウス(2005)の言語景観の調査でも、実際に歩いてデジタルカメラで写真を撮って多言語使用を調べた。本稿では、「Google ストリートビュー」のみを使って多言語使用を調べた。

2.1 ストリートビューの利点

- わざわざ現地まで行って、言語調査をしなくても良い。
- 現地に行くのと現地の人に邪魔をされることがあるが、ストリートビューは現地の人の干渉がない。

2.2 ストリートビューの欠点

- 場所によってはストリートビューで見ることができない地域がある。
- トラックなどの障害物で看板を見ることができない。
- 写真の解像度が低くて、何が書いてあるかが分からない場合がある。
- 街の写真をいつ撮影したのかが分からない。

3. Google ストリートビューを用いての言語景観の調査方法

「Google ストリートビュー」を使って、多言語表示を調査した。調査範囲は新宿区歌舞伎町である。記録方法は、「Google ストリートビュー」を見ながら、地図に多言語表示を記入した。アルファベット、その他(簡体字・繁体字・ハングル文字)を記録し、「Google ストリートビュー」の写真の解像度が低いので、個々のつづりは分析しない。文字だけに着目する、つまり言語種については調べないことにした。

4. 結果及び考察

表 各文字種の件数

文字種	アルファベット	簡体字	繁体字	ハングル文字
件数	112	2	1	1

調査した結果、歌舞伎町ではアルファベットを用いた看板が圧倒的に占めていた。しかし、簡体字・繁体字の言語使用は少なかった。また、近くにコリアンタウンの新大久保があるが、歌舞伎町ではハングル文字を1件しか見ることが出来なかった。今後は、ハングル文字がどのように新大久保に広がったか調査したい。

参考文献

- バックハウス、ペーター(2004)「『内なる国際化』— 東京都の言語サービス」河原俊昭(編)『地方自治体の言語サービス: 多言語社会への扉をひらく』春風社
- (2005)「日本の多言語景観」真田信治・庄司博史(編)『辞典 日本の多言語社会』岩波書店
- 正井泰夫(1983)「新宿の喫茶店名 — 言語景観の文化地理」『筑波大学地域研究』筑波大学地域研究科

〈研究ノート〉

『Google Scholar』の利点

松田直人

1. はじめに

これまで論文検索の際には、多大な労力や時間を費やすことが多かった。しかし2004年に検索サイト『Google』(www.google.co.jp/)が論文の情報検索サイト『Google Scholar』(http://scholar.google.co.jp/)を開始した。日本では2007年から本格化し、そのおかげで論文検索が飛躍的に進歩を遂げた。

本稿は『Google Scholar』を広く知ってもらおうと、本学外国語学部教授である井上史雄氏のご提案により、書いたものである。

2. 『Google Scholar』のメリット

この『Google Scholar』での論文検索方法を知るまでは、地道に論文を探し、その論文参考文献などから探すことが多かった。しかし、論文の内容まではわからないため、論文を取り寄せてからそれほど関連がない論文であることもあった。『Google Scholar』を使用すると、PDFファイルで中身を見ることもでき、さらにはその多くの論文がプリントアウトすることができる。中身を見てから関係ないと思った論文はプリントアウトする手間も省けるため、自分が検索する際には時間的負担と経済的負担が大きく軽減できたことが何よりも大きな利点であったと言える。

3. 日本語論文と英語論文の差

実際に日本語と英語での検索の差を見てみようと思う。本稿では「形容詞」「Adjective」「コーパス」「Corpus」を実際に検索した結果を示す。

表1 検索ヒット数の比較

	形容詞	Adjective	コーパス	Corpus
検索ヒット数	6,150件	167,000件	3,690件	1,500,000件

表1を見ればその検索結果は一目瞭然だろう。日本語で書かれている論文は、英語で書かれている論文に比べて極端に少ない。認知度も低いことを示す結果となっている。

4. ま と め

『Google Scholar』ができたことにより、研究者たちにとっては非常に有効なものになったと言えるだろう。『Google Scholar』を広く知ってもらい有効活用していき、論文を執筆する際も有効に活用し、様々な研究分野の発展に繋がればと思う。

平成20(2008)年度 卒業研究要旨

11050001 秋元沙友里

「年代・職業・男女別にみたストレスの違い」

年代というより学生と社会人とでの職業別にみたストレスの原因に違いがあり、学生は「人間関係」、「精神的」が最も多かったのに対し、社会人は「社会的」、「人間関係」が多く、また「人間関係」でも学生は「友人関係」、社会人は「職場での人間関係」という大きな違いがあることがわかった。発散方法では男女共に「遊ぶ」が多く、「友人と話す」が男性は少数意見だったのに対し、女性は「遊ぶ」に次いで多かった。ここに最も大きな違いがあることがわかった。

11050002 芦名 幸菜

「菓子の商品名から見た認知言語学的考察」

マーケティングにおいて、商品ネーミングは販売実績を左右する重要な要素のひとつである。売り手の実績に基づいた戦略と、消費者の思考とのズレを明らかにするため、20代～50代までの50名を対象とし、アンケート調査を行った。その結果「濁音」と「長音」ばかりが注目を浴びていたが、他にも「ナ」と「ラ」を含む商品名も有力だとわかった。これは商品イメージに結びつきやすい言語音やリズムが影響していることを示唆している。

11050003 阿曾 直美

「文章表現能力低下の実態と指導——意見文作成の調査を通して——」

子どもの「学力低下」が進んでいると言われるが、実際には数値としての「学力低下」は見られず、「文章表現力」の低下が「学力低下」と思わせる原因であるとわかった。そこで小学生・中学生9人を対象に、作文指導を含む二度の意見文作成による調査を行った。この調査の結果、意見文は著しく変化し「文章表現力」の向上がみられ、ワークシートによる構成・内容の事前指導が有効であることがわかった。

11050004 飯田真由美

「『らしい』と『ようだ』——日本語学習者への指導法——」

普段、私たちは当たり前のように「らしい」と「ようだ」を使い分けているが、それは無意識にやっていることである。両者にどんな意味の違いがあるのかを明確にし、その上でどのように学習者に教えるのが効果的なのか本稿では考えていくことにする。なお、「らしい」「ようだ」のいずれも複数の意味を持っているが、今回は推量という点での「らしい」「ようだ」の意味に絞り、両者の意味の違いや教え方を取り上げることにする。

11050005 飯塚 弘美**「日本語のオノマトペと韓国語のオノマトペ」**

日本語は、他の言語に比べるとオノマトペが多いと言われていて、また、私自身も会話の中で多くのオノマトペを使っている。だが、本当に多いのだろうか。本稿では、日本語と似ていると言われている韓国語と比較する。オノマトペを抽出するために、韓日辞書と日本語の国語辞典の最初から最後までの見出し語や例文を抜き出し、日韓両語のオノマトペの量の比較や形態の比較、意味の比較、文法の比較をして違いを明らかにする。

11050006 五十嵐徳史**「若者言葉」**

普段私たち若い世代が、なにげなく使っている「若者言葉」。テレビやニュースなどのメディアから受ける印象は、言葉の乱れの要素や原因と感じ取れる。実際、私自身も「若者言葉＝言葉の乱れ」のような印象が強い。世間では、若者言葉についてどのような考えを持っているのか、また現代の言語社会にどのような影響があるのか調べた。文化庁による「若者言葉に対する世論調査」を中心に、自分なりの考察をした。

11050007 伊藤 高志**「伝統色名から見る日本人の価値観」**

この論文はテレビや小説で、名前だけを知る色や身近な色について記した。

名前だけを知る色については、具体的なイメージを持ってもらう為、身近な色については、より深く知ってもらう為、語源や名前の由来となったものについても記した。

色見本や写真を用いて幾つかの色を紹介するが、色見本についてはインターネットのJIS規格によるものであり、他の基準では紹介した色名を持つ色と別の色の名前となることがある。

11050008 今井 雄一**「敬語」**

日本語の中の敬語について、私達が知らないことは数多くある。まず、敬語自体がなぜあるのか。その敬語が示す役割とは。日々慣れてしまっている日本語の中の敬語に着目し、敬語本来の持つ意味や、基本的な使用の仕方などから応用的な使用法、さらには敬語自体の重要性について触れていき、私自身だけでなく、日本語を習っている全ての人にとって「敬語」が素晴らしいものであることを研究する。

11050009 岩瀬 仁志**「意味が変わっていった日本語」**

現在では、本来の意味とは別の意味で使われている日本語も増えてきている。

そこで、今回、それらの言葉から10個と、挨拶の表現一つを選び、それらの言葉を、10代と20代の男女数名に、アンケートとして渡し、どのような結果となったかを記していき、どのような傾向になっているのかを考察していく。また、回答には無記入も用意しておき、これらの言葉が、どれだけ日常に広まっているかも考える。

11050010 岩永 南

「名づけの変化 ― 幅の広がる命名 ―」

近年“個性的”な名前の増加とともに、ふりがななしでは読めない名前が増えてきている。名付けのルールに関しては昔から変わらないのに、どうしてこのような傾向が生まれたのだろうか。名付けのルールや人名用漢字の変遷といった基本的な名付けに関する事柄をまとめていくとともに、最近の名付けの傾向や重視する点、人気ランキングなどを踏まえて今と昔を比較しながら多様化した背景を考察していく。

11050011 岩本 直子

「『ピーナッツ』が愛され続ける理由」

日本では誰もが知っているであろうキャラクターのスヌーピー。しかし、そのスヌーピーは『ピーナッツ』という50年にわたって描かれてきた新聞連載コミックに出てくる登場人物の一部にすぎない。その『ピーナッツ』が、スヌーピーを始めとしたキャラクターグッズを含め、愛され続けてきたのは、コミックの作者であるチャールズ・M・シュルツの人生が大きく反映されていると考え、愛され続ける理由を研究した。

11050014 植草 晴菜

「表現の規制は必要かどうか ― 単純所持の禁止の危険性 ―」

近年、青少年に与える悪影響を懸念し、マンガやアニメへの表現の規制が厳しくなっている。それは作品上の表現だけでなく、それを購入、所持する消費者にまで規制の手が伸びている。「単純所持の禁止」だ。マンガ大国である今の日本で所持を禁止することは大変厳しいのではないか。本稿では「単純所持の禁止」が盛り込まれた法律を中心に、本当にその禁止要項が必要かどうか、海外で起きた事件を参考に問題点を挙げて論じる。

11050015 薄井 千春

「日本人の名字と家紋」

日本人の名字は約29万種ある。そのうち、全国で多い名字は「佐藤」である。東京都の葛飾区新小岩三丁目に絞り調査を行い、この地域に多い名字はなにかを調べる。その調査結果と全国の名字ランキングや関東地方のランキングを比較し、名字の傾向は同じなのかを調べ、研究していく。

また、どの家にも必ずある家紋だが、実は名字と深い関係がある。家紋の歴史をさぐりながら、

二つの関係性を研究していく。

11050016 内田 千鶴

「二言語話者によるコード・スイッチングの実態 ― 要因と使い方に注目して ―」

国際化が進む近年、自分の母国語とそれ以外の言語を話すバイリンガル（二言語話者）も増加傾向にある。この二言語話者同士の会話のなかで発生するのが、コード・スイッチングである。本稿では、これまでにあげられているコード・スイッチングの要因と使い方、および、出現規則について実際の使用状況との比較をし、その実態を明らかにすることで、これまで提唱されてきた規則以外の傾向もあることを指摘したい。

11050018 大塚 梓

「日本文化にみる日本人のしきたり ― 年中行事に込められた思い ―」

戦後の日本人は、あらゆる便利なモノを生み出し、ひたすら生活の快適性を追い求めてきた。しかしその一方で、それまで大切に育み、受け継いできたさまざまな伝統を置き去りにしてきてしまった面がある。今では、「日本人は自分たちの国の文化をよく知らない」と、他国の人から言われてしまうほどだ。そこで、私たちの先祖の願いや思いが詰まった、すばらしい日本文化を見直すべく、その由来や変化を調べてみたいと思う。

11050019 鴛海沙知子

「国語辞典と新聞からみた摂食障害」

私は以前から精神病や心身症など、心の病と称されるものについて関心があった。その中でも、拒食症・過食症などの摂食障害に注目し、言語の面から調べてみる。

摂食障害には拒食症と過食症がある。国語辞典による記述と、実際の新聞における使用率や使用例をみて、それぞれの認識のされ方について調べ、比較してみた。

その結果、「過食」と「過食症」では、意味に差が出ることがわかり、意味の細分化が必要だと思われる。

11050020 小原 幸恵

「日本人女性の瘦身願望の実態と適切な健康管理」

現代の日本では痩せた女性が美しいとされる傾向が強い。女性たちは「痩せたい」と口々に言う。では、どれほどの女性が痩せたいと感じているのだろうか。食わずに痩せようとするのは簡単だが、危険と隣り合わせの状態にある。心身共に美しい身体を目指すには、正しいダイエットが必要である。適切な痩せ方をすることは健康を維持することにつながる。健康で美しくあるために、現代の日本人女性には何が求められているのかを研究する。

11050021 恩田 昌英

「女房詞について」

言葉は時代とともに変化してきている。しかし、普段当たり前のように使用している言葉の中には、室町時代ころから使われ始めた「女房詞」というものがある。

女房詞がどのように発生し、どのくらい使われていたのか、また現在はどのくらい残っているのか、先行研究をもとにして検証していく。

今現在使用されている女房詞は少ない。今後もこの言葉というものは様々な変化を遂げ、消失と誕生を繰り返していくのかもしれないと感じた。

11050023 金子 真也

「明治時代に生まれた言葉の背景と使われ方」

本稿は明治時代に生まれた言葉の背景と使われ方を記すものである。まず、明治時代に作られた新語を新造語、借用語、転用語の3つに分類する。その後、3つに分類されたそれぞれについて言葉の由来、作られた理由、辞書での意味、その言葉が日本でどのように受け入れられたのかを記した後、それぞれの分類ごとに考察をしていくものである。最終的に全体的に見て気づいたこと、感じたことをまとめるものとする。

11050024 神木 瞳

「自己表現能力の低下と人間関係の悩み」

近年、無差別殺人が続発している。犯人に共通するのは、孤独感。人付き合いが苦手で友人がいなかったというパターンが多い。

人間関係を構築する上で欠くことのできない「ことば」。たくさんの人とことばを交わす中で、コミュニケーション能力は磨かれていく。しかし、犯人は皆、人との対話を避けていたという。そして孤独感が生まれていった。ことばの力によって孤独感から救い出し、事件を防ぐことはできなかったのだろうか。

11050025 喜多野菜生

「日本語における擬音語・擬態語の役割」

日本語は世界でも有数の擬音語・擬態語の豊富な言語であり、日常の会話など言語活動で頻繁に使用されている。このように私達にとって身近な擬音語・擬態語であるが、使っている人はみな同じ意味にとらえているのだろうか。もし、擬音語・擬態語がなかったらコミュニケーションを行うときどうなるのか。本研究では、擬音語・擬態語を使わないで表現するという言い換えのアンケート調査から、擬音語・擬態語の役割を考えた。

11050026 倉島 佳代

「オーストラリアにおける日本語教育実習について — CQU の日本語専攻学生を対象に —」

2006年8月にオーストラリアにおける海外日本語教育実習に参加する機会をいただいた。直説法と間接法の両方を使い、会話実習を行った。貴重な経験の実践報告をし、学生や担当教師の先生方からのアドバイスを踏まえ、活動を振り返る。その結果、筆者が得たこと、反省点等、そして今後の課題を提示する。

11050027 栗田亜希子

「ダイエットという言葉の間違ったとらえ方」

本来の「ダイエット」という意味が現代ではどのように形を変えてきたのかを対象に、歴史的な変遷も含め研究した。

本来ダイエットとは「生活様式」を意味するギリシャ語「diata」が「日常の食べ物」という意味に転じ、英語「Diet」が誕生。そこから「肥満」に対する「食事療法」といった意味を持ち、現在では「ダイエット＝減量」という意味で間違っ使用され、英単語の意味とはかけ離れた和製英語と化している傾向にある。

11050031 小路 健美

「HIPHOP 文化の歴史と日本への参入、今後の展望」

「HIPHOP とは、音楽のジャンルをさす言葉である」と誤解している人が多い。しかし、実際はラップやDJ、グラフィティや、ブレイクダンスを軸に、服装や、ライフスタイルなどを含めた文化の総称である。そのことから、まず、HIPHOP とはどのようなものであるかを調査した。そして、その歴史について調べ、時代背景とHIPHOP の歴史を照らし合わせることから、HIPHOP の今後の展望について考察した。

11050032 國府田春奈

「女ことば」について

現代では、女性による「女ことば」の使用が少なくなった。彼女たちは「男ことば」や男女間に隔たりのない「中性化」された言葉を使用している。そして、文面からでは性差は全くといっていいほど感じられない。そんな中、「女ことば」を使っている人たちがいる。「ニューハーフ」という新しいジャンルの確立によって消えかけた「女ことば」を使い、彼女たちを象徴させる言語となった。性差やジェンダーの問題を取り上げまとめた。

11050033 小島 彩乃

「学校内いじめの一考察」

学生時代、誰でも一度はいじめを見かけたことがあるはずだ。言葉でからかう軽いものから、暴

力による肉体的いじめ、複数人によって行われる無視といった精神的いじめなど、その種類は多岐に渡る。いじめは悪いものだと認識していながら、それを周りに訴えられた人は一体何人いるだろう。何故、見つけた時点で誰も動けないのか。いつまでもなくならないのかを、それぞれの視点と教師との関係を交えて考察していく。

11050035 後藤 泰介

「ニート ― ニートを減らすには ―」

近年はニートの増加が社会問題化している。本稿では、ニートを減らすにはどうしたらよいかを探るために、雇用形態と収入格差、各国の施策、ニートの生活実態などの観点から、資料の調査を行った。その結果、ニートが増える原因は親の厳しさの欠如にあることがわかった。このことから、国や地方公共団体の行う自己啓発的施策よりも、健全な親子関係の形成をサポートする体制づくりのほうが効果がありそうだということがわかった。

11050036 後藤 学

『徒然草』はなぜ今も読まれるのか

『徒然草』は、鎌倉時代の後期に、吉田兼好によって書かれた随筆である。日本の随筆文学の代表として時代や国境を越えて読み継がれ、さまざまな研究や享受がなされてきた。なぜ、『徒然草』は成立から700年近く経った今も、多くの読者に読まれるのであろうか。本稿では、その文学的意義について、「古典教材としての『徒然草』」、「実用書としての『徒然草』」という二つの視点からの考察を試みた。

11050038 酒井 秀人

「授業時における友達ことばについて」

日本語教育の授業は通常「です・ます体」で展開されることが多い。その中で、「です・ます体」ではない、話しことばである「友達ことば」が日本語の授業で占める位置と割合がどういったものなのか、日本国内と海外では扱いがどのように違うかなどの疑問を、筆者の日本語教育の教壇実習経験からの考察や、実際に働かれている日本語教員の先生方、現在日本語を学習している学習者に話を伺いながら調べた。

11050039 酒井 優佳

「ケツメイシの歌詞に見られた音符付与率 ― 自立拍と特殊拍に注目して ―」

ケツメイシの歌詞に対する音符付与率について、まず、童謡とMr.Childrenの歌詞に対する先行研究と同じ調査方法で分析を行い、ケツメイシだけに見られる全体の特徴と1曲ずつの特徴を論じた。その後、日本語律文の観点から曲のテンポと休止の関係について調査した。その結果、ケツメイシは長音を多く付与する傾向が非常に強く、テンポが速くなるにつれ、休止の数が増え、リズム

ムの歯切れを良くすることなどの特徴が明らかになった。

11050040 櫻岡 聡行

「江戸時代の服装の変遷について」

江戸時代は、徳川家康が征夷大將軍に任じられ、江戸に幕府が開かれたときを始まりとし、慶応3年(1867)に大政奉還するまでのことである。その歴史の区切りの中で一番長い時代での服装の移り変わりは、めまぐるしいものだったに違いない。そこで、当時の人々はどんな思いできものを着て、政治や時代とのかかわりはどんなことであったかを知りたいと思い、この研究をしてみようと思った。

11050041 佐々木康之

「急成長スポーツフットサル」

2002年日韓ワールドカップをきっかけに日本のフットサルは人気急上昇してきた。それはやはりフットサルの手軽さにあることは間違いない。コートが狭いので年齢、性別問わず誰にでもできるという良さが人気の上ってきた理由である。人気が上がると、競技人口も増えてきたことにより、フットサル施設も多数増えた。日本のフットサルだけでなく海外にも目を向け、様々な視野からフットサルを見ていく。

11050042 佐藤 麻丹

「漫画における男子高校生キャラクタータイプと役割語」

漫画や小説などの作品に登場する人物は、私たちが普通の生活に用いているものとは異なる「役割語」と呼ばれる言語を使用している。

この役割語がどのような働きをしているかを、漫画の登場人物に多い「男子高校生」を例にして取り上げる。SFやファンタジー等の特別な舞台設定ではなく、私たちが生活している現実世界に近い作品に絞って、作品別、登場人物別、機能別、対人関係別に比較して考察する。

11050044 椎名 恵

「室町時代から江戸時代初期における『こそ』の破格化の表れ」

現代において、上に来る語を強調するのに用いられる助詞の「こそ」は、古くに遡ると、活用語の已然形と呼応し、係り結びという形式をとっていた。しかし、その係り結びの形式は時代が進むにつれその形を崩していき、現代においてその形式はほぼ消滅している。

今回、その「こそ」の係り結びの形式の破格化の進行を、室町時代から江戸時代初期の物語物というジャンルに範囲を絞り、調べていく。

11050045 朱 貞恵

「ボーイッシュの広義的な使用について」

本稿では、日本人がよく使う「ボーイッシュ」の意味や対象を、2つの検索サイト Yahoo.co.jp と Google.co.jp の例を収集、分析した。その結果を、辞典の語釈との対照を通じて「ボーイッシュ」が実際によく使われている分野、そして、それ以外の分野を集計し、これらから「ボーイッシュ」の使い方の傾向について考えたこと、外来語について考えたことを述べた。

11050047 瀬尾友香理

「日本人の美意識」

日本人の美意識は、時代の流れとともに変化してきた。そこで今回は日本人の美意識の中でも、美人観や美容に関する歴史（化粧・ファッション）とその変遷について調べた。そして、大学内で20代の男女に美に関する意識アンケートをとったところ、美人とは「外面的な美もちろん大事だが、内面の美しい女性は表面に出てくるもの」という声が多かった。その結果、美人とは内面的な美を備えた女性だといえる。

11050048 関口 真伊

「敬語は必要か、不必要か」

いつの時代も、「言葉の乱れ」が話題になる。現在では敬語不要論者まで現れているが、敬語は本当に必要ないのだろうか。敬語のノウハウ本は多いが、敬語の必要性を説明する本は少ない印象を受けたため、今回調べることにした。

敬語と行動言語学の文献とドラマ「3年B組金八先生」の昭和と平成の登場人物の言語行動を参考に、敬語から人間関係の構造の変化状況を観察し、敬語の必要性を考えた。

11050049 蘇 暁翠

「ニューカマーの子どもと日本語教育 ― 日本語指導における母語使用の必要性 ―」

本論文では、ニューカマーの子どもたちの教育問題について考察するため、子どもと日本語指導者を対象に面接調査を行い、実際に外国人の子どもが日本語学習および教科学習をするうえで、どのような問題に遭遇するかについて、調査した。その結果、多様化する外国人の子どもに対応するためにこれまで蓄積されてきた指導方法や教材の改良や開発を進めていくのと同時に、母語使用を考慮した日本語指導を行う必要があることが分かった。

11050050 曾我 浩世

「ローマ字略字」

現代の若者言葉として登場したローマ字略字だが、どのように使用されているかを調べ、そしてどんな特性があるか、ラジオや雑誌などから言葉を収集し検証した。その結果、ローマ字略字は書

く場面に多く登場し、隠語のような特性を持っていることがわかった。同じローマ字略字に違う意味を持たせている場合もあり、決まった意味を辞書のようにまとめるのは難しい。今後も変化を遂げそうである。

11050051 孫 荃麟

「中国人日本語学習者による特殊拍の知覚判断方略について ― 長音と促音 ―」

本研究は、単音、長音、促音の持続時間および音節間の持続時間に焦点をあて、日本人母語話者の知覚判断の特徴を明らかにした上で、中国人日本語学習者を対象に聞き取り実験を行い、学習時間数別・地域別の知覚判断の方略を分析した。

聞き取り実験から、学習時間数 5~6 年の中国人日本語学習者群の中には、日本人と同様の知覚判断の方略で促音と長音を知覚している人がいたが、それ以外は各自の方略を使っていることがわかった。

11050052 高木二三也

「Mr. Children の軌跡」

Mr. Children の CD 総売り上げ枚数が 5000 万枚を突破した (B'z に次ぐ歴代 2 位)。ミリオンセラーはアルバム 11 作、シングル 10 作。この数字も凄いが、ミスチルの恐ろしさは 15 年以上も第一線で「記録」と「記憶」の両方に残る音楽を作り続けていることだ。時代と向き合ったサウンド、恋から愛へと変化する歌詞、圧倒的にパワフルなメロディ。音楽史のトップを走り続けるモンスターバンドの歴史を振り返った。

11050053 高橋こずえ

「コーヒーと文化」

国が違えば文化が違うように、コーヒーの飲まれ方や好み、市場動向も、世界各国で様々に異なる。日本でも独自の個性をもったコーヒー文化が培われてきたが、近年の外資系カフェなどに代表されるようにコーヒーの楽しみ方は多くのバリエーションを持ち始めている。コーヒーの品質をより高く維持しながらも一人でも多くの方にその楽しさを伝える「コーヒーマイスター」。マイスターに必要な知識とコーヒーの歴史を述べる。

11050054 湯浅 真唯

「育児」

私は、今年一月に出産を経験し、日々子供の成長を感じながら、育児生活を送っている。育児生活をしなが、改めて周囲の協力を感謝の気持ちや、子供を通して両親への自分に注がれてきた愛情というものを感じた気がした。乳児検診で成長の記録に喜び、熱、風邪、蕁麻疹で病院にお世話になる事があり、この約一年間母親として、沢山の感情を抱いてきた。

今回卒業研究において、私は育児生活をまとめた。

11050055 田中 直也

「KY はどのようにして発生したか ― KY 語の持つ表現効果と問題点 ―」

少し前に、若者間で「KY（空気読めない）」という、ローマ字の頭文字だけをとった略語が流行り、2007年には、「ユーキャン新語・流行語大賞」の候補語にまでなった。これら、ローマ字の頭文字をとった略語が、どのような背景で発生したのか、今までの略語との違いを明らかにするとともに、ローマ字略語を使うことによる利点・問題点はこういったものなのかを解明するために記述した。

11050061 土居真由美

「三種の神器について」

天皇家にある神の依り代とされる三種の神器の鏡・玉・剣であるが、何故三つなのか、何故この三種類であるかを古事記と歴史的背景から考察した。

その結果、鏡・玉・剣は権威と王権と武力を象徴するとともに、国産みをした伊邪那岐命の子等、三貴子である天照大御神と月読命、須佐之男命をも象徴することが判明した。そして、三種の神器は天皇統治の基礎を固めるため天武天皇が設けたとも考えられる。

11050062 中川 美穂

「葬儀の移り変わりについて」

「なぜ葬儀を行うのか」、「葬儀はいつから始まったのか」という疑問から葬儀の歴史を振り返る。その中で、葬儀業者の需要の増加・事業拡大のきっかけを住環境・社会状況等の変化を押さえ、アンケート結果や図表を用いて考察する。

時代の変化に伴い、葬儀に対する考え方や、葬儀と密接な関係にある墓に対しても考えが変化しているに違いない。この状況に、私たち日本人はどのように捉え、どのように対処しているのかを調査した。

11050063 中島 舞子

「初級の外国人学習者が聞きとる言葉と学習環境」

外国語を学んでも身につかない、その場面になると使えないということがよく起こる。これはどこに原因があるのだろうか。この卒業研究では、外国語学習者が「聞く・話す」の面で、学習する言葉と結びつけることが重要だということを検証するため、初級の外国語学習者にアンケートをとり、考察をした。

どこで誰の言葉を聞き取っているか、そしてそれはどのような生活をしているのかを調べ、学習者にとって理想的な学習環境を考えた。

11050064 中村恵里香

「電子掲示板で使用される用語について」

現在日本国内のインターネットで、一番大きいとされる電子掲示板（2ちゃんねる）。その中で使用されている言葉の多くは、理解がしにくいものばかりである。その2ちゃんねる用語についての解説や、ジャンル内によっての用語の変化、使用頻度などの違いがあるのかを見ていこうと思う。

また、他の掲示板で2ちゃんねる用語を使用すると、なぜ、嫌がられてしまうのだろうか。用語を理解すると同時に、考察していこうと思う。

11050065 中村 由美

「幼児語は必要なのか、なぜ使われ続けているのか」

幼児語は子どもの頃、誰でも使用したことばである。しかし、大人になるにつれて使用することはなくなり、そのほとんどを忘れてしまう。果たして、そのような幼児語は必要なのだろうか。幼児語の語形形成や音韻構造を調べることにより、誰にとって必要なのか、また、幼児語は何のために生まれ、どのように変化を遂げてきたのかなど江戸時代の幼児語を参考に考えた。

11050066 野口 理沙

「中国人から見た日本人のしぐさ」

コミュニケーションには言語、非言語の2種類がある。日本人の非言語コミュニケーションを最も身近な外国人である中国人が見たらどう受け取り、どんな意味だと解釈するのか、またどう思っかななどをアンケートにより調査した。異文化間でのコミュニケーションでは、まず、お互いの文化が異なることを学び、それを理解しようとするのがよりコミュニケーションを円滑に行う為に重要となる。

11050068 埜 沙也加

「漂流するコミュニケーション — コミュニケーションとディスコミュニケーションの考察から考える —」

近年になって無差別に人を殺す事件が多々起こるようになった。そこで、秋葉原通り魔事件、茨城連続殺傷事件の事件を分析し、事件の原因を突き止めたいと考えた。

第1章では、秋葉原通り魔事件の概要、容疑者について取り上げ、第2章では、茨城連続殺傷事件の概要や、容疑者について、第3章では、類似点を、第4章では、事件の問題点を挙げ、終わりに改善点を書きたいと思う。

11050069 早坂 直記

「ばっくれる」とはどのような言葉か

『現代用語の基礎知識 1991年版～2000年版』の中の若者用語を私自身が分類したところ、どの

年でも使用頻度の高い言葉が見つかった。それが「ばっくれる」である。この言葉に焦点を当て、言葉の由来を調べていくと、ある疑問が生じた。その疑問を、言葉の意味・語の成り立ち・語源から調べていき、「ばっくれる」という言葉を詳しく見ると、意外な事実がわかる。そこから、「ばっくれる」の真の意味を求めていく。

11050070 笛田奈緒美

「新丁寧語は一般化されていくのか — 若者の視点から探る —」

本稿では、近年、接客の場において、多く耳にするようになった間違っ言葉遣いが、今後一般化されていくのかを明らかにするために、20代の若者を対象に許容度・使用度と、新丁寧語の印象の意識調査アンケートを行い、それらの言葉遣いが使われる背景を考え、一般化していくのかを調査した。その結果、多くの若者たちは「新丁寧語を認めていない」、「自分は使用しない」と新丁寧語に対して否定的な立場であることがわかった。

11050071 深澤 香織

「摂食障害者の9割が女性であるのはなぜか — 女性と摂食障害とダイエットの関連性 —」

近年、ファッション業界でスーパーモデルの痩せすぎを警告する報道がよくされている。スーパーモデルの極端な痩せ過ぎが、一般の人たちに悪影響を及ぼすというのだ。実際、行き過ぎたダイエットから摂食障害に発展する患者は年々増加しつつある。しかし、摂食障害者の発症者の9割は女性である。そこで男性と女性のダイエットと痩せに対する意識について研究して、なぜ発症者の9割が女性であるのかということについて論じる。

11050072 福村 里奈

「男女の色の知覚力」

色の見え方、捉え方を日常から疑問に思っていたので、今回卒業論文にしたいと思った。明海大学のクラスメイト・サークルの仲間・学内の学生男女30人にアンケートをとりまとめた。その結果、RGBそれぞれの色の数値により、色の判断・識別の基準値を設けることができるということが明らかになった。そして、男女により色の知覚力が違うということも明らかになった。

11050074 前田 遥

「『カフェ』と『喫茶店』」

「カフェ」と「喫茶店」。これはこれまでの飲食業界を振り返ったとき、時代を象徴する外せないキーワードではないだろうか。

近年、「カフェ」と呼ばれる店が増え続け、その一方で「喫茶店」と呼ばれる店は減ってきている。私自身も一般的に「カフェ」と呼ばれる店に行くことが多い。幼い頃、よく父や母に連れて行ってもらったのは「喫茶店」だった。

ではこの「カフェ」と「喫茶店」の違いはなんなのだろうか。

11050075 松永ゆかり

「日本人とチョコレート」

現在、コンビニ・スーパー・売店、どこに行っても売っているチョコレート。子供から大人まで誰にでも愛されているチョコレート。一口食べれば一瞬で幸せになることができるチョコレート。もちろん昔から日本の食べ物だったわけではなく、外国からやってきたものだ。一体チョコレートは日本にどのようにやってきて、昔はどのような存在だったのか。そして、現在に至るまでの日本のチョコレートの歴史をたどる。

11050076 丸山マリア

「日本語学習者のニーズ」

日本語を母語としない日本語学習者は年々増加している。しかし日本語は、英語はもちろん、スペイン語、ドイツ語、フランス語といったヨーロッパ言語よりも限られた地域で話されている言語である。

この小さい島国でしか使われていない日本語を、なぜ学習するのか、どんな目的で日本語を取得するのか、日本語学習のニーズについて研究してみようと思う。

11050077 三浦 大貴

「日本人の日本に対する意識と課題」

世界では、日本のソフトパワーと言われる、サブカルチャーが注目を集めている。そこで、本論文では、日本人は日本に対して、どのような意識を持っているかを明らかにすることを目的に、主に学生を対象にアンケートを実施した。

その結果、日本人は日本に対して、意識しているわけでもなく、知識が薄いということがわかった。

また、私がなぜこの問題に観点をあてたか、今の日本の現状などについて詳しく述べた。

11050078 宮澤 由佳

「昆虫名の語種について」

私は、新潮国語辞典を使って、昆虫の名前について和語、漢語・外来語、混種語のどの語種が多いかを調べた。

その結果、調べた全70種類中、和語が最も多い50種類で、混種語が17種類、漢語・外来語が3種類だった。和語の例として、アブラゼミ・トノサマバッタなどがあり、混種語の例としては、アゲハチョウ・ショウリョウバッタ・ゲンジボタルなどがあった。漢語・外来語は、ゲンゴロウ・ハンミョウ・ギフチョウのみだった。

11050079 望月 夏葉**「児童が学ぶ日本語教育」**

海外の日本語学習者その中でも、児童の学習者について調べたいと思った。

「海外児童の外国語教育の中で、日本語教育は、どのぐらいの位置にあり、どのような勉強がされているのか」「その日本語はどのような目的で、学習者は学んでいるのか」を調べた結果、日本語教育が盛んな国、上位5ヶ国を調べてみると、日本語教育は、第2外国語として取り入れられ、学習目的としては進学や就職のために学ぶといった答えが多かった。

11050080 森田 亮**「野球が国民的スポーツとなった背景とこれからの展望」**

この論文は、野球が日本に伝来してからどのような経緯で今日のように広く普及したのかを、日本で野球が形成された背景を分析しながら明らかにしていく。野球が伝来した過程や、高校野球の文化、日本のプロ野球、日本人選手のMLB挑戦への注目を分析し、野球が今後日本でどのように発展していくかを考察する。

11050081 山田 佳苗**「江戸文化を支えた吉原遊郭」**

遊郭と聞いて、すぐ思いつくのは風俗や売春などのいかかわしいことであろう。現代ではそう言われていてもしょうがない。だが、実は、吉原遊郭は江戸の文化の中心といっても過言ではない場所であったのだ。変化や進化を遂げ、吉原の文化は現代に受け継がれてきた。江戸文化を語る上で、吉原遊郭の存在を無視できないのが、吉原遊郭のすごさである。吉原遊郭は誰もがうらやむところに違いない。そのすばらしさを今回解明したいと思う。

11050087 和田めぐみ**「日本のマンガ文化、実績と歴史」**

日本のマンガは、戦後日本が生み出した日本の誇れる文化の一つと言えよう。現代では老若男女、職業、年齢問わず、誰でもマンガを楽しむ事ができる。マンガは映画や文学と並び、人々のエンターテイメントを豊かにし、日本社会に変化をもたらした。では、どのようにして今日の日本マンガ文化が形成されていったのか。日本マンガは海外にも広がりを見せているが、その人気はどのようなものなのか。いくつかのマンガを例に論じていく。

11050905 高森和香奈**「現代における漢字使用の特徴」**

近年、パソコンや携帯電話の普及によって、字を書く環境が変わってきた。手書きをすることが少なくなり、パソコンや携帯電話で文字を打つことが多くなっている。そのことによる、漢字への

影響について考える。また、その一方で、日本漢字能力検定（漢検）の志願者と合格者は年々増加している。そのため、合格率や漢検受験の目的などから、現代人の漢字に対する意識を調べる。これらのことから、漢字使用のあり方について述べる。

11050906 陳 曉斌

「北京語母語話者の日本語発話時における誤用」

中国人日本語学者における誤用について調べた。中国人学習者にとって、日本語の自動詞と他動詞を区別することは難しい。その原因は、中国語では自動詞と他動詞の区別は文字ではなく、音声によって区別していることがわかった。

また、助詞「は」と「が」の誤用と漢字による誤用についても分析し、漢字は中国から輸入したものであるが、同じ漢字でも、日本語としての意味と中国語としての意味に関する相違点を紹介した。

編集後記

『明海日本語』は、明海大学日本語学科の機関誌として発行され、10年以上の歴史を持つ。スタッフの研究の公表の機会を作り、新設の大学の活動状況を外部に知らせる機能があった。これまでも優秀な論文が本誌で発表されてきた。

『明海日本語』は、10, 11 合併号（2006）以来、研究を活発化するため、大学院生の論文の掲載に門戸を開いた。また13号（2008）以来、「研究ノート」を設けて、教員・院生・学生の研究のエッセンスを要約して伝えられるように配慮した。

提出された論文と研究ノートは、日本語学科専任教員が審査し、場合によっては書き直しを命じ、あるいは掲載を認めないこともある。教員の投稿論文も、相互に審査し、採否については院生と同様の措置をとった。つまり本誌掲載の論文は、レフリー付きの、学術雑誌並みの価値を持つ。なお執筆者どうしが校正刷を見せあって、相互に点検した。

14号での論考の配列は、論文テーマ相互の関連によった。談話や音声に関する対照研究、現代日本語の分析、地域や集団による言語変異の分析などが目立つ。

また、学生の卒業研究の題名と要旨を掲載する。多様なテーマで取り組んだ成果である。明海大学日本語学会の主な構成員である学部学生の記念、思い出になることを期待したい。

来年度以降も年1回刊行のペースを厳守し、卒業生には卒業式に、在校生には新年度のオリエンテーションの際に、配布できるようにしたい。

本号の編集には、大学院博士後期課程の倉持益子・江源が活躍した。また、本学教員の荻原稚佳子が卒業研究要旨の整理にあたった。

2009年1月

井上史雄

「明海日本語」編集規定

- (1) 本誌は、明海大学外国語学部日本語学会内の編集委員会によって編集される。
- (2) 掲載論文は、明海大学外国語学部日本語学会会員および学术交流提携校の教員ならびに明海大学大学院応用言語学研究科関係者によるものとする。
- (3) 論文は、未公刊の学術論文に限る。
- (4) 論文の分量は、ワープロ打ちで、A4判10枚（12,000字程度）以内とする。
- (5) 論文の採否は、編集委員会が決定する。
- (6) 論文の提出方法は、電子メール送信又はフロッピー郵送に限る。
- (7) 原則として、毎年1回、学年度末に発行する。

（平成18（2006）年2月15日修正）

明海日本語ホームページ

<http://kite.meikai.ac.jp/japanese/meikainihongo/>

電子メールアドレス “明海日本語” <meikai_nihongo@yahoo.co.jp>

「明海日本語」第14号

2009年2月24日 印刷

2009年2月28日 発行

編集者 明海大学日本語学会

発行者 代表者 水谷 信子

発行所 明海大学日本語学会

〒279-8550 千葉県浦安市明海8

電話 047-355-5120

印刷所 (株) 外為印刷

〒111-0032 東京都台東区浅草2-29-6

電話 03-3844-3855

MEIKAI NIHONGO

Meikai Japanese Language Journal

No. 14

2009

CONTENTS

Articles

- A study of Japanese Rhetorical Patterns
in Giving OpinionsOGIWARA, Chikako (1)
- Discourse Analysis of Computer-Mediated Communication
on the WebTANABE, Kazuko (13)
- The Expansion of the Usage and Variation of the Function
of the New Honorific Expression “Su”KURAMOCHI, Masuko (25)
- The Current Conditions of the Usage of Adjectives in Literary Japanese
— A comparison between Learners
and Native Speakers —KINOSHITA, Noriaki (37)
- On the Recognition of Japanese Special Morae
in Koreans Learning Japanese:
A Comparison with Native SpeakersREN, Xing (49)
- Expressions of Feelings by Native Japanese Speakers
and Korean Learners of Japanese:
Focusing on Pluses and MinusesHORIUCHI, Takako (59)
- The Current Research Situations
of Linguistic LandscapeJIANG, Yuan (67)
- The Change of the Meanings and Transcriptions of *kirisuto* and *kirisitan*:
Focusing on Japanese Dictionaries and Aozora Library ...LEE, Myungsim (77)
- Loan words in the Glossary
of Seasonal Terms for HaikuYAMANO, Eiko (85)

Study Notes

- The Usage of Japanese Sentence-Final Particles “ne” “yo” “yone”
in Debates: A Focus on Native SpeakersCHENG, Chih Hui (91)
- Japanese Education for Children whose Native Language is not Japanese:
The Requirement of the Usage of the Learner's Native Language
in Japanese EducationSU, Xiaocui (93)
- On Judging the Perception of the Japanese Doubled Consonant
in Chinese Learners of JapaneseSUN, Quanlin (95)
- The Effect of an Increase in the Number of Morae on the similar/
non-similar Decision of Two Trademark Appellations:
Cases of One-mora Increase by Addition
of “su” or “zu” to the End of a WordSUGA, Fusao (97)
- The Multilingual Landscape of Japan:
Department Stores and Welcoming PostersINOUE, Fumio (99)
- Linguistics Usage Survey using Google Street View:
The Linguistics Scene of Kabukicho, Shinjuku-kuHOMMA, Yusuke (101)
- The Advantage of the “Google Scholar”MATSUDA, Naoto (103)
- 2008 Graduation Study ListOGIWARA, Chikako (105)
- Editor's PostscriptINOUE, Fumio (121)

MEIKAI NIHONGO GAKKAI

Meikai Japanese Language Study Society
Akemi 1 Urayasu-Shi, Chiba, Japan